

松の操美人の生理

侠骨今に馨く賊胆猶お腥し

三遊亭圓朝

青空文庫

一席申し上げます。お耳慣れました西洋人情話の外題を、松の操美人の生埋とあらためまして……これは池の端の福地先生が口うつしに教えて下さったお話で、フランスのおとこだ 仏蘭西の 俠客が節婦を助けるといふ趣向、原書は *Buried* 《ベリッド》 a 《エ》 *Life* 《ライフ》 という書名だそうで、酔つた時はちと云い悪い外題でございしますが、生きながら女を土中に埋め、生埋めに致しましたを土中から掘出しまする仏蘭西の話を、日本に翻譯して、地名も人名も、日本の事に致しましただけで、前以てお断りを申さんでは解りませんから、申し上げますが、アレキサンドルを石井山三郎という 俠客にして、此の石井山三郎は、そうしゅううらがごおり 相州 浦賀郡東浦賀の あらいまち 新井町に かいせんとんや 船問屋で名主役を勤めた人で、事実有りました人で、明和の頃名高い人で、此の人の身の上に能く似て居りますから、此の人に擬え、又カウランという美人をお蘭と名づけ、ヴリウという賊がございしますが、是は粥河圖書という宝暦八年に改易に成りました かなもりひょうぶしやうゆう 金森兵部小輔様の重役で千二百石を取った立派なお方だが、身持が悪くて、悪事を働きました事を聞きましたから、これを圖書の身の上

にいたし、又マクスにチャーレという、彼方に悪人がござりますからマクスを眞葛周
玄ちしまれいそうという医者にして、チャーレを千島禮三おなんどやくという金森家の御納戸役にいたし、巴里の
都が江戸の世界、カライの港が相州浦賀で、倫敦が上総の天神山、鉄道は朝船夕
船ねに成っておりますだけで、お話はすべて原書の儘まにしてお聞きに入れますから、宜し
く其方そちらでお聞分けを願います。金森家の瓦解に成りましたから、多く家来も有りましたが
皆散りくばら／＼になりまして、嫡子出雲守、末の子まで、南部大膳大夫様へお
預けに成りました。粥河圖書は年齢二十六七で、色の白い人品の好い仁で、尤も大祿
を取った方は自然品格が違います。大分貯えも有りまして、白金台町へ地面を有ちま
して、庭なども結構にして、有福ゆうふくに暮して居りました。眞葛周玄と云う医者を連れて、
丁度十月十二日池上のお籠りこもりで、唯今以て盛りますが、昔から実に大した講中こうじゆうがあ
りまして、法華宗は講中の気が揃いまして、首に珠数をかけ団扇太鼓を持って出なければ
なりません様に成つて居ります。粥河は素より遊山半分信心は附たりですから、眞葛の外
に長治ちやうじという下男を連れて、それに芳町よしちやうの奴の小兼こかねという芸者、この奴というのは
男らしいという綽名あだなで、この小兼は厭味の無い誠にさつぱりとした女で、芸が善くつて器
量も好うございます。それに客愛想も好いから当時の流行妓はやりっこで家には少しの貯えも有る

という位、もう一人はその頃の狂歌師 談洲樓馬馬だんしゅうろうえんばの弟子で馬作うまさくという男、併し狂歌は猿丸太夫のお尻いんどという赤ツ下手あかべただが一いち中節ちゅうせつを少し呻うなるので、それで客の幫間たいこを持つて世を渡るといふ男、唯此の男の顔を見ると何となく面白くなるという可愛らしい男で、皆様が鼻肩はなかたにして供に連れて歩くといふ、此の五人連で好天気いでぶらぶらと出掛けました。馬わたくし「私は初めて来たので、尤もお宗しゅうし旨しで無いからだが何うも素敵すてきで」

ときよろ／＼する。両側は一面に枝柿えだがきを売る家いえが並んで、其の並びには飴菓子屋汁粉屋飯屋などが居て、常には左のみ賑かではございませんが、一年の活計くわしを二日で取るという位いな苛ひびいだが、実に盛んな事で、お参りの衆は皆首に珠数を掛けて太鼓を叩きます。

馬「斯う何だか珠数と太鼓が無いと極りが悪いようで、もし珠数と太鼓を買おうじゃありませんか、珠数というのを」

圖「馬鹿ア云え、此の連中にそんな物が入るもんか、入らんぜ」

馬「それでも何だか無いと形なりが極りませんから、兼ちやんお待ちよ珠数を買うから…おい婆さん」

婆「はい／＼」

馬「あの珠数は幾らだ」

婆「はいく、其方そちらはなんで三分二朱でございます」

馬「高いね、もう些ちつと安直なのは無いかね、安いので宜しい、今日一日の掛流しだから、安いのが好い、安いのは無いかい、其方そっちの方のは幾らだ」

婆「此方こちらのは白檀ですから一両二分で」

馬「ひやア籠べらぼう棒ぼうに高いく、もつと安いのは無いか、此方こっちのは」

婆「これは紫檀したんですから二分で宜うございます」

馬「まだ高いく、おいほんの間に合せにするのだから」

婆「そんなら梅と桜に遊ばせ」

馬「それは安いかい」

婆「六百文でございます」

馬「妙々梅と桜で六百出しや気儘か、宜しい：皆みなさん様先へ入らっしゃい：じゃア婆さん此こ金れで」

婆「生あいにく憎お釣がございませぬ、お気の毒様で、何うかお端はした銭がございますなら」

馬「じゃア斯うしよう、お参りをして来るからそれ迄に取替えて置いてお呉れ」

婆「はい、畏まりました」

と婆は金を受取り珠数を渡します。馬作は珠数を首に掛け、

馬「そんなら婆さん、屹度頼んだぜ、さア此奴が有りやア大威張だ、時に兼ちゃん何うです大變な賑いですなえ、今日のお賽銭は何のくらい上りましょう、羨しいね私もお祖師様に成りてえ、もしあんな別嬪なぞに拝まれてね」

兼「馬鹿アお云いな勿体ない」

馬「さア来た〜」

と本堂に上り柏手をポン〜。

馬「いや柏手じやア無かつた粗忽かしくツて宜い、南無妙法蓮華経〜南ア無妙ウ法蓮華経もし一寸様子が好いじやアありませんか別嬪ばかりずうととき、色氣の有る物にやア仏様でも敵いませんね、女がお参りに来なくつちやアいけません、何うも鼻筋の通った口元の締つた所は左團次に似て、顴の斯う：髮際や眼の所は故人高助にその儘で、面ざしは團十郎にすつぱりで、あゝありやア先刻遇つた」

兼「何を云つてるのだえ騒々しいねえ」

馬「何さお祖師様のお顔の事さ」

兼「お祖師様のお顔に先刻遇つたかえ」

馬「いえ何さ…扱忠さてちゆうじ 二もお蔭様で一度にふツ切りまして漸く歩けるように成りましたから、お礼に一寸ちよつと是非上らなくツちやアならんと申しましたが、生憎あいにく今日はお約束がございまして、それで私が言伝わたくしを頼まれて参りました宜しく申し上げて呉れと申しました」

圖「これく馬作何を云うのだ」

馬「いえさ、私の友達がお祖師様の御利益ごりやくで横根を吹つ切りましたから、其のお礼のことづかりを云つてる処で」

皆々「アハハハ」

二

これから元名村もとなむらの所へ来ると丹波屋たんばやという茶漬屋があります、此処ここも客が一杯で彼れから右へ切れて、川崎へ掛る石橋の所、妻恋村つまこいむらへ出ようとする角に葎よしず簧張つぱりが有つて、其の頃は流行はやりしました麦藁細工で角兵衛獅子こしらを拵え、又竹に指さした柿などが弁慶に挿さしてあります。床几しょうぎには一寸ちよつと煙草盆があつて、店の方にはおこしに捻鉄ねじかね松風まつかぜに狸たぬきの糞くそなどと

いう駄菓子^{だかし}が並べてございます。唯今茶を汲んで居る娘は年が十八九で、眼元が締り、色くつきりと白くして豊頬^{しもぶくれ}の愛敬のある、少しも白粉^{おしろい}気の無い実に透通^{すきとお}る様な、是が本当の美人と申すので、此の娘が今襷^{たすき}掛^{かけ}で働いて居ります、余り美^{あんな}しいから人が立停^{たちど}つて見て居る様子。

馬「もし旦那^{ちよつと}一寸御覧なさい、素晴しい別嬪^{べっぴん}で、御覧なさいあの何うも前掛^{まへかけ}などが垢染^{あかぢ}みて居るが何うも別嬪^{べっぴん}で」

圖「成程是は美人だ」

馬「木^き地^じで化粧^{けしょう}なしで綺麗だから、何うも得て何処^{どこ}か悪い所^{ところ}の有るもんだが、こりやア疵^{きず}気^げなしの尤^{えら}い玉^{たま}で」

周玄は中々の助平だから先刻から途々^{みちく}女を見て悦んで居る所へ、

馬「先生何うです彼の娘は見事じやアありませんか」

周「は、ア成^なる^アく^いやこれは美人、こりやア恐入^{おそ}つた代^{しろもの}物^{もの}だ、もし彼^あの床^あ几^いに腰^{こし}を掛^かけて居る客^{きやく}ね、茶は呑みたく無いが、あの娘を見たい計^{はかり}りで腰^{こし}を掛^かけて居ますわ、実に古今無類^{むるい}の嬪^{せん}妍^{けん}窈^{よう}窕^{たう}たる物、正に是れ沈^{ちん}魚^{ぎよ}落^{らく}雁^{がん}閉^{へい}月^{げつ}羞^{しゆう}花^かの粧^{よそお}いだ」

馬「は、当^{とう}婦^き大^{だい}黄^{おう}芍^{しやく}薬^{やく}桂^{けい}枝^しかね、薬^{やく}の名^なのような賞^ほめ方^{かた}だからおかしい、何^{なに}しろ一^{いち}

よつと
寸休んで近くで拝見などは何うでげしよう」

皆々「それがよかろう」

馬「はい御免」

娘「入らつしやいまし」

先から居る客「こりやア大きにお邪魔を致しやした、どれ出掛けましよう」

娘「まア御ご緩ゆつりと遊あそばしまし左様なら有難う」

馬「旦那御ご覧らんじろ今の三人連づれは顔附でも知れるが皆みなな助平れん連で、此家ここの娘を見たばかりでもう煙草入を忘れて往いきましたぜ」

圖「そりやア困るだろう、返して遣んな」

馬「返せたツて此の人込の中で知れやアしません、へゝゝゝこりやアお祖師様わたくしから私への授かり物で、有難い、いえさ、向むこでもこの人込の中だから気が附きやアしません、忘れて居ますわ」

と懷の中へ入れる。

圖「止せといえばよ、手前お祖師様の罰ばちが当るぜ、止しなよ」

と云う所へ前の客はきよろゝまなこ眼で遣つて来まして、

客「只今此処へ煙草入を忘れましたが後で気が付きましたので、もし此処にやア落ちていませんでしたか」

馬作は不性無承に懷から煙草入を出しまして、

馬「はい今追懸けて返して上げようと思つて居たが、是ですか」

客「へいこれでございます、有難うございました、いえも詰らん煙草入ですが途中で煙草が無いと困りますから、左様なら有難うございます」

とずいと往つてしまう。馬作は後で口を明いて向を眺めて、

馬「あゝあれだ、取りに来ようが余り早い取りに来ようだ」

圖「狡い事をするつまり損をするぜ」

馬「損をするつてえ且那是迄私は何にでも損をした事はございません、そりやアもう、からツきし酔つてお座敷を勤めてもね、物を忘れた事はありません、そりやアもう其処らに有る物を何でも拾つて袂へ入れてね、お肴でも何でも構やアしません、それだから家へ帰るとね何時でも手拭の八本位袂から出るので、そりやア実に慥なもので…いや待てよ…あゝ珠数の釣を取るのを忘れた」

圖「はゝゝそれ見ろ、直に罰が当たった」

馬「いや覚えましい、時に兼ちゃんは何うしたろう、まだ来ねえ、だが旦那あの妓ぐれえ
買喰かいぐいの好きな妓はありませんぜ、先刻さつきも大きな樽柿ふかと蒸し芋ふかを両方の手に持って、歩き
ながらこう両方の喰競くいくらべを為ながら：あゝ来たゝ：兼ちゃあん此処だゝ、あんまり
遅いから待つて居たので」

兼「おや左様そう、今頼まれた物を買つてる中遅うちくなつたの」

馬「頼まれ物だと、なんだ串柿かね、おい姉さんねえお茶をおくれ」

茶碗も沢山たんとはございませんから、お客の帰る傍から其の茶碗を洗つてしとやかに茶を汲
んで出す。

娘「貴方お茶をお上り遊ばせ」

と出すのを見ると元小兼の主方しゅうかたの娘で、本多長門守様の御家来岩瀬某なにがしと申し、二百
石を頂戴した立派な所のお嬢様で何う零落おちふれてこんな葭簣張よしずつばりに渋茶を売つて居るかど、
小兼はじつと娘の顔を見詰めた切り、暫くは口もきけません。

兼「お嬢様まア何うなすつた」

娘「兼や誠に面目次第も無い、お母様つかさまと私と一昨年からこんな業わざをして」

兼「ほんにまアねえ、私わたくしも御存じの母が亡くなりまして其の亡くなる前にも、何うぞして

入らつしやる所が知れ無いかと申して、何うか尋ねて御恩に成つたお礼を申してと、もう此方こなたに斯うやつて入らつしやる事が知れゝば、及ばずながら疾とうにお力にも成つて上げましたものを、もう此方こなたに入らつしやるとは知りませんもんですから…本當にまア好よく…馬作さん何だつて勿体ない、お嬢様にお茶など戴いいて好いい気になつて、彼方あつちへお出でよう馬「だつて茶店の姉さんに此方こつちから茶を汲くんで出す奴が有るものか」

兼「こりやア私の御主人様だよ」

娘「お母つかさま様兼ちよつとが参りましたよ、一寸お逢あい遊あばせ」

破れた二枚屏風の中に年齢五十五六の老母、三年越し喘息に悩みこんく咳をしながら、母「兼や誠に暫ちく」

三

兼「御新造様誠に御無沙汰致しました」

母「まだお前が十五六の時分に逢あつた切りで、それから三年振で今日逢あうと、一寸ちよつと見みては話も出来ない位見忘れる様に大きく成なつたのう、人の噂うわさに大層働はたらきの好よい芸者芸者になつた

とは聞いたが、お前は一体親孝行で母を大事にしたが、旦那様もお前は感心だ、あゝいう芸者などには似合わぬ者とお誉めなすつたが、是も孝行の徳だ、私は又斯んな姿になるまで零落おちぶれしました」

兼「もう唯今お嬢様にも左様申すので、何うかして何処どこに入らっしゃるか知れ無い訳もあるまいと尋ねましても何うしても知れませんが、慥たしか何時いつぞや三田みたに入らっしゃる様子を聞きましたか」

母「三田の三角の所ところの詰らない所ところに引込んで、それから此方こつちへ便たよつて来て、誠に私も三年越し喘息で、今にも死ぬかと思うが死なれもし無いで、早く死んだら娘あねにも却かえつて樂をさせる様に成ると思つて居るばかりで、此の節此方こつちへ来て麦藁細工を夜なべに内職して、夜寝る眼も寝あずに娘あねが大事にしてくれるから、それ故私も斯こうやって命を繋いで居るばかりで、お前に遇あつても何一つ遣る事も出来ないで」

兼「何う致しまして飛んだ事を、私わたくしももう何です、有難い事に皆様ひいきが最ひ貞きにして下さつて、明日あしたももうお約束でいけません、明後日は屹度此方こつちへお尋ね申します、お力ちからに成るといふ訳にも参りますまいが、母の遺言もごさいますし、何うぞ氣を落さずに氣しづかを確しりとなすつて居て下さいまし、これは誠に少しばかりですが」

と合切袋がっさいぶくろから小粒を二つばかり出しまして、

兼「これはほんの私わたくしの心ばかり何うか何ぞ召上物めしあがりものでも」

母「そんな心配しないで好いよ、私はお前に何ぞ上げようと思つて居るに却かえつて貰つては」

兼「いゝえほんの心ばかりで、生憎あいにく今日は持合せがなんですから又出直して参ります、

本当に能くねえ斯よんな所ところにお住いで」

馬「兼ちゃんお出掛に成りましたよ、行くよ」

兼「先へお出でよ、直すくに行くから」

名残り惜しいから何かぐずぐずして「何れ又」と小兼は出掛けます。娘も見送りながら

葭簀張よしすつぱりを出ようとすると、川崎道から参りましたのは相州東浦賀の名主役石井山三郎で、

連れて参つた男は西浦賀の江戸屋半治えどやはんじ、ちよつと競肌いなきな男で、これは芳町よしちようの小兼と疾

うより深い中で、今は其の叔父の銚子屋へ預けの身の上、互に逢いたいと一心に思つて居

るところ、

兼「おや半ちゃん、おや旦那誠にお久し振、何うしなすつたか一寸御機嫌伺に上りたい

と思つても船が嫌いなもんですから、此処こゝでまアお目に懸るとは本當に思い掛けない訳で」

山「実に此処あおで遇うとはなア、兼公、半公もお前めえに逢いてえだろが出られねえ首尾で、

今日は漸く暇を貰つて出て来たが、直ぐお前の所へも往けねえというのは何分世間を憚る
訳で」

兼「まあ何でも好い、嬉しいねえ、此処で旦那にお目に懸るとは本当に馬作さん御利益で」
馬「さて旦那誠に暫く、もし早速だが聞いてお呉んなせえ、兼ちゃんはお宗旨では無かつたのを此の節半ちゃんに逢わして下さいって、それからの信心でね、今日もお参りに往くから一緒に往こうとツて兼ちゃんのお供で」

山「そりやア好いがお客が先へ往つた様子だ、早く往きねえ」

馬「なアに彼れは二三度遇つた客で、なにさ一向訳の分らん奴で、途中で落合つてはツ直さまお供という様な訳ですから、此処で旦那にお目に懸れば直に馬の乗替えお客の乗替えてえ奴で、実に此処でお目に懸るたア有難えね、もし今もね兼ちゃんがお祖師様を拜むのを傍で聞いてましたが、あの混雑する中で半ちゃんにく〜半ちゃんにく〜というのが能く聞えるのでこれは何うしても是非両方からお賽銭を取るの、旦那今日はずうつと川崎泊りでしよう、今夜は藤屋へ泊つて半ちゃんに逢わして遣つて下さい」

と馬作はのべつに喋つて居ります。山三郎は其の話を聞きながし、心ともなく今小兼の出て来た葎簀張の中を見ますると十八九の綺麗な娘、思わず驚きまして、

山「美しい娘だのう」

兼「旦那あれは私の旧もとの御主人様ですから、お願いで、何うぞ休んで沢山たんお茶代を置いてツて下さい」

と半治と二人を家の中へ突込む様にして、馬作を連れて出て往つて仕舞いました。

山「能く慣れない事が出来ますね」

娘「はい誠に慣れませんで、お客様へ前後して間違つていけません」

といううち屏風の内でこんくこんく咳入りまして、今にも死ぬかと思う程に苦しく見える喘息で、娘はお客にも構わず飛んで往ゆきまして、撫でたり胸を押したり介抱する様子を、山三郎は見て居りましたが、孝心面おもてに現われてなかく浮気や外見みえでする介抱でございませぬ。

山「成程此の介抱は容易に出来ない介抱だ、感心な娘だのう半治、客にも構わず夢中になつて母親を一生懸命に看病するが、あれはなかく出来るもので無い」

と頻しきりに感心して見て居ります。

四

山三郎は娘の老母を看病する体を感じて見て居りましたが、咳も少し止った様子。

山「姉さん治まったかえ」

娘「はい有難うございます、もう少し立ちますと治ります、もう恟り致しました」

山「さぞお母さんはせつのうございましょう」

母「誠に失礼でございですが、お客様を置きまして介抱いたしますが、もう咳込んで参りますと今にも息が止るかと思ひますくらいでございします、寒くなりますと昼夜に四五度ぐらい咳込みますから」

山「さぞお困りで有ろう、併し感心な娘御で、お前さんは好い子を持ってお仕合せで」

母「はい、もう此の娘の手一つ計りでございします、是から又寒くなりますと、夜分寝ずに咳きますので誠に堪えかねます、寧そ一ト思いに死んだら此の娘も助かると思ひますけれども、死ぬにも死なれませんしねえ貴方」

山「そんな弱い気を出してはいけません、何か外に別段親類も何も無いのかね」

母「はい」

山「唯お前さんと此のお娘さん切かね、私は田舎者で相州東浦賀の者で、小兼に聞けば能

く分りませんが、入らざる奴と思し召すかは知りませんが、年も往かん娘御が彼の介抱をなさる様子、実に孝心で、私は始めてお目に懸ったが、中々親孝行という事は出来ないもので、心底から感心しました、真実の処を申すが、女ばかりで別に親類もなく相談する処も無くつてお困りの節は、見継いで上げますから、小兼に話して手紙の一本も遣しなされば直に出て来て話相手にも成りましようから、お心置なく小兼にまで一寸言伝をなさるよう」

母「有難うございます、御親切様に、彼の母は私共へ勤めて実銘な者で、それも亡くなりましたそうですが、それでも彼が芸者とか何とかで母を養いまして、商売柄に似合わない親切者で、何うか鼻屑ひいきにしてお遣り遊ばして」

山「誠に少ないがお母さんに此金これで何ぞ温かい物でも買って上げて」

と紙入を出して萌黄もえぎ金きん欄らんの金入から取出しました、其の頃はガクで入って居りますから、何十両だか勘定の分らん程ざくりと掴出して小菊の紙に包み、

山「少許すこしばか許りですが、もう行きますからお茶代に」

と出して出掛けます。

娘「これはまア沢山に有難うございます、もしお母さん兼がお茶代を心附けて呉れました

から、彼の方が沢山置いて下さいました、大変搦んで」

母「左様かえ、お前が私を孝行にするから御祖師様の御利益で此のお錢も」

と開けて見ると中は金で十兩許り、其の頃の十兩ですから恟りして

母「おやまあお金だよ」

娘「ほんとにまあこんなに沢山、御親切な方ですnee、彼様に仰しやつて、浦賀の者だから手紙をよこせとまで仰しやつて有難い事ですnee、まあお母さん少し落着いたらお粥でもお上り遊ばせ、どれお夕飯の支度を為しましょう」

と娘は右の金を神棚へ上げ、その中暗くなるから彼方此方片付けるうちぼつーりくと降出して来ました。日癖の所為か、今晴れたかと思うと烈しく降出して来て、込合います往来もぼつたりと止りました。娘は辺を片附けようと思うと縁台の上に蒔黄金欄の結構な金入が乗つて有るから、

娘「おやお母さん大変な事を為すつた、あの先刻沢山お心附を下すつた旦那様が、お金入を忘れて入らつしやいましたよ、中には余程お金が有りますが嘸お困りでございませう、彼の方の事ですから外にもお貯えはありませうが、兎に角私がお宿迄お届け申しませう」

母「それでもお前、お宿は浦賀だと仰しやつたが」

娘「いえあの今夜は川崎の本藤^{もとふじ}へ泊るからとのお話を聞きましたから、小兼も慥^{たし}かそこへ往^いく様子ですし、ひよつとお差^{さしつかえ}支^さでも有るとお気の毒ですから、ちよつくり川崎まで行つて参ります、それに雨は降るし日は暮^{くれ}るし、もうお客も有りますまいから心配しないで留守をして居て下さい、少しの間に往つて来ますから」

と母の枕元に手当をして、両^{りょうづま}褌^{ふんどし}取つて、小風呂敷に蒔^ま黄^{わう}金^{こん}欄^{らん}の金入を包み、帯の間へ挿^{はさ}んで戸を開けて出ようとすると、軒下に立つて居る武^{さむらい}士^し、雨具が無いから素^す跣^{はだし}で其の頃は雪駄でありますから、それを腰に挿^さんで戸に倚^より掛^かつて居る。

武「これはお邪魔で、なに拙者雨具を持たんで少し軒下を拝借して」

娘「それはお困りさまで、中へ入つてお休み遊ばせ」

武「姉^{ねえ}さん此の降るのに何^{どこ}処^こへお出でだ」

娘「私^{わたくし}はあの六郷の方まで参るので」

武「六郷の方^ゆへ行くのなら幸いだ、拙者もこれから参るのだから一緒に行^ゆこう」

娘「私^{わたくし}は急ぎますから」

と不気味だからそこへに挨拶して行き過ぎますと、武^{さむらい}士^しはピシヤ／＼供の仲^{ちゆうげん}間^{かん}

と一緒に跡を追つて来る。此方は弥々変だと思えますから早足にして、あれから堤方を離れて道塚へ出て、徳持村の靈巖寺を横に見て西塚村へ出る畑中の小高い処、此方は藪置の屏風の様になつて居る草原の処を通り掛ると、「姉さん待ちな」といきなりさむらい、うしろ突然武士が後から襟上を掴むから「あれー」と言う中に足首を取つて無理に藪陰へ担ぎ込み「ひッひッ」というを引□し、仲間間は此の間に帯の間に挿んで有りました彼の金入を引奪り「是を盗られては私が」といううち武士は□□つて怪しからん振舞をしようとする処へ通り掛つた一人は粥河圖書で、傍から見兼て飛んで入り、突然武士の襟上取つて引倒し、又仲間をやつと云つて放り出した。仲間間は仰向になつて見ると驚きました。傍らに一本挿の品格の好い男が佇んで居るから少し怯れて居ました。

圖「何だ手前は、何をやる、斯様な怪からん事をして何と心得て居る、何だ此の女を辱めんとするのか、捨置き難い奴だが今日日は信心参りの事だから許す、行け〜」

仲「なんだ、行けとはなんだ、人をいきなり投げやアがツて、此の野郎叩くじくぞ」と云ううち今一人の武士は引抜いて切つて掛る、無慙に切られるような圖書でない。処へ眞葛周玄が駈けて来るといふ、一寸一息して後を申上げます。

五

西塚村で孝女お蘭が災難に遇います処へ、通り掛った粥河圖書が、悪武士を取つて投げます、片方はなか／＼きかん奴で、大胆不敵の奴で長い刀を引抜いて切つて掛る、切られるようなる人で無いから、粥河圖書は短かな二尺三寸ばかりの刀をもつて、胸打にしてどーんと打込むと、彼の者は切られたと思ひ、腕前に恐れてばら／＼／＼下男諸共転がるように、田甫畦道の嫌いなく逃延びる。所へ、少し後れた眞葛周玄は駈付けて、周「何ういふ訳か分りませんが、まア宜い塩梅に此の娘に疵が付かないで、おや此の娘は先刻茶店に出て居たあの石橋の際の、何うしてまアこんな処へ」

娘「はい有難うございます、思ひ掛なく旦那様が好い所へお通り掛りで、厭な人が後から附いて来て川崎まで道連になると申しますから、私はぎよつとして逃げようと思ひますと、出しぬけに後から抱付かれ、殺されようとする処をお助け下さつて誠に有難うございます」

周「まア／＼怪我が無くつて宜かつた併し何か取られはせんかえ」

娘「はい誠に濟まない事を致しました、私の店へお休みなすつたお方が忘れ物をなすつて、

それをお届け申しましようど川崎の藤屋まで参ります途中で、お金の入って有る物を只今の悪者が帯の間から持つて逃げました」

周「金入には多分に入つて居たのかえ」

娘「はい」

周「そのくらいなものはまア宜い、金づくには替えられないお前の身に怪我さえ無ければ宜しい、それは先方へ話して金高が分りさえすれば何うにでも成る此処を通り掛つてお助け申した以上は：何さそれは多分でも有るまいから、此処においでになる大夫が如何様とも致して進ぜられる、何しろお家まで送つてからの事、それからお話は家へ往つて内訳話に致しましょう、ねえ大夫それが宜いじやア有りませんか」

圖「それも左様だ、それじやア宜しき様に」

周「それは僕の胸中に心得て居りますから」

と兩人が娘の後先に附添つて茶店へ歸つて来ました。

娘「お母さん飛んだ災難に逢つて歸りました」

母「なに災難に逢つたと、どんな災難に、だから云わない事じやア無い」

娘「悪武士に掴まつて私はもう殺される処を、通り掛りの旦那様に助けられて、そして

其の方は先刻お休みなすつたお方で」

母「おやまア飛んだ事、貴方何うも何ともお礼の申し様もございませぬ、見苦しゅうございませぬが何卒此方へ」

周「はいくさア大夫此方へ、扱私先刻此処へ休んだ者で、処が此方のお嬢様が強口に遇おうという処を斯うやつて計らずもこうお助け申すというも何ぞの縁で、お母さん私は眞葛周玄という無骨者で、此の後は何卒別懇に、扱実は先刻此方へお寄り申して、小兼とのお話を段々承つたが、あの小兼は大夫が長らくの間の御鼻肩で、それから様子を聞きましたが、どうか前は本多長門殿の御家来だそうで」

母「はい、申すも面目ございませぬが、元は岩瀬と申し、少々はお高も戴きました者でございませぬが、金森様の事に付いてお屋敷は不首尾となり、殿様へ種々御意見を申し上げ、諫言とかをいたしたので重役の憎みを受け、御暇になりましたが、なんの此の屋敷ばかり日は照らぬという気性で浪人致し、其の後浪宅において切腹いたし、私もそれから続いての心配が病氣になつて」

周「へえそれはやお氣の毒な訳で、就ては嬢さんをお助けなすつた大夫は、身柄は小兼にお聞きになれば分りますが、前々は今お話しの金森家の重臣で、千石余をお取り遊

ばしたお方で、主家は彼の通りの大變で、余儀なく只今は白金台町にお浪宅ではありませんが、お貯えが有つて、何一つ御不足の無いお身の上で、お庭なぞも手広く取つて極お氣樂のおくらしですが、以前と違いお手少なで、只今以て御新造が無いので何うか一人欲いと仰しやるので、僕も種々お世話を申して、好いのをと思つうが、扱何うも長し短しで丁度好いと云うのが無いもので、今の身の上は町人と交際もする身の上だがまさか町人と縁組をするも嫌だし、何か手捌きも出来るような柔和な屋敷者で、遊ばせ言葉で無ければと仰しやる、そうかと云つて不器量でもいかんし、誠に僕も殆ど閉口いたす、処が先刻此の店へ腰を掛けて御息女を見られた処が、殊の外御意に入つて何うかあれをと仰しやる、尤もお母さんぐるみお引取申しても宜しい訳で、実は小兼に一寸其の橋渡しを頼もうと思つて居るうち、他に客でも出来たか逃げたので、甚だ失敬だが僕が打つけにと立戻つて来る途中で、前の始末で助けて上げたは、是も全く御縁だから、何卒お母さん得心して速かに承諾して下さい、僕が媒介する、お聞濟なれば誠に満足で、何うか平に御承知を願いたい」

母「はい、思召おぼしめしの段は誠に有難うございますが、何どうも只今の身の上では、貴方方の様な立派な処へ参られもしませんし、それに身丈みなりこそ大きゆうございますが、誠に子供の様でございますから、世間知らずで中々もう立派なお家の御新造ごしんぞになるなどは出来ませんので」

周「あれさ、そんな事を仰しやつても其れはいかん、貴方のお目から左様そでもあろうが、其処そこがさ、それ、御相談で段々習おうよりは慣れろで、下世話でも能く云う事で習つて出来ない事はない、何でも為すれば出来ますから」

母「有難うございますが、此の事ばかりは当人が得心しませんでは親の一存にもゆきませんから、篤とくと考えて娘とも相談の上御挨拶致しますから、四五日何うかお待ちなすつて」
周「四五日などと云つて、承われば置忘れた人の金入とかを届けようとて、途みちで災難に遇あつて、それを向むこへ掛合つて上げようと心配して居るくらいな所」

母「お前何かえ、彼れあを盗まれたのかえ」

娘「はい、飛んだ事を致しました、担かつがれて行く時、帯の間に挿はき居りましたのを、仲ち間ゆうげん体の者が手を入れて抜出して持つて往ゆきました、何うしたら宜ようございましたよう」

母「え、其れを奪られては」

周「それも大夫が其の金を向へ償つて、さのみ大した事でも有りませうから、それを此方で整然として、いえさ誠に失敬だが、それは大夫の方で何の様に致されようから、そんな事は心配なしに、相談は早いが宜しい、何でも命を助けた恩人が頼む事だから、貴方の方でも嫌とは仰しやれまい、殊に結構な事で、此の上も無く目出度い事で、何うか早々結納を取交わして、いえも善は急いで早い方が宜しい、早いがよろしい、妙だ、先刻菓子を包もうと糊入を買おうと思つたら、中奉書を出したから買つといたが、こゝに五枚残つて居る、妙だ、硯箱がある、早速書きましよう、え、目録は何で、帯代が三十両、宜しい、昆布、白髪、扇、※、柳樽宜しい」

と無闇に書立て、粥河圖書の眼の前で名前を書いて彼方へ此方へと遣取りをさせました。母親は恩人だから厭とも云われず、娘は唯もじくして居る。周玄は結納を取替わし無理無体に約定を極めて、

周「兎も角明朝僕が又上ります」

と独りで承知して帰りました。扱てお話は二つになりまして、川崎の本藤にては山三郎半治小かね馬作の四人が一つの座敷で、

馬「何うも今日ほど不思議で、何だか嬉しくって成らねえ事ア無えね、もし旦那忘れもしない六年跡のお祭で、兼ちゃんが思い切つてずうつと手古舞てこまいになって出た姿が、大評判おおひょうばんで、半ちゃんはその時の姿を見て岡惚おかぼれをして、とうとう斯こうなつたが、兄さんが固くつてお家を不首尾うちかぶつて居るうち、兼ちゃんが独りで見継みついで居るなあんて、本当に女の子に可愛がられて遊んで居るなどは世の中に余り類が有りませぬぜ、え、鰻、これは結構、有難く頂戴」

山「師匠相替らず延のべつ続つけだのう、どうもサ師匠の顔を見ると自然ひとりでに可笑しくなるよ」

馬「私も貴方のお顔を見るとせい／＼しますよ、何うか何時いつまでもお顔を見て居てえ」

山「時に先刻さつき休んだ茶店の娘の、彼は好いいい娘こだのう」

兼「好いいい娘こだつて貴方あれ彼は二百石も取つた岩瀬主水様と云う私わたくしのお母ふくろが勤めたお屋敷のお嬢様で、お運が悪いので、殿様のお屋敷に騒動が出来て、旦那様は：半元服したような名は何なんてえのですかねえ：そら意見する事は」

山「諫言かんげんか」

兼「腹切はなんてえの」

山「切腹か」

兼「そうく、旦那様が、その半元服をなすつたもんだから、到頭あんなに零落おちぶれてしまつたんですが、それでもお嬢様があゝ遣つて彼様に親孝行をなさるんですよ、だがあんな扮装なりをして入らしても透すきとお通とおるような好い御器量で」

山「己もまだ彼の位好い女を見たことがねえ」

馬「新井町の旦那が見た事が無いと云うが、本当に彼のくらの娘は少ねえ、併し彼の娘の方でも旦那に氣のあつた筈で、十両ばかり少ねえよとぎっくり置いたというから、定めし氣がありましたろう」

山「師匠じゃアあるめえし金を見て氣のある奴が有るものか、おゝそれで氣が付いた、此家へ祝儀を遣らなくつちやアいかん、おい半治包んで」

と金入を出そうと思つて、ふと懷中を搜りますと無いから、

山「オヤ金入を落したか、こゝと、あ先刻彼の娘の所へ心附けた時紙入から出したが、包んで遣つた儘忘れて来た」

馬「そりやアおいねえ事をしました、余程有りましたろう」

山「なに些と計りさ、二十両も有つたらう」

馬「そりやア大変だ、私が取つて来ましよう」

山「宜いわ、失る時にやア失るから大騒ぎやつて行かなくつても宜い、彼ア云う親孝行の娘だから有りやア取つて置いて呉れる」

馬「そりやア左様ですが、親孝行でも兼ちゃんの前じやア云い悪いが人間の心は変り易いから」

山「お前とは違うよ」

馬「それでも知慧附ける奴が有りますからねえ」

山「宜いよ、まだ掛守の中に金が有るから遣つて呉れ」

と総花でずらりと行き渡ります。

山「さア今夜は早寝にして、兼公は久し振だから半治の脇へ寝かして、師匠、お前と己は此方へ寝よう」

と是から襖を閉つて障子を締め、夜具を二つ宛並べて敷く。

山「おい其方の床は離さねえでも宜い、師匠何をして居るのだ」

馬「へい、襖を閉切つていけるから斯う枕元に立つて立番をしているので、これから縁側へ整然とお湯を持つて行くんだ、何うです今夜はひと役二分宛と極めましょう」

山「そんな慾張を云わねえで早く来て寝て仕舞いねえ」

馬「何うせ今夜は眠られねえね」
とびしやりと襖を閉切ります。

七

此方は三年振で逢つて、

兼「本当にまア、何うしてまア、好く来てお呉れだねえ」

半「己も茫然して銚子屋に預けられて居るが、もう半年も辛抱すれば新井町の旦那が兄さんに話をして遣るから、少しの間辛抱しろというから、それを楽しみに世間に見られねえ様にして居るのよ」

兼「私の方からは、必ず手紙で何時幾日に何うすると、ちゃんと極めて上げるのに、稀に手紙の返辞の一本ぐらいよこしても宜いじゃア無いか」

半「銚子屋のは頑固いからそうく出歩く訳にもゆかず、そりやア己だつても心配はして居るけれども、左様はいかねえ」

兼「本当に男と云うものは情のない者と思つて居るが、情のある人てえものは凡そ無いも

ので」

半「そりやアお前の厄介めえになつて悉皆まるで小遣まで貰つて遊んで居るんだから、些ちつとは己だつて義理も人情も知つて居るから、己が世に出るようになればお前めえにも芸者は廃やめさしてえと思つて居る」

兼「私も年は取るし、彼あれこれ是と考えると蠟燭の心のたつ様で、終しまいにやア桂庵けいあんばあ婆あに追おい遣かわれるように成るだろうと大抵てえく心配さ、愚痴ぐちをいうようだがお前まえの身みが定さだまらないではと極きまりを付けようと思つても、船でなければ行かれないし、案じてばつかり、本当にお前義理が悪いよ」

馬「旦那、こりやア寝られませんぜ」

山「大変な処とこへ来たなア」

馬「御ごもつと尤もで、実に恐れ入つた」

山「黙つて寝た振をして居ねえ」

馬「どうも寝られませんな、斯こういう事には時々出合いますが一番寿命の毒だ、まア旦那お寝やすみなさい」

と一際ひときわ蕭然ひっそりとする。時に隣座敷は武士体さむらいていのお客、降込められて遅くなつて藤屋へ

着き、是から湯にでも入ろうとする処を、廊下では二人で窃そつと覗のぞいて居る。

男「貴方そう仰しやるが、これが間違になるといけませんぜ」

田舎者「宿屋の番頭さんは物の間違にならん様にするが当あたりまえ然えで、私わしが目で見ても証拠しやうこが有るので、なに間違えは好ええ、私わしが脊負しよつて立つ」

番「そんなら屹度きつとよ宜ようございますか」

田「えゝも好ええちゆうに」

番「御免下さい」

と宿屋の番頭は障子をさらりと開けて、

番「お草臥くたびれさま様で」

武士「大きに厄介で」

番「先程は沢山お茶代を有難うございます、主人あるじは宿しゆく内ないに少し寄合よあがござりまして只今帰りましたので碌々お礼も申し上げませんで、えー少々旦那様うかやに伺うかがいますが、此所こゝに入らつしやるお方はお相宿のお方ですが、お荷物が紛ふんじつ失致しじしまして、何ういう間違か貴方の床の間に有ります其のお荷物が私わしのだと仰しやるので、判はつきり然えとは分りませんが念ねんの為ために改めて見たいところ被おっしや仰おほるので、誠に失礼ではございますがお荷物の処を」

田舎「へい御免なせえ、お前様だ」

武士「何だと」

田「お前様まえさまア丹波屋たんぱで飯まんまアたべて居たが、雨たんと降らねえうち段々人が出て来たが、まだ沢山客なが無えうち己うらと此の鹿かの八はちと斯こう斜はすけえに並んで飯たべて居ると、お前様ア斯う並んで酒え呑んで、お前様ア先い出るとき緩ゆるりと食べるとつて会あ積せきして、お前様ア忘れもしねえ、なんとお武士様さむらいさまでも身柄のある人ア違つたもんだ、己うらのような百姓ひやくしやうに傍そばへ参つて緩ゆつくりてえ挨拶して行つたアえらいねえと噂うわさアして、お前まえさま帰つて仕舞つた後あとで見ると置いた包つゝみが無えから後を追掛おつかけてお前まえさまア尋ねたが、混雑こむな中だから知れましねえ、漸あく後あとを追つて参まゐりまして、此家こゝへ来るとお前まえ様さま足あい洗つて上あるところだ、他人ひとの荷物を自分の荷物のように知らぬ顔をして呆れた人だア」

武「怪けしからん奴だ、慌あわてゝ詰らん事をいうな、これ、手前てまえの荷物を失つたと云うのか、これ、能く似た物も有る物だから気をつけて口をきけ、他ほかのことゝは違ちがうぞ」

田「他ほかの事とは違ちがうと、とぼけたつていけねえ、あんでも丹波屋の横の座敷で斜はすになつて飯まんまア食つて居たとき、お前まえ緩ゆるくりとつて出て往つたから、町てえねえ 噂うわさなお武士さむらいだと思つて居つたが、後あとに包あみが無なえから後あとを追つかけて境やまじゆうたす 内うち 索さくねたが知れ無なえから、まア此家こゝへ来

るとお前さま足い垢れたて、洗つて上る所、荷物に木札が附いてるから見れば知れる、相
うしゅうみうらごおりたかざわまち いげたやよねぞう たし よのぶろしき きれ たかぎ
州 三浦郡 高沢町 井桁屋米藏と慥かに四布風呂敷に白い切で女房が縫つて、高
沢井桁米と書いてあるが証拠だ中結えもある、どうも御人体にも似合わねえ、他人
の荷物を持つて其処へ置いて何だ」
武「これ如何に其の方の荷物が紛失したとて濫りに他人を賊といつては濟まんで、苟く
も武士たる者が他人の荷物を持つて己の物とし賊なぞを働く様なる者と思うか、手前は拙
者を賊に落すか、他人の荷物を盗んだというのか」
田「盗まねえものが此所に有るものか、己が飯喰つて魂消て誉めて居た傍に置いた荷物
が無え、何より中の品物が証拠だ、麦藁細工の香箱が七つに御守がある、そりやア村の多
治郎、勘太郎、新藏、文吉、藤治郎、多藏、彌五右衛門の七人に買つて来て呉れ
てえ頼まれて、御守が七つ御供物が七つある、それは宜えが金が二十両脇から預かつて、
小さい風呂敷に包んで金がある」

武「呆たわけた事をいうな、麦藁細工が七つ有ろうが、金が有ろうがそれが盗んだという証拠に成るものか、これ、番頭、これへ出る」

番「私わたくしは分りませんが証拠のない詰らん事をいってお武家ぶけさま様に御立腹おさせ申して甚だ迷惑めいわくします」

田「迷惑するたつて現げんぜえ在此こゝ処こゝに」

武「じゃア手前てまえ荷物をあらた検めさして遣やるまいものでもないが、若もし包つ、みを解ほいて中の荷物が相違致すと余儀なく手前の首を切らなければならん、武士の荷物を検め、賊ぞく名みやうを負わしめて間違つた恐れ入つたでは濟ゆまんぞ、今までの失礼も勘弁し難い処だが、田舎者で分らん奴だから此の儘ゆ行くなれば許して遣るが、強たつて検めるとなれば、若し荷物相違致せば首を切るぞ」

田「切られべえ、命より大事な他人に預つた物があるから、是なえ失なくなしちやア私わしい活いきてる事が出来ねえ」

武「左様さやうなれば検めろ、相違致せば番頭も許さんぞ、さア検めろ」

と広ひろ棧せんの風呂敷木綿、真田まきたの中結なかゆいを引解ひきほどいて広げると違つて居る。麦藁細工も入つてはあるが違つてある。玩おも具ちやが二つばかりに本が二三冊、紙入なかの中なか入いれ見たような物や

何かゞ有るが皆違つて居るから、

田「はアこれアはア飛んだ事を」

と百姓は真青になつて慄えて居る。

武「さア何うだ、拙者を賊に落して申訳があるか、もう許さんぞ、併し此所は旅人宿で、当家には相客もあつて迷惑になろうから、此の近辺の田甫に参つて成敗致そう、淋しい処まで行け」

田「誠に、へい何時の間に大事な他人に預かつた金もある包を盗まれましたか、何うも風呂敷の縞柄といひ木札が附いて似て居るもんなで、何卒御勘弁をはア願えます。

武「勘弁相成らん、それだから前に其の方のとは違ふと云うのだ、然るを強て強情を申し張り、殊に命より荷物が大切だ、切られても構わんというから掬めさしたのだ、さアもう許さんから行け武士に二言は無ひ、番頭手前も怪しからん奴だ」

番「だから、私も申すので」

武「これ米藏と一緒に参つたもの、逃支度をするな、これへ出る」

男「どうぞ御免なすつて」

と手を突いて詫入るを、武士は無理無体に引張出して廊下へ出る。田舎者は、

田「御免下さい、御免さないほーい、ほーい、ほーい」

と泣く。茲へ見兼ねて出ましたのが新井町の石井山三郎、

山「お武家様、暫く」

武「なんだ」

山「私はお隣座敷に相宿に成りました者で、只今彼所にて承われば重々貴方様の御尤もで、実に此の者共は怪しからん奴で、先刻より様々の不礼を申し上げ何とも申し様もございせんが、何を申すも田舎者で、預り物が紛失致して少々逆上て居る様にも見受けまされば、お荷物に手を付けました段は重々恐れ入りますが何うか何も心得ません者と思召し、只管御勘弁を、此の儀当人に成り替りまして、私がお詫を致します、当方も迷惑致す事ですから何分とも御了簡を」

武「いや其の許は隣の座敷にお居でのか、そして此の者の連衆か」

山「いえ連ではございません、手前は相州東浦賀で、高沢までは遠くも離れませんから其等の訳をもちまして願いますので、何うか幾重にも御勘弁を」

武「お前は分りそうな人だが、今も聞いたろうが、拙者は始め許して置いたので、根が百姓の分らん奴の云う事だから黙って居たので、然るに段々附け上って拙者が手荷物を掬め

させて呉れと申すが、もし荷物を検めて違えば許さんぞと申した所が、其れは構わん、何でも二十両の金子きんすを拙者が盗んだに相違ないと疑われて見れば棄て置おれんで、荷物を検めさしたから斯か様に成つたので、何卒手じゆうぞを引いて下さい」

山「何うかそう仰しやらずに御勘弁を」

武「なりません」

山「これ程申しても御勘弁なりませんか」

武「罷まり成らん」

山「これお百姓、高沢町の人、お聞きの通り種々いろくとお詫を申してもお聞入れがないから、お前ももう何うも詮方しかたがない手打に成りなさい」

田「それでも何うか御勘弁を願います、情ない訳で、何分にも」

武「相成らん、さア早く出ろ」

山「若もしお聞きずみずみがなければ止むを得ず申すが、此の荷物は貴方のお荷物ですか」

武「左様」

山「この荷物の中に蒔黄金欄の金入が有るが、これは貴方の所持の品でありますか」

武「左様、手前の所持で」

山「結構な品で、この金入は世にも稀まれなる切きれで、何れでお求めになりましたか」

武「これはなんで、芝しばぐち口三丁目の紀国屋と申すが何時も出入で逃あつらえるのだが、其所そこへ逃にげえずに、本ほん町の、なにアノ照降町てりふりちようの宮川みやがわで買おうと思つたら、彼店あすこは高いから止めて、浅草茅町あさくさかやちようの松屋まつやへ逃にげえて」

山「へゝえ、裏の切も大したもので」

武「なに好よくも無い、ほんの廉物やすもので」

山「へゝえ、これは太閤殿下が常に召された物を日光様が拝領になつて、神君しんくんが御帰依ごきえの摩利支尊まりしそんてん天の御影みえいをお仕立になる時、此の切きれを以てお仕立になり、それを拝領した旗はたも下が有つて、其の切を私わたくし方かたで得て拵こしらえた蒨黄金欄せきごうきんらんの守袋で、此れを金入にしては濟まん訳だが、拙者親共より形見に貰つた品物だが、何うして貴方これを所持なさる」

武「それは」

山「いやさ何を以て堤方村で失つた金入を、何うして貴方が所持するかさア何ういう訳が承りたい」

と山三郎に問詰められて、むゝと武士さむらいは押詰つて、急に顔色を変えます。これから掛合になりますのお話、一寸ちよつと一息つきまして申し上げます。

九

引続きまして、何処どこの国でも悪人という者はありますもので、今悪武士わるざむらいが形の拵なりこしらえなどは上品にして、誠に情なさけのありそうな、黒の羽織ろいろに蠟色ろういろの大小で、よもや此の人が悪事を
 するなどとは思おもいも寄よらぬ体ていで、其の上最初の掛合かぎあは極柔ごくよくかでございませうから、田舎者は
 猛たけり立つて荷物あつたを檢あめる様ようになりました。山三郎も始めはおとなしく掛合かぎあつたが聞きませ
 ん。元より隣座敷のぞで覗のぞいて居ゐりましたから包つゝみの中から出た物をよく視みると、親の形見かたみに貰
 った萌黄金もえぎきんらん欄らんの守袋まもりふくろ、それが出たから何どうしてこれが貴方あなたの手に有あると云いわれ、よもや
 それ程ほどの金入かねいりとも存ぞんじませんから好加減いゝかげんに胡麻化ごまかし掛かけたを問詰とんづめめられ、流石さすがの悪人も
 顔かほ色いろが變かつて返答こたへに差詰さしづりました。田舎者はこれを見みると喜よろこびました。

田「誠に有難ありがたうございませう、何なんてえ太ふえ奴やつで、其の荷物おらが己おれが荷物おらでなくつても、此の人
 の金入かねいり其の中うちへ突つ込こんで置おくからは己おれが泥棒どろぼうと云いつても過ありは無なえ、それに己おれを斬おるてえ
 嚇おどかしやアがつて何なんとも呆おろれ返かえつた野郎やろうだ、さア出る処ところへ出でて白しろえ黒くろえを分わけてやろう」
 山「まあ宜よいわ：扱さて貴方あなたは何なんういう訳わけで私わたくしの金入かねいりを其の包かみの中うちへ入いれて、是こゝは他わ所きで購かいも

求めたなどと、武士さむらいが人を欺しき実じ以もつて怪けしからん事だ、さア何なにういう訳で貴方あなたの物になすつたか、何処どこから買か入れたか篤とくと調べなければ成なりません、又此こゝの事は此宿このところの名主なぬしか代官しろがねへでもお届とどをしなければ成なりません」

武「誠に重々恐入おそつた、実は池上いけがみへ参詣さんぎして帰り掛かけ、堤方村つゝみかたむらの往来中ななかで拾ひろつたので、見れば誠に結構けいこうな金入かねいなり、其そのの遺失主おとしぬしへ知らせようと存ぞんじても、彼あの通りの混雜こんざつで何分なにぶん分わらん、遺失主おとしぬしの無い事故じゆ只今ただいま其そのの返答へんたに差詰さじつたので、実は拾ひろつたので、何なにうか遺失主おとしぬしを調べて返かへしたいと思おもつて居ゐた処ところ、お持主もちぬしが其そのの許もとであれば速すみやかにお返かへし申まをすのみで、何も其そのの儘ままで壹錢いちせんも中の金錢かねは遣やい捨てません、それが慥たしかなる証拠しんこで、何なにうか何分なにぶんにも此このの事は御内分ごうちぶんにお計はからい下さるれば千せん万ばん有難ありがたうございます、何分なにぶんにも内ない濟さいに願ねがいます」

山「全く拾ひろつたと仰おほしやるか、拾ひろつたなら拾ひろつたに為なりましょうが、それじゃア此このの者が包かを間違まちがえても仮よしんば又またお前まへさんの懐ふところを捜たづねしても、他人たにんの物は己おれの物と思おもつて他人たにんを欺しくような人ひとだから此このの者を切きるの突つくのと仰おほしやる氣き遣やいは有あるまいが、猶なほ念ねんのため申まをす、愈い々よく此このの者ものをお許ゆるしなさるか」

武「尤なほも左様さやうで、其そのの許もとの仰おほしやる事ことに於おいては聊いさかも申まを分ぶんはございませぬ」

田「それ御覽ごらんなせえ、何なにだつても此このの野郎やろうが申分まをぶんねえなんて先刻さつきの権幕けんまくはなんだ、今いまに

も打斬るべえとしやがって、何うもはア私ア勘弁し度つても連の鹿の八どんに済まねえから、矢張り出る処へ出ますべえ」

山「それでも悪いから此処は先ず此の儘にしなさい、此家も旅人宿で迷惑をするし、お前も向うの包と取違えたのは粗忽で詮方がないから、先ず此処は控えて居なさい、それを彼是荒立つて見ると事柄が面倒になるから、私も許すから、併しお前も預り物を紛失して嘸心配であろうが、幸い此の紙入に二十両遺つて有るから、お前にこれを進上するから、遺失さん積りで向へ持つて行きさえすれば事が済むから、此処は此の儘穩かにしないと、此の家も迷惑するから」

田「お前様にやア何うして、なに其の金ア此の野郎から貰えますわ」

山「まあ私に何事も任して置きなせえ」

と山三郎は種々に和めて、此の場は漸く穩かに納まりましたが、彼の武士はこそつぱゆくなつたと見えまして、夜中にこそくと立つて仕舞った。山三郎は惜気もなく二十両の金を井桁屋米藏に遣りましたが、人は助けて置きたいもので。山三郎、江戸屋半治は相州浦賀へ帰り、小兼馬作は芳町へ、彼の田舎者二人は共々連立つて高沢町へ帰りました。

十

扱さてお話しは二ふた岐みちに分れ、白金台町に間口は彼かれ是これ二十間けん許ばかりで、生垣いけがきに成なつて居ゐります、門もちよつと屋根のある雅致がちこしらな拵うしろえで、後うしろの方へまわると格子造りで、此方こちらは勝手口で、格子の方をガラ／＼と開けて這入はつて見ると、中見世なかみせの玩具屋おもちゃやにありそうな家や作りであります。此の日芸者小兼は早く起きて白金の清正公様せいしょうこうさまへお詣まいりに行ゆきました。一体芸者衆しゆは朝寝ですが、其の日は心がけて早く起き、まだ下女が焚付たきつけて居ゐて御飯ごぜんも出で来きないくらいの所へ、

兼「御免なさい／＼」

下女「はい、入いらつしやいまし、何所どちらから」

兼「あの粥河様のお邸やしきこちらは此方こちらさまで」

下女「はい、手前で、何方どちらから」

兼「芳町のかねが参まつたと御新造様にそう仰しやつて、誠につまらん物でありますがお土産みやげのしるしに是を何卒どうか上げて下さい」

下女「左様で」

と下女が案内して奥へ通し、八畳敷ばかりの茶の間で、片方かたうに一間の床の間があつて脇の所が戸棚になつて、唐木の棚があります。長手の火鉢の向うに坐つて居るのが粥河の女房お蘭らん、年はとつて二十一、只今申す西洋元服で、丸髷に結つて金無垢の櫛かんざしで黒縮緬の羽織を引掛ひっかけている様子は、自然と備わる愛敬、思わず見惚みとれるような好い御新造で、

蘭「こちらへお這入り」

兼「誠にまア御無沙汰をいたしましたして、そして結構なお住居すまいでどうかして上りたいと思つて今日こんにちは一生懸命に早く起きて、白金の清正公様へお参りをして、序ついでと申しては濟みませんせんがそれから上りました、本当に貴方が此方こちらに入らつしやることは今まで少しも存じませんせんでして」

蘭「私も一寸ちよつと知らせたいと思つたけれども種々いろく其所そこには訳があつて……よくまア訪ねて来てお呉れだ、何うかして私も訪ねたいと思つても勝手勝手に出る事も出来ないで」

兼「まア元服なすつて、よくお似合で、そして本当によいお住居すまいでまアお広くつて綺麗で、桜時分さくらときは嘸好さげうございませう、そして高台で、のんびりとなさいませうねえ、私などうちの家は狭くつて隣むこうも向もくつついて居ります、其の替り便利には、お彼岸や何かで珍らし

い物が出来たり、おめでたい事で時々向う前で遣つたり貰つたりする時は坐つて居て手を
 出せば届きますが、斯う云う所に入らつしつては好うございますねえ、これは貴方詰らん
 物ですが些とばかり取つて参りました、ほんに貴方お目に懸つたのは丁度三年後の池上様
 のお籠りの日で、彼の時私が彼所を通り掛り麦藁細工の有つたのが目に付いて居ります、
 葎簀張でねえ、それも彼所にあゝ遣つて入らつしやる事も存じませんで：あの御新造が
 お亡くなりで：それから此方へ入らつしつたので」

蘭「此方へ来てから一年半許りして旦那様が懇に御介抱して下さつて、葬式も立派に出て、
 何も云置く事もなく私の身の上も安心して母も亡くなつたから誠に仕合せだよ」

兼「あらまア些とも存じません、其の後旦那様にお目に懸つても左様とも何とも仰しやら
 ずに、余り憎らしいじやア有りませんか、そしてお寺は」

蘭「谷中の瑞林寺で」

兼「知らない事とてお吊いにも出ませんで、嘸まア御愁傷で、あなたが此方へ入らつしつ
 て御安心になつてお亡れで、本当にまア旦那様は毎度御鼻肩にして招んで下さつても、貴
 方の事は今申す通り少しも仰しやらず、漸く他で聞いて参りましたが本當に余りだと存じ
 て居りました、もし彼の時相州浦賀の石井山三郎様と仰しやるお方がお寄りになりました

ろう」

蘭「あゝ」

十一

兼「彼あの方は浦賀で大した人で、さっぱりした気象きツぷのよい男おとこ達だてで、女などを誉ほめたことのない方ですが、あなたをまア親孝行のお嬢様だつて独りで誉めて居て、大概な者は気に入りませんが、貴方なら貰もらいたいと云つて、江戸屋の半治さんという人を掛合やにお遣やなすつたら、もう此方こなたへ御縁組ひつこになつてお引越ひつこしになつたと聞き、仕方がないと云つてそれ限りぎになつて」

蘭「かねや本当に彼あの方は情なさけ深ぶかい方で、私も彼方あちらへ縁付ゆかりかれるようなれば宜いいと思つて居たが、是には種々いろく義理があつて、彼あの方が私に沢山心付を下すつて、其の時金入をお忘れで、それを私が持つて藤屋まで参る途中で災難あに遇つて、道で助けられた其のお方が私の旦那で、今では何不足なく何んでも彼かでも欲ほしいものは買つて遣るからと仰しやるから安心して居るわ」

兼「それはまア結構で、本当にまア旦那様はあなたを可愛がって、左様して御辛抱で、ちやんとお宅へお帰りでしょう」

蘭「それについて私も種々心配して居る事があるので私の様な不束者で御意に入らぬか知れないけれども、去年の十一月からさっぱりお宅へお帰りが無いの」

兼「お宅へお帰りが無いと云って何処へ入らっしゃいました」

蘭「私には鎌倉道に竹ヶ崎と云う所があつて、山の半途で前が入海で宜い所が有つたから、何うせ毎年湯治に行く位なら、景色も空気も宜いから、其処へ普請をして遣らうと云つて、其の普請に掛つて入らっしゃると云うけれども、去年の暮からさっぱり手紙も遣して下さらず、此方から手紙を出し度も女ばかりで左様もならず、何か外に出来でもして私が嫌になつて万一见捨られた時は親類も身寄も何も無いから行く所もなく、兼や何うかお前を力に思うよ、私はお前に逢いたいと始終思つていたわ」

兼「呆れますよ、本当にまア貴方の様な美しくい結構な御新造様がお一人いらつしやれば御辛抱なさりそんなものを、去年の十一月からお帰りにならないてえのは何てえ事でございましょう……其のお宅というのへ入らつしやいましたか」

蘭「まだ往つては悪い」

兼「入らつしやいませい悪い事がありますものか」

蘭「だつて知れないものを」

兼「構わずに入らつしやいませ、屹度極りが付いて斯う云う者と斯うと云う訳じやありません、詰らん者を集めて浮れているのでしようから、出し抜けに往つて玩弄箱をひつきりかえしたような芸者を揚げてゐる所へ、お娛みと云つて引ずり出してお遣なさい、貴方は人が好いからいけません」

蘭「大層遠いそうで」

兼「私はお祭の時往つて知つております、竹ヶ崎と云うのは法華寺のある所で、舟で行くと直です。入らつしやい」

蘭「そう、舟は恐かないかね」

兼「なに今時分は北風が吹くと船頭に聞いておりますから直に往かれます、そして追風で宜うございます、高輪から乗ると造作はございません、入らつしやいませよ」

蘭「往き度いが道も知れないから」

兼「入らつしやいよ私が御一緒にお付き申しますから」

蘭「かねが往つて呉れ、ば」

兼「入らつしやいまし」

と無理に勧めるのは、小兼は江戸屋半治に逢いたいからで、お蘭もそんなら往こうと、下女へ話して急に着物を替え小紋縮緬の変り裏に黒朱子に縹珍の帯をしめて、丸鬘の後れ髪を撫あげ、白金を出まして、高輪の湊屋と云う船宿から真帆を上げて参りますと、船は走りますから横須賀へ着きましたのは丁度只今の二時少々廻った頃、それから多度村へ出てなだれを下りて往くと鎌倉へ出る、此方へ参れば倉富へ出る、鎌倉道の曲り角に井桁屋米藏と云う饅頭屋があつて蒸籠を積み上げて店へ邪魔になる程置き並べて、亭主は頻りに土竈を焚付けて居る、女房は櫛掛で、粉だらけの手をして頻りに饅頭をこねて居る。

兼「一寸もし少々物をお聞き申します」

男「お掛けなさいまし、此方へおかけなさい」

兼「あの竹ヶ崎へ参りますには」

男「竹ヶ崎は此方イざいと往つて突当つて左へきれて、構わず南西へきれて這入ると宮がある、其の宮の前に新浄寺と云う寺がある、其処を突切つて往くと信行寺と云うお寺様である、それを横切つて往くと地藏寺の前へ出る、其処を右へ往くと諏訪様の鎮守

様がある、そこを突当つて登ると竹ヶ崎へ出ます」

兼「有難うございます、そうして其処に此の頃新規に立派な別荘の様な物が出来ましてすか」

男「其処の別当は諏訪様の御支配だ」

兼「いえ、なんです、新規にお屋敷見たいな家が出来ましたろうか」

男「お屋敷か、あゝ此の間兼吉が往つたつけのう、お直、それ竹ヶ崎の南山でなア」

女房「此方へおかけなさい、おや小兼さんかえ」

十二

兼「まあどうも不思議じゃアないか、お直さんかえ」

女房「お掛けよう、まあ懐かしかったよまあ、何時もお変りなく、まあ久振で丁度六年振で、何時でも同じ様だねえ、兼ちゃん此の通りで本当にお辞儀したくも手を突く事が出来ない、粉だらけで、何うせ仕様が無いから何んな者でも堅くさえあれば宜いと思つてこないけ好かない男を持つて」

米「何だ、いけ好かねえなんて」

直「おや堪忍おしよ、本当に半ちゃんも疾とらつから銚子屋に居るつて、此の間来てお前に遇わして呉れつて頼むのだよ、私も江戸屋のお直とつて江戸あつちに居た時分から半ちゃんとは古い馴染だし、何でも隠さずに話をするが、半ちゃんもお前にやア種々世話になつて済まないつて、そりやア真ほんに銚子屋に預けられて居ても女郎買じようろかい一つしないで堅くして居るんだよ、真ほんに感心さ、それもお前に惚ほれてるのだから何うかして夫婦にしたいねえ」

兼あたし「私も御新造様を竹ヶ崎までお送り申して、歸りにやア是非半ちゃんに逢い度たいから私あたしの来た事を知らしてお呉れな」

直「あゝ歸りにお寄りよ、屹度半ちゃんを呼んで置くから、あらお茶代は入らないに、あゝそれじゃアお気の毒だねえ、そんなら此所こゝをこうずいと往つて構わず突当つて聞くと直じき知れるよ」

兼「あゝ有難う、分りました、左様ならば」

と小兼はお蘭を連れて路みちを聞きく竹ヶ崎の山へ来て見ると、芝を積んで枳殻きこくを植え、大きな丸太を二本立て、表門があり、梅林うめばやしが有りまして、此方こちらには葡萄棚もあり其の他種々いろくな菓物くだものも作つてありまして、彼是一町許ばかり入ると、屋根は瓦かわらぶき葺ふだが至つて風

流な家作りがあります。ずいとう入ろうとは思ったが、また彼は手間取れると半治に逢うのが遅くなるから、

兼「あの恐入りますが私はこれから下りますよ」

蘭「もう少し往つておくれ、何だか私ア間が悪いよ」

兼「なにお間の悪い事がありますものか、これア貴方のお家ですものを、私はまた上りますから御免なさい」

と気がせくからはらくと外へかけて出ました。

蘭「あれまア兼が」

と暫く其方を見送つて居ましたが、何時まで立つても居られませんから、徐々と門の中へ入りました。だが矢張り極りが悪く若し間違やアしないか、誰か居るかを見ると、長治という下男が掃除をして居る。

長「おや、御新造様」

蘭「長治お前まで来たつ切りで」

長「これはどうも思い掛けない、何うして、へゝえ何ですか芳町の小兼が、そうで」

蘭「お前までが嫌つて帰つて呉れないから、家ア女ばかりで心細くつていけないから、漸

く来たのだよ、すこしも便りたよをしないのは余りあんまで」

長「私も此方わたくしこちらへお供をして参りましたが、何分御普請が此の通りで埒らちが明きませんし、建た

てまえ

前まへが済んで造作ぞうさくになつてから長くつて、折角片付いてもまた御意に入りませんで、又

ぶちこわ

打毀して新規に仕直すなどという仕儀で、誠に私わたしもじれつたくつて、漸くまア此の位出来

ましたが、又材木などが差支さしつかえて：まア彼方あちらへお出で遊ばせ、此処こゝが這入り口で」

蘭「ほんに旦那様は材きのお選むすみが六かしくつてお囂やかましいからねえ」

長「併しかしまア十分に出来ました、広くはございませませんが、此処こゝがお座敷で、此処こゝが貴方の

お居間になる様にとつて別段綺麗に出来ました」

蘭「どうも床柱でも天井でも立派なこと、何うも広い庭だねえ、彼あの大きな松は」

長「あれは植えたのではない元からあるので、灯籠だけは此方こつちへお持ちなすつたので」

蘭「どうも広いお泉せんすい水で」

長「あれは海です、あんな大きな泉水が有るもんですか」

蘭「そうかえ、ほんに好よい景色で誠に心持がせいゝするよ」

長「もう少し早く入らつしやると牡丹ぼたんが盛りでございました」

蘭「旦那様は今日はお家うちにかえ」

長「あの何なんで、何とか申ました変なな名なでございました其所そこへ材木を買出かしながら行くつて、
歸りに何なで周し玄げんさんというお医い者が御ご一いっ緒しよで、事ことに依よると金沢かねざわへ廻まわるかも知しれんと被おつ仰しゃ
いました、併しかし今いま晩ばんはお歸かえりになりまましょうか、それとも明日あしたに成なるかも知しれませせん」

蘭「女中にようぢゆうは幾いくたり人居にるえ」

長「一人も居いりませせん」

蘭「この広ひろい家うちに女中にようぢゆうが居いないなんて虚言うそをおおつきよ」

長「いえ居いたのですがいいけません、此こ処ところらの女おんなは相模さがみ女おんなで尻しりばかり撫なでて、実まにどうも
行儀ぎやうぎも作法さくぱも知しりませせん且かつ那樣やうやうの前まへでも何なにでも構かまわなず大おほきな足あしを踏ふん踏ぼたぎたて歩あいたり、且かつ
那樣やうやうがお誂あつらえななすつてお拵おつとぎえ遊あそばした桐とうの胴丸どうまの火鉢ひばちへ、寒さむいいつて胼あか胝ぎれだらけな足あしを上あ
げて、立たつて居いて踵かかとをあぶあるので、且かつ那なはすすつかり怒いかつて仕舞し舞まつて早そう々ずくお暇いとまになりました、
実まに女おんなだけは江戸えどに限かぎります」

蘭「おほおほ々々、そうかえ怪けしかららない」

長「今いま御膳ごぜんを上げあげますから、嚙かお草くさ臥たひれでししょう、ままア緩ゆるりと」

とといいつて烟草えんそう盆ぼんや茶菓子ちやくしなどを運たびますに皆みな長治ちやうぢ一人ひとりですする様子ようす、お蘭おらんは縁側えんがはへ出でて見み
て居いりましたが、用場ようばへ参まろうと思おもつて縁側えんがはををずいと行いつて突つ當あると、三尺さんせき許ばかりの喜連格きつれぐ

子があるから、用場かと思わずと開けると、用場では有りませんで、其処は書物棚になつて居ります、本箱などが幾つも積重なつて居りますから、疎相な事をした、用場かと思つて大切な書物のある処を無闇に明けて済まない、徐と閉めようとすると、昔の屋敷女で足袋を穿いて居るのに、縁側が出来立て新らしい足袋ですからツルくとこつて書物棚へ思わず倒れ掛つて手を突くと、其の棚がギーと芝居でする田楽道具の様に、ら悔りして後へ下つて覗くと、下に階梯の降り口がありますから、はて此様な処に階梯のある訳はないが、穴蔵の様になつて居るが何だか知らん、兎に角こんな所を開けて見ては済まないと前の様に書棚を直して出て来ると、長治は膳部を持つて出る。彼の辺は三月頃は初鯉の刺身が出来まして、それに海苔の付合せを沢山にして、其の他キスだの鎌倉海老などと魚が出るが、どうも近所に料理屋はない様子、何処から魚を取寄せるか、自分料理で斯う早く出来る訳もないし、何うした事かと女の廻り気で種々と考へて居ります、其の中灯火がつかますと、長治が屏風を立廻し、山風で寒いからと小搔巻に夜着を持運び、其処へ置いて台所へ下りました。

お蘭は自分で床を展べて寝ましたが、寝ても寝られませんか、旦那様は今日もお帰りはないか、何時迄待つてもお帰りがなくつては、淋しい処に居るのも嫌だし、何しに来たとお叱りを受けはしないかと種々と心配して居ると、六枚折の屏風を開いて這入つて来たのが粥河圖書で、ずーっと前へ立つたから、お蘭は悔りして起ると、

圖「お蘭か」

蘭「おやお帰りでござりましたか」

圖「能く来たな、今帰つた、能く出て来た、一寸便りをし度いと思つたが誠に普請も長く掛るし、それに今日は浦賀へ行くの、金沢へ行くのと誘われて、暇を欠くので、ついノ、便りも致さなんだが、能く来たのう」

蘭「貴方が来いとも被仰らないに参つてはお叱りを受けようかと思ひまして参りかねて居りましたが、兼が何んでも行けと勧めますから参りまして、能く遅くもお帰りで」

圖「左様か、今夜は淋しかろうが、これから余儀なく一寸行かなければならんが、明日は正午前に帰つて来ようから、まアゆつくり寝るが宜い」

蘭「それじゃアお帰り遊ばして直ぐに是から又夜お出遊ばしますか、このお淋しい道を…」

誠に悪い事を致しました、折角お帰り遊ばしても私が参つて居りますから又直に外へ入ら
 っしやるのは私がお邪魔になつて：それでお腹立なれば、明朝帰りますから御勘弁遊ばし
 て、何卒御寝なつて」

圖「決して左様云う訳ではない、余儀ない義理で誘われて居るので、一寸大津辺まで行
 かなければならん、銚子屋と云う料理屋に集会して居るから、一寸顔を出して、是非夜が
 更けるだろうが、事によると浦賀へ誘われると帰られないが明日の朝は屹度帰るよ」

と慌て、煙管筒を仕舞つて出て行きました。お蘭が送り出そうと思つて居る中、ぱつた
 り襖を閉切つて、出たかと思つて考へるに表の門の開いた様子もないし、夫の外へ出たの
 も怪しく、夜深に私の顔を見て直ぐに出てお仕舞い遊ばしたのは、何か他に増花でも出
 来て居て、他の座敷へ隠してあるのではないか、左様して見ると先刻見た書棚の廻り階梯
 の降り口のあつたも怪しいが、はてな」

と悟氣と云う訳ではなけれど、自分が身寄頼りもなく、圖書に捨てられては行 処の
 ない心細い処から、手灯を点けて窺つと拔足して縁側へ出て、昼の中見て置いた三尺の
 開きを明けて、書棚の両方に手をかけて押すと、ギーと廻る。下に階梯の降口があるの
 を見ると、灯火が障子へさして座敷がありそうに思いましたから、手灯を吹消して階梯段

を降りて参りました、降り切ると一間ばかりの廊下のようなものが透つて付いてあります。彼の辺は皆垣が石のような処で、其処を切穿りまして穴蔵様な物が山の半腹にありまして、宛で倉庫の様になつて居りますから、縁側を伝わつて段々手索りで行くと、六畳ばかりの座敷がありまして、一間の床の間がありまして巻物や手箱などが乗つてあります。杉戸が二重になつて居て両隅の障子へ灯火がさしまして人声ができる様ですが、唯今なれば硝子障子で能く分りますが、其の頃は唯の障子でございましてから黝しも分りません。傍にある机を持つて来て、其の上に乗つて、欄間の障子の穴から覗こうと思つたが、障子に破れた穴もないので覗けないから、挿して居た銀脚の簪挿で、障子の建合せを音もせず盗つと簪挿をさしてねじると、障子が細く明きましたから、お蘭が内を差覗くと驚きました。

十四

穴の中に斯様な座敷をこしらえ、広間は彼是二十二三畳もあるうと思われ、棚には植木鉢その外種々結構な物が並べてあり、置物は青磁の香炉古代蒔絵の本台などが置並べて

前に緞子の褥を置いて傍の刀かけに大小を置き、綿入羽織を着て、前の盃盤には結構な肴があつて、傍に居るのが千島禮三とて金森家の御小納戸役を勤めた人物、這入口に居るのが眞葛周玄、黄八丈に黒縮緬の羽織を着て頻りに支配をして居り、それからずつと次に居並んで居ります者が彼是百五六十人許り、商人体の者も居れば、或は旅僧体の者や武士体の者、種々なる男がずつと居並んで居て、面部に斫疵などのある怖らしい男が居る。其の次の間に、年齢十六七の娘が縛られ、猿轡をかけられて声も出さず事が出来ませんで、唯涙をはらく零して、島田鬻を振りみだし、殊に憫れな姿であります。傍に居る千島禮三が、つかく、粥河圖書の傍へ来て、

禮「大夫、何処へ行つてもどうも別にこれぞと云う大な仕事もなく、東海道金谷の寺で大妙寺と申すは法華宗の大寺で、これへ這入つて金八百両取つたが、彼の寺にしては存外有りましたが、それから西浦賀の上成寺は平生有りそうに思つて其の夜忍び込み、此の寺で二百両で、金は随分あるにもせよ肴がなくてはお淋しかりうと存じて、これは西浦賀の江戸屋と云う家へ縁付く話が定つたと云う、名主吉崎惣右衛門の娘おみわと云う評判もの、大夫の寝酒のお肴に連れて来たが、お蘭さんがお出になつたと申すことだが、お蘭さんがお出になれば何んな者をお目にかけても逆も往かんから、この美人は禮三が□□□

□るからお譲りを願います」

圖「それは勝手に致せ」

周「こうく／＼千島氏貴公は誠にうまいことを考えるが、東浦賀の吉崎の娘は君が知って居たのではなからう、此の眞葛周玄が知って居て、道程みちのりからして、斯々こうくいう所を通つて往くと大寺があつて、此処に斯ういう豪農がある、陣屋は斯ういう山を越さなければならんという事まで貴公に道を教えたからこそ、首尾よ能く連れて来られたのだというものだ、それを君が□□□□るてえ訳にはいかん、大夫是はどうか周玄へ此の娘を頂戴したい、自
分年を取りまして斯様な若い美人を□□□□た事がないから、どうか」

圖「何うでも勝手に致せ」

禮「これ／＼何だ、汝われは旅稼ぎの按摩で、枕探して旅を稼いで居たのが、処を離れて頭髪つむじりを生はやして黒の羽織を着て、藪医者然たる扮装なりして素人を嚇おどかし、大寺などへ入いりこ込んで勝手は少し心得て居るだろうが、八州にでも取構とりこまれ、さアと云う時は此の千島禮三と大夫が居らん時はぶる／＼して先へ逃げ出す役に立たず、畢竟己が骨を折つたから己が抱いて寝るのだ」

周「それはいかんよ足下そっかなどは悪事に掛けてはまだ青いからね」

禮「黙れ、青いとは何んだ、青かろうが若かろうが多寡が汝は旅かせぎの按摩上り、己は千島禮三と云う小納戸役を勤め、大夫とも同席する身分だ控え居れ」

周「これさ、仮令然るべき武士で何役を勤めたにもせよ、斯うやって悪事を共にすれば、縛なわに就いて処刑しおきになる時は同じ事だ、今日きょうに及んで無用の格式論、小納戸役がどう致した、馬鹿つらな面を」

禮「なに何がどうしたと」

長「待ちねえく騒々しいじゃねえか、今日はお蘭さんがお出いでなすつたを独りで寝かして、斯うやって大夫が各々おのくと一所にうまい酒を呑もうと云うのに何の事だ、周玄さんお前なんざア是迄さんざ新造を瞞着して来たのだから、いゝや、斯う為しよう、周玄さんが□□□□でも、禮三さんが□□□□でも議論の種だから中を採とつて此の長治が今夜□□□□よう」

圖「何だ、千島は鯉口を切つて周玄を斬る積りか、よいく此の婦人は己が貰った」

と傍かたわらにある刀の小柄を抜く手も見せず打つた手裏剣は、彼の女の乳の上へプツリと立ちましたから、女はひーと身を震わして倒れる。この有様を見ると、お蘭は「あゝなさけな」と机を下りにかゝると、踏み外すとたんに脾腹ひばらを打ちまして、お蘭は氣絶致しましたが、是から何うなりますか、次の条くだりに申し上げます。

十五

引き続きまして、粥河圖書の女房お蘭の身の上は、予て申し上げます通り西洋の話でございまして、アレキサンドルというおとこだて狭客がコウランという貞節なる婦人を助けるという、アレキサンドルに擬せにました人が相州東浦賀新井町の石井山三郎という廻船問屋で、名主役を勤めました人で、此の人は旗はたもと下の落胤らくいんということを浦賀で聞きましたが、其の頃は浦賀に御番所がございまして、浦賀奉行を立ておかれしました。一体浦賀は漁獵場所御承知の通り海浜の土地であります、町屋も多く、女郎屋じやうろやなどもございまして誠に盛んな所で、それにつれては種々公事訴訟等いろくもありまして、御奉行様も中々お骨の折れる事でございます。又御奉行に仰付けられます時は、お上から寒かろうと黒縮緬あおいに葵の御紋付の羽織を拝領いたしますもので、此のお話のずっと前まえ方、一色宮内と申す二千五百石のお旗下が奉行を仰付けられて参つて居るうち、石井の家の娘すみという者が小間使の奉公に往つておりました。するとこれにお手が付きまして、すみが懐妊致しました。海とか山とか話の解る迄すみを下げまして、十分に手当を致し其の後のちとうとう縁切えんきりとの事になり

ましたが、あた当る十月にとつきすみの産落しましたのが山三郎、それから致して此のおすみには、
 これも同じく浦賀の大ケ谷おおがやまち町で廻船問屋で名主役を勤めていた吉崎宗右衛門の弟惣そとう
 之助すけが養子に来て、おすみの腹に次に出来ましたのが女の子で、これをお藤と申しまし
 た。山三郎は十一二の頃物心を知つてから己は二千五百石の一色宮内の胤たね、世が世なれば
 鎗一筋の立派な武士、運悪くして町家ちやうかに生立おいたつたが生涯町家の家は継がん、此の家は父
おや親の違ちがう妹のお藤に譲つて、己は後見になつて、弱きを助け強きを挫くじき、不当者のある
 時は仲へ入つて弱い者を助けて遣り度たいと志を立てまして、幼い時から剣術を習いまし
 たが、お武家の胤だけに素性が宜しく忽ちに免許を取りました。剣術は真影流の名人、力
 は十八人力あつたと申します。嘘か真実まことかは解りませんが、此の事は私わたくしが彼の土地へ参つ
 たとき承りました。明和四年に山三郎は年三十歳でございまして、品格の宜よい立派な男で、
 旦那様だんなさまくと人が重んじますのは、憫かわいそ然ぜんなものがあると惜気もなく金でも米でも恵
 みまするので、それにその頃は浦賀に陣屋がありまして、組屋敷の役人が威張りまして町
 人百姓などを捉とらえて只今申す压制とか何とか云うので、少し気に入らんことがあると無闇
 に横よこ一面を張飛ばしたり、動やもすれば柄に手を掛けてピンタ打切うちきるなどというがある、其
 の時山三郎は仲へ入つて武さむらい士を和なだめ、それでも聞かんと直じき々奉行に面談致すなどとい

うので、上の者も恐れて山三郎には自然頭を下げる様になり、又弱い者は山三郎を見まして旦那様くと遠くから腰を屈めて尊敬いたします。殊に落語家などを極く可愛がりました人だそうで、丁度四月十一日のこと、山三郎は釣が好きでございませうから徳田屋という船宿へ一艘言付けて置いて、遊んで居るなら一所に行けと幫間の馬作を連れて鴨居沖へ釣に出ました。一体此辺らは四月時分には随分大きな魚もかゝります。

山「毎もお前は船は嫌えだというが、どうだい釣は、怖え事はあるめえ」

馬「恐れ入りましたな、私はね一体船は嫌いですがね、こうどうも畳を敷いたような平らな海に出たの初めて、旦那私やア急に船が好きになりましたぜ、何うして馬作の家から見ると余程平らで、私の家なんざアね此方を踏むと彼方が上り、彼方を踏むと此方が上りね、どうして海の方が余程平らさ、あゝ宜い心持ちだ、どうも好い景色だ、もし向うに見える大山見たよなニューツと此方へ出て居るのは何ですな」

山「あれは上総の天神山で」

馬「へゝえ彼れが、近く見えますねえ、旦那に此の間伺いましたが彼れがたしか鋸山
のこぎりやま
ですね、成程鋸見たようで」

山「師匠どうだ釣は」

馬「私は釣はどうもいけません」

山「なぜ」

馬「釣はどうも、凡そ私の釣れた例が無いというんだからいけません、私達のアただぼん／＼放り込んで浮の動くのを見て居るだけですから面白くも何とも有りません、折節ね旦那のお供でね沖釣などに出来ける事もありますかね、馬作は竿も餌も魚任せにして只御酒を頂くばかりいえも何うせいけません」

山「そんな事をいわずに釣って見な、此辺の魚はまた違うから」

馬「それに蚯蚓などをいじるのが何うも厭で」

山「なに海の釣は餌が違うよ、蝦で鯛を釣るといふ事があるが其の通り海の餌は生た魚よ、此の小鰻を切つて餌にするのだ」

馬「へゝえ鰻の餌で、それで何が釣れますか」

山「鰻で鰻が釣れるよ」

馬「へゝえ魚は不人情なもので、共食ですね、へえ、鰻で鰻が釣れますか」

山「何でもさ、目張でも鯖でも、鯖なぞは造作もなく釣れるよ」

馬「へえ鯖なぞが釣れますか、私なんざア鯖ア読んだ事は毎度ありますけれど」

山「まあそんな事は宜いにして其の糸へ此の餌を刺して放り込んで見ねえ」

十六

馬「へ、え此の糸を斯うやるのですか、是はどうも余程深いな、何うも何処まで深いかわれませんが、旦那貴方ア両方の手に糸を持って、やは、、、両方に大きな魚を、それは何で」

山「是やア鯖さ」

長「恐入りましたな、私ア只糸を斯うやって居れば宜いので、何うも私のア魚の方で馬鹿にして居りますからねえ些とも来ません、旦那の方にやア矢張り魚も面白いと見えて貴方の方へばかり行きますぞ、何でも馬作の方へは魚が　　状を廻し彼奴の所へは往くなぞって話合をつけて来ないとみえます……やは、、、釣れたく、旦那釣れましたぞ、これは不思議釣れましたからどうも妙で、是は大事にして置きたい、生れて始めて釣つたというので跡で料理て、有難い、どうも面白い、どうも海は広いから魚の数があつて馬鹿な魚もあつて馬作の針に引掛るやつが有るから妙だな、どうも数が多いからおと、、、

それは何で」

山「これは目張だ」
めはる

馬「有難い、めばる、どうも旨い魚で、何だつて旦那有難い、もし旦那私ア急に釣が好きになりました、や、は、は、は、又釣れたく、旦那又釣れましたぜ」

山「これさ師匠のように騒いじやアいけねえ、これさ、びしゃく澆はねるから活船いけふねへ早く放り込んで置きねえ」

馬「有難い、こりやア旦那何うぞ大事にして、あは、は、は、旦那ア両方の手に釣りあげて、あれまた獲とれました、これは不思議、容易わけなしに釣れるので、あ、く、く、く」

山「どうした」

馬「魚が其処まで来て彼方あつちへ又ずうつと行きました」

山「釣り落したか」

馬「へえ釣り落しました、あ、又来た、あれ来は来たが私わたくしの顔を見て左様ならつて」

山「なに、左様ならと云うものか」

と山三郎も馬作も面白いから日の暮くれるのも知らずに釣つて居りますと、今朝あんなまから余り晴ひなみ過ぎて日並よの好よすぎたせいか、ぴらりつと南の方に小さな雲が出ました。すると見る間に

忽ち広がってぽつーりぽつりと雨が顔に当って来ました。

山「あゝ悪いな、師匠早く釣を揚げて仕舞いねえ」

馬「旦那何だつて其様に急ぐんで」

山「急ぐつて急がねえつて、あゝ悪い時に連れて来たな、余り日並が好すぎたから怪しいとは思つたが、何うも天気を見損なつた、仕方がねえ、気を大丈夫に持つて呉れ、師匠颯風だよ」

馬「はやて、えーそれは大変、旦那どうか早く上げてお呉んなさい」

山「馬鹿アいいねえ、此所は海の真中だ、何うして上る事が出来るものか」

馬「でもお願いだから上げて下さい、私は困りますから、それだから私は釣は嫌いだと云うのに貴方が大丈夫だゝと仰しやるから来たので」

山「憫然に、己も颯風と知つて居れば来やアしない、騒いではいかんよ、二里も沖へ出て居るから足掻てもいかんよ、騒いでも仕方がない、まあ気を確り船に攫まつて居な」

と山三郎は直に裾を端折つて、腕まくりをして、力があるから浦賀の方へ行こうとする
と、雲足の早いこと、見る間に空一杯に広がりまして忽ち波足が高くなつて来ると思うと、
ぎアー〜どうと雨は車軸を流すように降り出し、風は烈しく吹掛けてどう〜と浪

を打ち揚げます。山三郎の乗って居るのは小鯨こあしおく送りと云う小さな船だから耐たりません、
 船は打揚げ打うちおろ下されまして、揚る時には二三間宛ずつも空中へ飛揚るようで、又下おりる時には
 今にも奈落の底へ墜おちいり入りますかと思う程の有様で、実に山三郎も逆とてももういかんと心得ま
 したから、只船舷ふなべりに掴つかまって、船の沈んではならんと垢あかを搔か出すのみで、実に最もう身体も
 疲れ果て、仕舞いしましたが、馬作が転がり出すといかんから、笞とまくら枕の所へ帯を取つてく
 る／＼と縛り附けて自分も共に笞枕の柱に掴つかまって、唯船の流れ着くのを待ちますばかり。
 馬作は尾籠びろうなお話だがげろ／＼吐きまして、腹は終しまいには何もないので、物も出ませんで、
 皴しやがれ枯かれつ声になりましたして南無金比羅大権現、南無水天宮、南無不動様と三つを掛合にして
 三つの内どつ何なにちか一つは験きくだらうと思つて無闇に神を禱いのつて居ります。山三郎も身体は疲
 れてもうどうも致す事は出来ませんで、只船がずしーんがらく／＼どしーんと打揚げられ打
 落されて居るが、実あやうに危あやういことでありまして、其うちの中に幾百里吹流されましたか、山三郎
 にもとんと分りません、稍や暫やくたつて一つの大浪にど／＼ど／＼どんと打揚げられまして、
 じ／＼／＼と波の中へ船の舳先へびさきを突込みまして動かなくなりまして。山三郎ははて船が
 流れ着いたなど、漸やと起上つてよく／＼見ますと、松の根方の草のはえて居る砂原へ船は
 打上げられました。

十七

山「師匠、おい馬作、すっかりしねえよ、氣を確たしかに持ちなよ」

馬「へえ、あゝ旦那貴方助かつて居ますか」

山「うん、船は着いたが最もういゝと思うと落胆がっかりして死ぬものだから、何処の島へ着いても氣をすっかり持つていねえよ」

馬「へえ、確しつかり持ちたくも此の塩梅あんばいでは持てそうもございません、旦那忘れても釣はお止よしなさいよ、生涯孫子まごの代まで釣ばかりはさせるものじゃありません、驚きましたねえ、あゝく、此処は何処でしょう」

山「何処だかどうも分らん、何れ何処かの島へ着いたのだろう」

馬「家うちも何もなければ昔から話に聞いた無人島とか云って人間が居なくって、恐ろしいそれ虎だの獅子や何かが出て来て人間を頭からもりく喰くって仕舞うてえのじゃ有りませんか」

山「そんな話も聞いたが、そうかも知れねえ」

馬「これはどうも情ない、日本へ帰れそうもない、だから私わたくしやア釣つりは嫌いだというに、無理無理に来い〜と仰しやつて、何うかして日本へ帰れるようにして下さい」

山「今更そんな愚痴をいつても仕方がねえ、一体一体まア此の土地が何処の国だか分らんから、だがたと流されやアしめえと思うが、上総房州の内なれば宜いいが事によつたら伊豆の島あた辺りかも知れねえ、まだ〜それなれば旨うめえが」

馬「旨くも何ともありません、流されたのも長い間で、実に私わたくしはどうも何とも彼かともいい様ようのない、生しょう体たいも何ともございません、残らず食つたものは吐いたから最もう腹の中なかは空からっぽうでひよろ抜けがして」

山「まア此処あがへ上あがんなよ」

馬「上あがれません、動うごけません」

山「違ちがえねえ、縛しばつてあるから」

と山三郎は馬作を縛り附けた帯を解きまして、

山「さア立ちねえ」

馬「足あしもなにも利きません」

山「確しつかりしねえ、最もう波も風もありやアしねえ」

と山三郎はひらりつと陸地へ揚つたが、此の土地は何国かは知らず若し人家もなくば、少し浪が静になつたから帰ろうという時に船がなければならんから、命の綱は此の船だ、大切と心付いたから、疲れて居るが十八人力もある山三郎、力に任して船の舳を取りまして、ずる／＼と砂原の処へ引揚げて、松の根形へすつぱりと繫綱を取りまして、

山「さア是じやア宜い、師匠最う宜い」

馬「何時まで船に居ても仕様がございませぬええ」

山「なに師匠もう陸地へ揚つていらアな」

馬「だが、どうだか私やア矢張船に居るような心持で、ふらく／＼して、此処がもし外国だと、貴方と兩人で私共は日本人で助けてと云つても向にやア知れますまいねえ、こんな事と知つたら通弁の一人も雇つて来れば好かつたつが、貴方お金がありますか」

山「金は釣に來たのだから沢山は持つて来ない」

馬「それでも幾干ばかりあります」

山「掛守の中に十両ぐらいあるよ」

馬「えらいねえ何うも、私は西浦賀の大崎の旦那に貰つた御祝儀を、後生大事に紙入へ入れて置きました、船から皆な転がり出てほんに仕様がねえ、併し何んな国でも王様がご

ざいましょうねえ」

山「そりやア有るだろうさ」

馬「有難い、王様がありやア其の王様に頼んで日本へ帰れる様にして貰えましょうねえ、それに食物くいものも何も喰いませんから腹の減った事を打明けて頼んでねえ、どうも斯う腹が減つては狼が来ても逃げる事が出来ませんから、先まず其の前に握飯むすびでも何でも喰いたいあ、喰いたい」

山「これさ、まア待ちなよ、まア何しろ人家のある所へ出よう」

と山三郎は無理に馬作の手を引いてだんく行くと、山手へ出ましたが、道もなく、松し柏ようはく生おいしげ繁り、掩おいかぶ冠かささつたる熊笹くまざさを踏ふみ分わけて参りますと、元より素足の儘ですから熊笹の根に足を引掛けて爪を引っぱがし、向むこう脛すねをもりく摺すり破こわし血だらけになりながら七八町も登りますと、闇くらくつて分りませんが山の上は平らで、樹きに掴つかまって能く見ると、こんもりとした森があるから、森を見当みあてに彼是れ二十町許ぼかりも行き、又斜崖なだれを下くだると、森の林の内にちらく灯火あかりが見える。

山「師匠家うぢがあると見えて灯火あかりが見えるよ」

馬「家でせえありやア化物屋敷でもなんでも宜いい、有難い、何か喰たべられましようか、腹

が滅つて居るから何でも好い早く喰いたい」

と云いながら参ると、こう小さな流れがありまして、丸木橋が掛つている、これを漸くに渡ると卵塔場らんとうばがあつて、もと此処には家うちでもありましたか只石礎いしずえばかり残つてあるが、其の後は森で、卵塔場について参ると喜連格子きつれごうしの庵室よち様のものがありまして、今の灯あ火かりは此の庵室の内からさすのでありました。

十八

山「師匠これは古寺だぜ」

馬「いやはやどうも心細うございますな、折角尋ねて来れば古寺とは情ない、何だか私わたくしは死んだような気になりました」

山「待ちなよ、此処に土台石のある処を見れば、元なんでも家うちがあつて、毀こわされて引いたのだらう…御庵主ごあんしゅさま様御庵主々々」

馬「何が御安心です、少しも安心しないじゃありませんか」

山「庵主を訪とうのだよ…、手前どもは相州東浦賀の者でございですが、今日こんにち漂流致しま

して、ようやくこゝまで此所迄参つたので、決して胡散うさんな者ではないから一泊願うごいとうございませうが、えーもしお留守でございますか、おい／＼師匠しじやう少しも答こたえがねえから誰も居ねえのだろう」

馬「心細うございますねえ、誰もいない処へ来て、上あがるとにゆーと何か出でもすると驚き
ますねえ」

山「御免」

と云いながら喜連きつれ格子へ手をかけて左右へ明けて見ると、正面に本尊が飾つてある。銅あ
灯籠かどねどうろうがあつて、雪洞ほんぼり様の物に灯火あかりが点ついてあるけれども、誠に暗くつて分らん。

山「師匠まア板畳の処まで上んなよ」

馬「へえ上りましょう、船でぎぶ／＼やられるよりやアお寺でも家根があつて、まゝまア
宜いい心持の様だ」

と持仏じぶつに向いまして、

馬「暗くつて分りませんが、如来様か観音様かどなた様かは存じませんが、手前は日本にっぽん
の大坂町おおさかちやうの者で烏亭馬作うていと申す者で、釣に出まして此の国へ流された者で、御利益ごりやくを
持ちまして日にっ本ぽんへお帰しを願ねがいます…おや旦那あすこ彼処こゝに高たか坏かつきのような物の上に今坂いまさかだか
何だか乗つて居ります、なんでも宜いしいお供物くもつを頂たまかして」

山「よしなよ、おもりものだよ」

馬「おもり物でもなんでも少しの間願います、返せば宜うございましょう、今お供物を頂きます、其の替り日本へ帰れば一つを拾いにしてお返し申しますから、頂戴」

山「よしなよ」

馬「おもり物をとつては済みませんが、日本だか西洋だか食物の味で支那か印度かゞ分るような訳で」

とむしやく／＼喰いまして、「腹が減ると甘い物で、旦那これは日本に違いない、日本らしい味がする」

山「よしなよ、取る物じやアない」

と馬作を諭して居りますと、其の内に足音がしますから、山三郎は格子の透から見ると、先へ麻衣を着た坊主が一人に、紺看板に真鍮巻の木刀を差した仲間体の男が、四尺四方もある大きな早桶を荷いで、跡から龕灯を照しました武士が一人附きまして、頭巾面深にして眼ばかり出して、様子は分りませんがごたく／＼這入つて来ました。山三郎は飛んだ事をしたと思つて、

山「師匠此処へ下りな、いけねえことをしたな、何所かの葬式があつておもり物を整然

と備えてあつたに、お前が喰つて仕舞つて咎められては申訳が無え

馬「葬式が来たら旦那強飯か饅頭だろう、何ぞお手伝をしましょうか」

山「意地の穢ない事を云いなさんな、彼方へ行つていよう」

と二人は片隅の所へ隠れていると、どかか上つて来て武士は被つた頭巾を取り龕灯提灯を翳して、

武士「大きに御苦勞く」

何か和尚と囁きながら烟草を出してぱくりくと呑んでいますのを、山三郎が片蔭に隠れていて目を付けると、何所で見えた様な武士だと思ひ出すと、三年前の十月十二日の夜川崎の本藤の二階で、此の武士が百姓を嚇して：殊に己の金入を盗んだ武士で：彼の儘助けて返したが、彼奴は此処等にうろくしているか、何処の者か知れんが甚だ妙だ、篤と様子を見ようと、尚お姿を隠しておりますと、又仲間共とこそく囁きまして、ぼんと畳を二畳揚げて、根太板を剥がして仲間体の者が飛下りて、石蓋を払つて其の中へ彼の大きいなる棺桶をずつと入れて、元の様に石蓋を斑に置いて、根太を並べて畳を敷いて、さアこれで宜いと坊主もお経を上げずに、四人もずうつと出かけました。

十九

山三郎は暫く考えていましたが、

山「師匠」

馬「へい、なんですか」

山「お前が喋るかと思つて心配したが、宜い塩梅だった」

馬「だが、旦那坊主も付いていたが経も上げず、ひどい貧乏な葬式で、何んな裏店でも小さい袋に煎餅ぐらいはあるに、何か食物があるうと思つたにひどい事で」

山「怪しいな」

馬「へエなんです」

山「訝かしいな」

馬「二分貸て呉れ」

山「何でも此奴はあやしい、これから葬式のあとを見えがくれに追つて行くから、お前喋つちやアいかんよ、喋ると向うへ知れるから黙つていな」

馬「へい、だが旦那黙つて歩くぐらい草臥るものは有りません」

と段々遠見に追つて参りますと、五六町も行くゆと山道で、これから七八町のなだれで、海かい辺へんへ接しまして、風も大きになぎました様子、併しかし海岸だからどうくざばくと浪を打つ音絶えず、片かた方はは山手になつて右と左に切れる道があつて、こゝに石が建てゝある。

山「おい待ちな、此処に道知るべが書いてある」

馬「何が書いてありますか」

山「此処に何処の何村と書いてゞもあれば、何いれず国くに尽づくしにある国だろうから何とか分ろう、心配をしなさんな」

馬「日に本っぽんは広いけれども鹿兒島熊本ならまだしも、支那朝鮮などと来ては困りますねえ」

山「黙つていなよ、多分にほん日本の内だから大丈夫だ、えー南みな走なみ清しみず水かんの觀のん音せい西北せいほく大津道横おおつみちよ須賀道こすかみちと、なんだ何処の国かと思つた」

馬「鹿兒島ですか」

山「どうも師匠べらぼう籠ぼう棒ぼうだな」

馬「籠棒と云われちゃ心持が悪いねえ」

山「風の吹　しで元の処へ歸つて来たのだ、始めは鴨居とりか西北とで一里半も沖へ出たろう、

あの通り烈しい風であつたが風が東南風に變つて元の所へ来たのだ、鴨居よりは些と寄つているが、師匠此所は真堀村に違えねえ、左様して見れば彼所は焼失せた真堀の定蓮寺に違えねえ、あゝ有難え」

馬「何所の国で」

山「ひとつ国さ、此のヤンツウ坂を越せば直己の家まで六町しかない所だ、おいなにを泣くのだ」

馬「嬉し涙が出ました、私は百里も先かと心配したが宜い塩梅で、家まで六町の所まで来ていて気をもんだ馬鹿氣さてえなごぎいませんねえ、有難うごぎいます、ありがてえ、大津の銚子屋は直きだ、一町ばかりきやアねえから銚子屋へ行つてお飯をたべましょう」

山「飯のことばかり云つているなア」

と段々跡を慕つて行くと彼等は竹ヶ崎の南山へ這入るから付いて行くと、柱が二本建つている外門の処へ四人とも這入りました。

山「師匠々々、此処へ這入つたが、こんな立派なうちから出る葬式に差担とはへんだなア」

馬「へんは宜うごぎいますから銚子屋へ行きましよう」

山「今行くよ」

ともとの道へ帰ろうとする山の際きわの、信行寺しんぎやうじと云う寺から出て来る百姓てい体の男おとこが、鋤すきを持って泥だらけの手で、一人は草鞋一人は素足で前まへへ立たって、「誠に貴方あなたどうも思おもい掛かけねえ所でお目にかゝりました、貴方あなたは石井の旦那様、東浦賀の新井町の旦那様で、とんだ所で誠に、三年跡に川崎の本藤で侍に切られる所を助けて頂きました私わしは高沢町の米藏で：これはどうも誠に思おもいがけなくお目にかゝって」

山「その後のちは私の所へ来られて種しゆ々々、頂戴もので：私も会所へばかり出ていてお目にかゝらんが何時いつも御無事で」

米「こう遣つてはア命を助かりまして達者で居りますも旦那様のお蔭で、一日でも旦那様のお噂ばかりして：鹿かの八はちおい、彼あの時お目にかゝった旦那様」

鹿「どうも彼の時は有難うございました」

山「まあ、大層早くから稼ぐの、農業か」

米「なアに葬とむらひ式しきがありましたねえ、何う云う訳か此の山へ立派な家うちが建ちましたが、何だか元お大名の御家老様でえらい高をとった人だそうで、それが田地でんじや山林やまを買かって何不足はねえが、欠けと云うのは奥様がおツ死ちんだそうで、急だから内葬ないそうにしようと云うの

で、家を建うちつた許ばかりで葬とむらい式を出いしたくねえてえ、早く穴を掘いれつて云い付つかつたで急に寺へ手伝ていに参まりますので、鹿の八と二人で今穴を漸しく明あけたので、是こから葬とむらい式があるの

山「彼あすこ処の山の上の柱が二本ある枳きこく殻うわの植うつてある彼あれか」

米「はい」

山「馬作お前は此の人を知しっているか」

馬「いゝえ」

山「そら三年前あ池上のお籠ありの日あで、彼あの人だ」

馬「おゝこれは妙だ、誠まことに暫しばらくくどうも、お前まへさんも此この近あ処あで」

米「彼あの時ときよく冗あ談あ口くちをきいて：誠まことに久ひさし振ありで：お前まへさんも此この近あ所あで」

馬「旦那だんなお願ねがいで：飯いが食たい度たいからおつつけでも宜いいから早あく行いつて食くべたい」

山「騒さわ々ざしいよ」

米「どうぞまア此こ方あへ」

山「ありがとうございます」

二十

井桁屋米藏の家の門へ来ると、ぷっくくと饅頭屋で煙が出て居ります。

米「お直やお目にかゝったよ、ソラいつぞや私を助けて下さった旦那様にお目にかゝったよ」

直「おやまあ馬作さん暫く」

山「師匠あれは何だ」

馬「あれは西の江戸屋に勤めをしていたお直というので、祭の時分から知って居ります」

馬「直ちゃん、どうも誠に暫く」

直「馬作さん本当に暫く、何うも内の人はねお前さん旦那に助かって、お礼に上つても半間な時分行くもんですからお目にも懸りませんでねえ、どうも」

馬「直ちゃんの家とは知らなんだ、饅頭屋の女房になつて居るとは、人間は了簡の付けようですなえ」

直「馬作さん、お前さんも知つておいでのあの粥河圖書と云う人が、田地や山を買つて鎌倉道へ別荘とかを拵える話をお聞きかえ、それに奥様が死んだてえが其の奥様でえな、そ

れ三年前堤方村の葭簀張りに茶の給仕していた岩瀬と云う元は立派な侍の娘が、粥河様と一緒になつたと云う事だが、その奥様が死んだと云うと、あのおらんさんと云う嬢が死んだのだねえ」

馬「成程可哀そうな事をしましたねえ、二十歳ぐらいでしょうかもう些と出ましたか、彼のくれえな別嬪は沢山はありませんよ、彼れが死ぬような事じゃア馬作などは船で死んだつても宜いのですが、惜しいことをしましたねえ」

山「おい／＼お前は是から其の穴を掘った処へ棺を埋る手伝いをするのか」

米「へい私が埋めるので」

山「湯灌は誰がするのか知らねえが、お前の働きで仏の顔を見られようか」

米「湯灌は大体系柄の邸では家ですが、殊によるとお香剃の時蓋を取ると剃刀を当てる時何うかすると顔を見ます事がござります」

山「有難い、それじゃア己に鹿の八の扮装を貸して呉れないか、穴掘に成つてお香剃の時仏様の顔を見度ののだが、馬鹿気ては居るが、友達の積りで連れて行つては呉れまいか」
鹿「勿体ねえ訳で、旦那様が穴掘になつて」

馬「お止なさいな、貴方はあの嬢に未練があるので…旦那は一度半治さんを掛合にお遣ん

なすつたら縁付いたと聞いて、諦めても矢張惚れて居るので……貴方が穴掘の形は團十郎が狸の角兵衛をするようで、余り旨くは出来ませんぜ」

山「黙つていねえ、お前はまア家へ帰りなよ」

馬「だつて腹が減つてどうも」

山「飯は喫べてよ……お母様には釣に出て颯風をくつたなどと云うとお母さんが案じるから云うなよ、西浦賀の江戸屋で御馳走になつて泊つているが、明日は早く帰ります、他に用がある積りでお前へ帰んな、帰つてもお母さんに詰らんことを云いなさんな」

馬「宜しゆうございます、それじゃアお先へ帰ります」

これから着物を借りて山三郎は穴掘の扮装になりまして、手拭はスットコ被りにして、井桁屋と二人で埋るときの手伝となつて行つて様子を見てみると、向うも急ぐとみえて、夜の明けん中と云うので、漸く人は五人ばかり付いて来て、仰願寺様な蠟燭を点けて和尚は一人でお経をあげて、棺桶を取つて蓋を開け和尚が髪をすりかけて居るを、山三郎は米藏の後からそうつと蓋を押えながら差覗くと、少々夜がしらんで明るくなりましたから、見ると仏は十七八の娘で、合掌は組んで居るが、変死と見えて上齒で下唇を噛みまして、上眼をつかつて仰のけになつて居るから、はてなこれは変死だなと能く見ると、自分

の縁類なる東浦賀の大ヶ谷^{おおがやまち}町の吉崎宗右衛門と云う名主役の娘おみわで、浦賀で評判の美人だから、はてな奥様が死んだと云つて吉崎の娘を葬るは、はて訳の分らん事だが是は怪しいと思ひまして、山三郎は米藏よりは先きへ逃げ出して来まして、お直の処へ来て着物を着換え、是から急いで真堀の定蓮寺へ参りましたが、夜はシラ／＼明けまして、定蓮寺の彼の本堂へ来まして、喜連格子^{きつれごうし}を明けて這入りまして、和尚に見咎められてはならんから、彼方^{あちこち}此方^{ぬきあし}と拔足をして様子を見ると、人も居らん様子で、是から上つて畳二畳を明けて根太板^{ねだいた}を払つて、窃つと拔足をして蓋を取つて内を覗くと、穴の下は薄暗く、ちら／＼灯火^{あかり}が差しますから山三郎は訝しく思ひ、棺の中から灯^{あかり}のさす道理はなし、何んでも怪しいと考え、棺桶の蓋^{ふた}を力にまかせて取りますと、此の棺の中に何物がありますか、次席に申し上げます。

二十一

新井町の山三郎は真堀の定蓮寺の本堂の床下に埋^{うず}めてある棺桶の蓋を取ると、この中に灯火^{あかり}が点いておりまして、手燭^{てしよく}に蠟燭^{ろうそく}が点いて、ぼうつと燃えております。中に居りま

す婦人は年が二十一二で、色白の品の好い世にも稀なる美人でございます。扮装は黒縮緬
 に変り裏の附きましたのに帯はございませんで、薄紅色のしごきを幾重にも巻附けまして、
 丸鬚は根が抜けてがつくりと横になつて、鬢の髪も乱れて櫛簪挿も抜けて居てありませ
 んで、何う云う訳か女の前に文売のような物があつて、山三郎が覗くと件の女は驚きま
 して山三郎の顔を見ると直に傍にありました合口を取つて今咽喉笛を突きに掛りますか
 ら、山三郎は驚き飛掛つてもぎ取ると、見られてはならんと思ひまして前の文売を取り、
 急いで懐中へ入れて隠します様子故、まア此方へお出でなさいと云うので彼の女を本
 堂の上へ抱上げまして、彼の手燭に点いております蠟燭の灯火を女の前へ置きまして、婦
 人が顔を上げまするを山三郎が見ますると、三年前池上のお籠の日堤方村の茶見世に出て
 居りました岩瀬主水の娘のお蘭で、見覚えがあるから、
 山「まア思い掛けない事で、お前さんは三年前に池上の田甫へ出口の石橋の処の茶見世に
 出ておいでのお蘭さんとか云う娘さんだねえ」

蘭「はい」

山「何う云う訳でお前まア此様な棺桶へ入れられて埋られたのか知らんけれども死んだ人
 なれば穴を掘つて墓場へ埋めなければならんが、本堂の石室の中へ入れて、殊に棺桶の

中に灯火あかりの点いて居るのが誠に私には何うも実に怪しく思わるゝが、一体何う云う訳でお前さんにや合口を持つて死のうとするのか、是には何か深い訳のある事だろうが、何卒どうぞ私に聴かして下さい、早まった事をしてはなりません、何うぞ訳を聞かして下さい」

蘭「はい、誠に御親切に有難うございます、私が活いきておりましては夫に済みませんこと、操みさおが立ちません、どうぞお見遁みのがし遊ばして、この儘死なして下さいのが却かえつてお情なさけでござります、思いがけなく貴方様にお目に懸り、面目次第もないことで、深くお聴き遊ばすと私は辛わたくしうございますから、此の儘どうぞお殺し遊ばして、何卒どうぞ合口をお返し下さい」と云いかけて、わア一つと其処そこへ泣倒れますから、

山「まあ、死ぬのは何時いつでも死なれるから、私も斯うやってお前を助けるからはいざお死しになさいと刃物を渡す訳には人情として出来ん、何うでも死なんければならん死なんければ操が立たんと云う訳なら強たつて止める訳にもいかんが、私わたしが一通り聴いて成程と思えば決して止めはしません、何しろ此処で話をして居ると死人を掘返したとでも云われては飛んだ罪を被きせられ、人の眼に懸ると面倒だから私わたしが連れて往ゆく処へ厭でも往つて下さい、何卒どうぞ私の云うことを聞いて下さいよ」

とこれから元の如く棺桶の蓋をして、石室も元のようにして蠟燭あかりの火を消けして其処そこ等を

も片付けて、厭がるお蘭の手をとって、連れ立ち、鴨居の横を西に切れて東浦賀へ出まして、徳田屋と申す舟宿がありまして、これは旧来馴染の一番舟のである家でござりますが、其処へ参ると、

舟宿「これは旦那お早く何方へ、昨日つりにお出なすつたてえ」

山「あい、釣に往つたが訳があつて脇へ廻つたのだが、大急ぎで舟を一艘仕立て、天神山まで行つて呉んな」

舟宿「へい直ぐに、貴方が一人で」

山「急の用で一人連れがある……もし其処に立つて居ては人の目に懸るから此方へ這入つて」

蘭「はい、御免なさい」

と眼も何も泣き腫して、無類の別嬪がしごきの扮装で家へ這入りました。

二十二

平常堅い山三郎が、別嬪を引張つて来たから、徳田屋の亭主は早呑込みに思い違えて、亭主「旦那久しいお馴染様じゃアございませんか、何も天神山迄入らつしやらないでも、

お母つかさんに知れて悪くば知れないように何うでも出来ませ、奥の六畳は狭いけれども、間まが隔へだつて宜うございます、彼所あそこなれば知れませんか、お泊りなすつても宜うございます」

山「そう云う訳じゃアない、少し仔細があつて此処にやアいられないから、舟を早く仕立つて、親方達者そうなのを遣つて呉んな」

亭「へい畏かしこまりました、貴方此方こちらへお這入りなさい、そうして旦那、あの御婦人は御番所の前は手形が入りませぜ」

山「手形はない」

亭「じゃア斯うしましょう、知れないように頭巾でも被かぶらせ、扮装なりを変え、浜町の灯台のところへあの御婦人は待たして置いて、貴方はお一人で御番所を通つて、それから岩の処で御婦人をお連れになつたら宜うございませう」

山「其様そんなことをしてはられない、罪は己が負うから宜い、人の命に係わる事だから、急いで、布団を三つも入れて板子の下へ隠して行けば宜い、食物たべものは何も入らん、彼方あっちへ行つて食うから、早くしろ」

亭「かしこまりました」

と山三郎の云うことだから大丈夫だと、亭主も急がせまして、前まえ艫えろが二人、脇わき艫が二人、

船頭一人都合五人飛乗りまして、板子の下に四布布団よのぶとんを敷いておらんを入れ、

山「窮屈でも少しの間の我慢で…陸おかへ着けば何でも有りますから…おい早くしな」

と是から舟を漕出しまして番所の前へ出ますと、其の頃番所の見張は正しいが、会所へ日々出まして役人衆とは心易いから山三郎は一人出まして、

山「山三郎私用あつて上総かずさの天神山まで参ります」

と云うと板子の下に別嬪べっぴんがおります事は存じませんから、役人衆も宜しいと許します。

それからこう行くと丁度朔風なつらいと申して四月時分も北風が吹く事がありまして、舟は益々早く、忽ち只今なれば四時間ばかりで天神山の松屋と云う馴染の所へ参りました。

松「これは旦那、さア此方こちらへ」

山三郎は離れた所が宜いと云うので奥の離れ座敷の二階へ連れて参りましたが、お蘭は心配のせいにかきやくしゃく瘡かさが起つて来る様子、薬を取寄せなまじい医者いしやを聘よんで顔を見られてはならんと、眼の悪い針医はりいしを呼んで種々しゆづ介抱致して、徐々そととお蘭に聞いたが、何うあつても訳を申しません、操が立ちませんからどうぞ私を殺して自害をさして下さいと云うのみ。或る朝二番船も出まして、もう一人も客はおりませんで寂然しんぜんとしております。山「お蘭さん、少しは今日はお気分は宜うございますか」

蘭「はい」

山「なる程少しはおちついた御様子だ：改つて云うまでもないが、お前さんを彼処から連れて参つて、今日は十四日で丁度四日になります、私は無沙汰に家を明けたことは、未だにございませぬから、定めし母が老体ではあり嘸案じていませう、お前さんが自害をしようとするのを強て助け、斯うやつて連れて来ても、矢張海へ飛込むの咽喉を突くのと云つて見れば、それを見捨て、帰る訳にもいきません、お前様が仔細を話して下さらん中は私は何時までも宅へは帰りません生涯でもお前さんの傍にいなければなりません、左様じやありませんか、お前さんが何時までも云つて下さらんと私に不孝をさせるようなもの、私は賤しい船頭を扱う　船問屋の詰らん身の上だから、蓮つ葉にべら／＼喋るだろうと思いだらうが、私も男で、人に云つて害になることは決して私は云わん、言つて呉れるなとお云いなら、口が腐つても骨がくだけでも云わん」

二十三

その時山三郎は、お蘭に向つて「武士に二言なしと云うが、私も少し武士の方に縁のあ

る身の上で、緩くり話をしましようが、お前さんも、元は本多長門守の御家来で立派な武士の嬢さんが、あの堤方村へ茶見世を出し、失礼だが僅かな商いを能くまアなさる、感心な、母親の為に彼んな真似をなすつた、私も通りかゝつて見世へ休んだとき、お母さんの看病には恂くりした、孝心なことで、彼ア云う娘をと陰でお前さんを賞めていたので一層の心配をします、それを恩に被せる訳でもなんでもないが、何うぞお前さんの力になつて上げたいと江戸屋の半治という者を頼んで、お前さんがお独身でお在ならお母さんぐるみ引取つて女房に貰いたいと話をしにあげた所が、もう粥河圖書と云う人へ縁組が出来たと聞きましたから、それは結構な事だ、何処でも好い身柄の処へ縁付けば結構だと私もお前様の事は陰ながら噂をしていたので、処が計らず釣に出て真堀の岸へ吹き上げられ、定蓮寺の床の下へ棺桶を埋めるのを見て、怪しいと思つて跡を付けて出て往つて見ると、道でまた葬式に遇つて、それを段々調べて見ると私の縁類の吉崎のおみわと云う娘で、其の娘を奥様の積りで蛇ヶ沼の信行寺へ葬むるといふのは訳が分らず、奥様と云えばお蘭さんに違いないと、私は取つて歸して定蓮寺へ来て見ると、棺桶の中に灯火が点いてありますから訝しいと思つて私が出したので、実に訳の分らん始末、それに今お前様がどうしても操を立てなければならん圖書に濟まんと云うばかりでは、何故死ななければならんか

理由が分らん、私も斯うして何所までもお助け申したからは訳を聞かん中は、私も男だ、一生涯でもお前さんの傍にいなければなりません、私にそれ程不孝をさせて呉れては困るじゃないか、くどくもいう通り決して口外はしないから訳を話して下さらんか、頼むから何卒お蘭さん」

と山三郎は手を突いて頼む様にして、柔しゆう云われますから、お蘭は親切なお方と顔を上げて山三郎の顔をじいつと見詰めておりましたが、眼に一杯涙を浮めまして、

蘭「誠に三年跡にお恵みを頂き、蔭ながら貴方のお噂をしております、俠氣の御気性でもや世間へ云つては下さりませぬから、段々との御親切ゆえ申しますが、私が活きていては夫に濟まないと申す訳を一通りお話を致した上からは、何うでも活きてはおられませんから、お聞きの上は合口をお返しなすつて、直ぐに此の場で自害をさして下さるならば身の上をお話し致しましょう」

山「それは困ります、併し何う云う訳か話の様子に依つて死なすとも宜い事なら殺して詮がない、まア兎も角もお話しなさい」

蘭「はい、実は私は三年跡粥河圖書方へ余儀ない縁合で嫁付きまして何不足ない身の上で、昨年九月頃から、夫は鎌倉道の竹ヶ崎の南山と申す所へ田地と山を買い、其所へ別荘

を建ると申して出ました切り手紙を一通送つて遣さず、まるで音信がございませぬから、
 愷気ではございませぬが、万ひよつとほか一外ますはなに増花わたくしあきがあつて私に倦わたくしあきが来て見捨みすてられやしないか
 と、心細い身の上から種々いろく心配しております所へ、小兼と申す御存知の芳町の芸者が来て、
 勝手を知っているから船に乗つて一緒に行けと、小兼に連れられて南山と申す別荘へ参り
 ました所が、圖書は出ておりませんで、長治と申す下男ばかりで、どうして此の山の中で、
さげさかな酒肴さけさかなを拵しらえますにも大抵の事ではございませぬのに、長治一人で早く出来ませぬ訳もな
 し、どうもそんな事も不思議に存じまして、用場へ参ろうと思つて、三尺ばかりの開戸ひらきど
 がありますから其処そこを開けますと、用場ではなく、其処は書物棚になつておりまして本箱
 や何かゞ数々ありましたから、粗忽すつとをしましたと私わたくしが締めようとして其処でつい足すべが迂まがり
 まして、書棚の書台へ肘ひじが当たりますと、劇場しばいでいたす廻り舞台のようにぎゅーと開きまし
 て、不思議のこと、後あとへ下りますと書棚の下に階梯はしごの降口おりぐちがありまして、あゝこんな所
 に階梯の降口はない筈だが、事に依つたら此処から他の座敷へ抜ける道でも附あいて在つて、
 其所そこに婦人でも隠してありはしないかと、まア愷気ではございませぬが私わたくしは案わたくしじられます
 から、その階梯を降りまして漸々ようやく手さぐりで参りますと、暫くの間廊下わらわのようになつて、
 先に広い斯う座敷の様な所で、廻りが杉戸のような物が二重に建つて居りまして、中に人

は居りますが、申すことは些ちつとも分りませんから、欄間から灯火あかりのさすのを見て、はてなと欄間から覗いたら少しは事も分ろうと、机を台にして欄間から覗きまして、実に驚きましたが、どうか世間へは何卒どうぞ此の事ばかりは貴方だから申しますが、お話しは御無用に願います」

二十四

山「へーえ、其の縁の下へ階梯はしじが掛つて、床の下が通れるようになって、成程、で其処そこを覗くとどうなつて居りました」

蘭「その床下へどうして彼様あんな広い座敷を建てましたか、二間程ふたまの大広間がございました、夫圖書もおりますし、千島禮三と申す以前下役の者もおります、宅へも参りまする周玄と申す医者も傍にござりまして、其の外百人余りも其所そこにござりましたが、其の者どもは皆夫の同類で、主人つれあいは其の百人余りの盜賊の頭かしらぶん分ぶんになつておりますから、それを見まして私わたくしは実に驚きました」

山「成程、浦賀辺へ此の頃は、大分盜賊が徘徊して、寺や何かへも強盜おしこみに這入ると聞きま

したが、直き鼻の先の竹ヶ崎へ百人から盜賊が隠れていようとは、ふうんーそれから何うしました」

蘭「はい、その傍の柱の所に年の頃十六七になります器量の好い娘が縛られておりました、あゝ荒々しい情ない事をする、何処から勾引して来たか憫然にと存じまして、其の娘を見ていると多勢寄つて其の娘を今晚は□□の□かきめるのといい、終いに仲間同志の争いになりましたが、夫が見兼て此の娘は私が貰つたと傍に有りました刀掛の脇差の小柄を取りまして投げ附けますと、其の娘の乳の辺へ刺りました、きやつと云いましたから恟りして机から落ちたとまでは覚えておりましたが、其の折何処か脾腹でも打ちましたか、それから先は夢のようだとんと解りません、暫く経つて私が気が附きまして眼を開いて見ますと、四辺が暗うございませうから、出ようと存じても出る事も立つことも出来ませんで、私は死んで埋められたのではないかと手を撫て見ると、私の手に火打袋が掛つております、これは圖書が野掛に出ます時常に持ちます火打袋で、中には火道具や懐中附木もありますから火道具を出して火を移しますと、傍に燭台も蠟燭もありますから、取敢えず灯を附けて見ますと、私は白木の箱に這入つて居りますから、前を見ますと夫圖書が私へ贈りました手紙が一通と傍に懐劍が添えてあります、はて不思議な事と直ぐにその

手紙を開きまして、読んで見まして、実に私は棺桶の中に泣倒れて居ります処へ貴方がお出で遊ばして私をお救い下すつて、斯ういう処までお伴れ遊ばして、お母さんまでに御苦労を掛けますのも私故で、何とも御親切のお礼の申し様もございませんが、何分私が活き存命なからえておりますと、他から夫の悪事が露見しても私が申したとしか思われません、左様そうなりますと私はどうも、仮令たとえ悪人でも一旦連添たしいました圖書に操が立ちませんから何卒どうぞ自害をさして下さい、左様すれば女の道も立ちます事で、お情なさけにどうぞ懐剣を返して下さい」と涙ながらに申しました。山三郎はお蘭の話つぐを熟々／＼聞いておりましたが、

山「成程妙に巧たくんだもので……お蘭さん其のまアお前の亭主から贈ったという手紙をお見せなさい、まあサ見なくては解らんから」

と強いて云うゆえおらんも此の場になつてはもう是非がない、

蘭「はい、皺だらけに成つてはいますが」

と圖書より贈った手紙を出しましたから山三郎は開けて見ますと、文章は至つて巧みに、亭主が女房に手を突あやまいて詫あやまるように書いて有ります。

手紙の文意「我等儀主家滅亡しゆかの後八ヶ年の間同類を集め、豪家又は大寺へ強盗に押入り、数多あまたの金銀を奪い、実に悪いという悪い事は総すべて我等が指揮さしずして是迄悪行を累かさねしが、三

年跡そのもと其許を妻女に持つてから後は其許の孝行と貞節に愧はじて、何卒なにとぞ悪事を止め度たくと心掛おけ居るものゝ、同類も追々に殖え何分にも足を洗う事叶わず、然るに此の度たび其許に我等の悪事を見顕みあらわされ誠に慚愧の至り、さりながら同類の手前何分捨て置きがたく、是非なく真堀の定蓮寺へ気絶の儘埋葬いたすなり、されども気絶の事なれば棺桶の中にて蘇生するようなる事あるも測り難し、されど此の事が其許の口より露顕致せば大勢の難儀になる事なれば誠に非道の夫とも思わんが、何卒なにとぞ此の懐あいくち劍にて是非も無き事と諦め得心の上自害して呉れられよ、尤も我等も遠からず官かみのお手に遇あい死刑に臨む時、冥途にて其許に遇い詫言を申すべし、呉れ／＼も因果の縁合と諦め自害を御急おんぎ下され度く候そろ云々」

と云う様な塩梅に旨く書続けてあります。悪人でも連添う夫婦の情じやうで死のうという心になるお蘭の志を考えると、山三郎は憫あわれさに堪えられず、暫くの間ふみ文がら殻がらを繰返し〜読んで考えて居りました。

二十五

山「お蘭さん、誠にどうも御尤ごもつともで、お前さんは感心な方で、お前さんの御亭主を私わたしが悪く

いつては濟まんが、此の文面の様子では、三年あとお前さんを女房に持つてから、志を見抜いて、其の孝行と貞節に感じて今迄の悪事を止めようと思ひ込んだと書いてあるが、其の位見抜いて、頼もしく思つて居る可愛い女房が、悪事を見たからと云つて氣絶した儘埋るとは情ない、死んだか活きたか分らんなら何故薬を飲まして手当をして、氣が付いての上、偕斯う云う訳だからどうかお前を助けたいが助ける訳に往かんから自害して呉れと云えば、それお前さん、はいといつて自害もする人だ、其の心底を圖書が知つていながらお前さんを生埋にしたので、お前さんだから蘇生つた後も自害をしようとしなすつたので殊に私が此程までに様々云つても事実を明さないで、是は勿論死を極めておいでなさるから云わないので、これが普通の女であつたらわア〜騒いで屹度人を呼びましよう、それでも助ける人がなければ可愛や食物はなし棺の中で飢死に死んで仕舞うだけ、実にどうも非道の致し方で、お前さんはまア其の非道をも思わず、圖書を思う志、誠に夫を思う貞節、お前さんの志に免じて何うか圖書が改心するようにして遣りたい、私が是から浦賀へ歸つて役所へ訴えれば直ぐ番所の手を以て竹ヶ崎南山へ手当になる訳だが、なれども左様すればお前さんの志を空しくすると云う誠に其れも氣の毒な訳だから、圖書に人知れず会つて、篤と異見をして、圖書が改心の上は元通りお前さんと添わしたく思います、

其れゆえ私わたしは是から帰つて圖書に逢つて、当人に熟つく／＼々意見をしめますから、圖書が改心の実証を見抜くまでお前さんは死を止とどまつて、私わたしに命を預けて……いやさそんな事を云つては困るお前さんを殺す訳にはいかん、尤も云うまでもないが、愈々改心せぬといえれば仕方がない其の時はお前さんの望に任かして自害をさせましょう、先まず其れまでは」

と事を分けて諭しましたので、お蘭は唯はいくくと泣きながら返辞をして居りました。山三郎は又お蘭の心を想いやり頻りに宥なだめて居りますと、後うしろをがらりと開けまして、

男「御免なさい」

山「おい、其所そこを無暗むやみに開けては困ります、飛んでも無ねえ」

男「御免なすつて、もしお宅からお手紙が届きました」

山「どうして家の奴うちが知つて居たか」

男「へい徳田屋の船頭がうっかり喋つてお母つかさんのお耳に這入つたと見えました」

と持つて来た手紙を出すを、山三郎は訝いぶかしげに受取つて開いて読よみ下すと、驚きました。其の母の手紙には「お前の留守中いもと妹のお藤を強たつて貰いたいという其の人は、旧金森家の重役粥河圖書という人で、近頃竹ヶ崎へ田地や山を買い、有ゆう福ふくの人で、奥様おくさまが此の間お死去かくれで、何卒跡どうに嫁を欲しいと思うが、お前の妹お藤が相当な縁だといふので真堀の定

蓮寺の海禪和尚が橋渡しをして媒妁人を立てて貰い度いという、向うは急ぐからお前に相談しようと思うが、何分留守で仕様がなし、先方からは急ぐ、何うも角うも断りようが無いから、今日大津の銚子屋で見合をして、お藤が得心の上は粥河様方へ縁附けるから一寸知らせる、なれども用がなければ帰つて来て、用があるなれば別段帰らんでも宜い、結納を取替せる、此の段松屋に居るとのことが知れたから知らせる」唯た一人の妹お藤を盗賊の所へ縁附ける、結納を取替せるとあるから驚いた山三郎、思わず手紙をぱったり落して腕を組み、考えれば考える程可哀想にも、眼の前に居る此のお蘭を女房に持ち、悪事を見たといつて生埋にして、間もなく己が妹を貰おうと云うは如何にも人情にはずれた悪人、併し此の事はお蘭には云えず、心一つに憤つて居る。其んな事とは夢にも知らぬおらん「誠に何から何まで御心配下さいまして、貴方のお志は死んでも忘れません、何うぞ此の上何分宜い様に」

山「あの、大急ぎで船を一艘仕立つて呉れんか、一寸浦賀へ帰るから大急ぎで、風が悪いから其の積りで、食物や何かはどうでも宜いから…時にお蘭さん、あの母から手紙が来まして、黙つて四日も明けたもんだから大分心配して居る様子、一寸行つて来なければ成りませんが、今晚は何うせ来られませんが、明朝来られなければ明日遅くも夕景ま

中には屹度来ます、それまでの間は何卒自害するの海へ飛込むなどということは予々、申す通り止まって、こりやア私がお願ひです、若し左もないと私が是まで尽した事は皆な水の泡になるから、決して悪くは計らわんから、同じ人間だから悪い心にもなり又善い心にもなるものだから、貴方の思う圖書の心が直る様に何処までも他人を払って異見するから其の積りで、御亭主が善人になれば貴方の思つた心も貫き、其の上何卒もとく々にしたい心底、其れゆえどうか行つて来るまで待つて居て」

蘭「はい、実に有難うございます、お母さまは嘸お案じで、どうか早くお帰り遊ばして下さい、明日夕方までにお出になるをお待ち申します」

山「お蘭さん、貴方小遣が入りますから沢山は無いが少しばかり手許へ置いて行きますから、何ぞ好きなものを買つて遠慮なしにお上んなさい、気の酷く鬱ぐ時は、此の頃は稼の芸人が居るから其れを呼んで気晴しでもして」

男「船が出来ました、直ぐに」

山「船が出来た、じゃ行くよ」

山三郎は階梯段を降ります、残り惜しいから、お蘭は山三郎を船の処まで見送ります。山三郎も船に這入って気の毒な女だとお蘭の顔を見る、これが思えば思わるゝと申すのでござりましょう。船頭は山三郎が大急ぎと申すので腕一杯に漕ぎますが、何分風が向い風で船足は埒明きません。山三郎はじり／＼して居りますが、何うも仕方がない、朝の内は西風が吹き、昼少々前から東風から南風に変つて、彼是れ今の四時頃に漸く浦賀へ這入りました。山三郎は早くも船より上りまして新井町へ駈けつけて、家へ馳上つて見るとお母も妹も居りません、其処に留守居をして居るのが馬作一人。

山「おい師匠」

馬「へい、お帰りなさい、どうも実に驚きましたぜ、何処へ入らっしゃいました」

山「わきへ廻つて遠方へ行つた」

馬「どうもお母さんがお前と一緒に往つたのだから何処かへ行つて捜して来いと仰しやつて、それから私は江戸屋に入らっしゃつたが、はて何うなすつたかと云う様な事をいつてお家を出ましたが、何処へ往つたつてお出なさらぬのは知って居るから、ぶらく大りや何かして、程経つて帰つて見ても未だお帰りなさらぬ、はてなど又出掛けて、今度は

徳田屋さんで聞いて見ると、貴方は舟の中へ女の子を入れて松屋へお出なされたと言うが、あなた酷いじゃありませんか、私を捲くなんざア感心しましたぜ」

山「なにそう云う訳じゃアねえ」

馬「旦那ア板子の下へ女の子を入れて行くなんざア凄いな寸法で、併し旦那よくア彼の八釜しい御番所の前をねえ」

山「それ処じゃアねえ、お母さんは何処へ」

馬「お母様はね、いや実に妙不思議な事で、それ例の彼の粥河様のおらん様が死んだので、不自由だから、他から貰うよりは貴方の妹御をと云うので、寺の坊さんか何か頼んで其れが橋渡で漸く話が極つて、それからお嬢さんに話をする、何かそれ貴方が後見になつて妹に聲を取つて此の家を相続させると仰しやったのだが、其れじゃア私が済まない、矢張り兄さんを此の家の旦那にして私は他へ縁付きたいと云うので、処がね嬢さんが粥河様を見ると一寸好い男だもんだから岡惚をして、藤ちゃんはずうつと行きたいという念があるので、お母さんも遣りたいと云うので、詰り極つて、今日大津の銚子屋で結納を取換

せ」
山「もうお出掛けになつたか、あゝ残念だ」

馬「旦那何も残念な事はありません、お蔭で私も一軒旦那場が殖えたので」

山「のべつに喋るなよ、着物を着替えるから早く出せ」

馬「着物をお着替なさい、だが箆筒は錠が下りて居ます、錠はお母さんの巾着の中へ入れてありました。が彼の儘帯へ挿んで一緒にずうとお出かけで」

山「困ったな、じゃア出刃庖丁を出せ」

馬「なんです」

山「なんでも、喋らずに出せ」

馬「だつて疵だらけになりますぜ」

山「構わんから出せ」

と山三郎は癩癩紛れにガチ／＼とやつて着物や羽織を引出して、さつ／＼と着換えて脇差を挿たが、見相が變つて居りますから馬作は何だか解らん。

馬「旦那私は今日お結納のお取替え、お目出度いので御祝儀頂戴と内々悦んで居たので」

山「家へ帰えれ」

馬「へい、女郎買からお帰りで昨夜から持越しの癩癩などは恐れ入りますな」

山「斯う云うとき師匠洒落などというと聞かんど、何も云うな、黙って供をしろ」

と山三郎は急せきますから、家うちを駈出してどん／＼谷やん通つう坂ざかを駈下りまして、突いき然なり大津の銚子屋へ飛込んだが、丁度今結納を取替せを為しようとする所、是れを山三郎が反ほご古こにしよう、是から掛合になります所、一と息つきまして次を申し上ます。

二十七

引続きまして、山三郎は母いもうとと妹いもうとが先に大津の銚子屋に参つて居て、此これから見合に相成るという事を聞いて、驚おどきまして、宅たくを出て大津の銚子屋へ参つたが、もう間に合いません。広間の方には粥河圖書を始めとして居並んで居ります者は、前に金森家の同藩のように見せかけましたが、此れは皆同類で、圖書の傍そばに居りますのが眞葛周玄という医者、立派な扮装いでたちで短みじ刀かいはいをば側に引附けて、尤もらしい顔附をして居ります。其の側かた面わらには真堀の定蓮寺の留守居坊主海禪という、此れは破戒僧でございませが、是も外よそ出ゆきの袈裟こ法ほ衣もでございませが、何か有難ありがたそうろな顔附をして控えて居ります。此方こちらの方には母いもとと妹いもとの前まへに膳部を据えて大勢で何か頻りに勧めるのを兩人ふたりは返答に困つて居ります。

母「どうも御尤も様でございませが、生憎あいにく山三郎も居りませんことで、もう程無く帰り

ましようかと存じて居りますが、参つて居ります処も漸くに分つたような訳で、もう是も得心致しまして私もまア有難い事と存じて居る処ではございますが、何を申すも山三郎は留守の事で、あれも名前人の事でございますから一寸一言申し聞かせまして、得心の上でございませなければ、それはなんで如何様とお話も致しようが、今が今どうも御挨拶も出来かねますことで」

海「いやお母さん、それは至極御尤もじやが、此処にまア眞葛周玄先生という斯ういう立派な先生の媒妁があつて事をなさるし、私も坊主の身の上だから余の事は知らんが、不思議の事で、斯ういう御縁合になれば、私も誠にお馴染甲斐もあるような訳、どうかお帰りがあつて、それは成らんいやそれは斯うしてと仰しやれば、それは何うでも内々お話合もつく事で、貴方が御得心になりさえすれば山三郎殿は孝心の方で、お母さんの云う事を背くようなことはない、それは私も心得て居るが、どうか善は急げで、結納の所だけは一寸此処で取替せをなすつて、左も無いと私もまた仲に這入った甲斐もないと云うもので」

母「実に海禪さんの仰しやる通り御尤もでございますが、もう程無う帰りましたよう存じて居りますから、どうかもう少々お待遊ばして」

という所へ、

男「へい只今旦那が入らつしやいました」

母「はい、直ぐに何うか此の席へ参るように仰しやつて」

と云ううち案内をも待たずつかくと山三郎は母の傍に参りまして、

山「誠に恐れ入りました、大きに御心配を掛けまして相済みません」

母「本当にまあ私はどんなに案じたか知れないよ、何所に何うして居るかと思つたうち漸々天神山に居ることが知れてねえ、手紙を出したが知れましたらう」

山「拝見致して取敢ず立帰りましたが、未だ結納は取替せませまいな」

母「はい結納の事はお前を待つて居たので」

山「どうか直ぐにお帰り遊ばして」

母「直ぐにと云つたつてそう帰る訳には行きませんよ、先お前それにお出でなさるお方は

粥河様と仰しやる、元はお大名の御家老役をもお勤めなすつた立派なお方で、此の頃竹ヶ

崎へお出になつて結構な御普請を遊ばして、田地やお山をもお購求で、何不足なくお暮し

で、処が先頃奥様が卒去になつて、早くどうか嫁をと云うので、処が浄善寺へ私がお藤

を連れて御法談を聞きに参つた其の折に御覧なすつて、強て貰いたいと仰しやるので、他

の者では厭だがお前の妹だからと云うので尚お彼方あなで欲しいと仰しやるので」

山「左様でもございませうが、まだ結納の取替せを致さんのは幸いどうか直ぐにお帰りなすつて、実に私は驚わたくしきました」

母「直ぐに帰れといつても、お前の来るのを待つて居て、お前の坐る所へ整然ちやんとお膳もお兄あにさんのと仰しやつて心配をなすつて」

山「いゝ見ず知らずの者に馳走になるべきものでは有りませんから、お母様つかさんと私わたしと藤の料理代だけは当家こゝへ別に払いをして参ればそれで宜しい」

母「そんな事は出来ませんよ、そんな失礼な事をお云いでない、それよりはお近附になつて」

山「いゝえお近附どころではありません、直ぐにお帰りを願います」

と何かごとく致して居りますから、海禪坊主が見兼て山三郎の側へ参りまして、

海「誠に暫く、番場の地藏堂に居りました海禪で、お見忘れでしょうが今は真堀の定蓮寺の留守居で、雁田がんだに居りました時分は毎度お目に懸りました事もありましたが、あれに御座るは粥河様でござりまして、此の頃近辺に御寮が出来まして、浦賀へお出いでのときお藤さんを御覧で、どうか貰い度いということ、それに土地に名高いお家柄なり、旁かた々々山三

郎殿の御妹おいもとし御なれば是非申し受けたいといつて私わたくしへお頼みで、坊主の身の上でなだけれども実はお母つかさんも御得心又お妹御も納得のことで、結納の取替せまでに至りまして、間際になつて肝心の貴方が出いでがないので大きに心配致しておりました、早速お帰宅で、どうかこれへお席を取つて置きましたから、何うかこれへお坐り遊ばして、実にお目出度いことで恐悦な訳で」

山「いやお目出度いこともなんにもない、久しくお目に懸らんでしたが、海禪さん、折角の思おほしめ召しではございますが、妹藤は差上げる訳には参りませんと先方へお断りを願います」

海「へえーそれは又何ういう訳ですな、今貴方が御不承知では先方へ私わたくしが何とも云いようがございません」

山「云いようが有ろうが無かろうが手前は上げる事は出来ません、母や妹が得心でございませうが、何と申したか知りませんが、未だ結納の取替せも致さんのは幸いでありませう、此の事はどうか先方へどうも妹は上げられないと云つてお断りを願います、母と妹を連れて直ぐに帰ります、おまえさんも御出家の身で縁談の事なぞには口をお出しなさらんでも宜しかろうと私わたくしも失礼ながら存じます」

海「それは左様そうじゃけれども、今になつて其んなに仰しやつて下さつては言訳がない、何うかもし折角の御縁でこれまでに成りましたから」

山「折角でも何でもいけませんと先方へお断りを願います」

と此の問答を見兼ねて眞葛周玄が側へ来て、

周「へい、初めまして、愚老は眞葛周玄と申す至つて不骨物ぶこつもので、此の後ごとも幾久しゆう御別懇に願います此の度たびは不思議な御縁で粥河氏よりの頼みで、届かんながら僕が媒妁なこうど役を仰せ付けられて、予かねてこの浦賀に於ても雷名轟く処の石井氏の妹御いもご、願つても是れは出来ん処をお母つかさまもお妹御も御得心で誠に有難いことで、大夫も殊無ことこのうお喜びでございませぬ、どうか結納の取交とりかわせを致そうとして、既に只今これへ墨を添え紙をも用意致して、是から書こうという処で、御得心の上は速すみかに認めしたます心得で」

山「いや何うか此の事は先方へお断りを願います、母が得心でも妹が参りたいと申しませぬ、此の山三郎一人不にん服でございませぬから、左様粥河様とやらへ何うか仰しやつて下さるさように願います、貴老あなたも媒妁なこうど役で御迷惑でございませぬが、直ぐに引取りますから

左様思おぼしめ召して下さい」

周「これは当惑致しますな、折角此れまでになつて、何うも親御も妹御も御得心であるのに、遅うお出いでになつて今になつて私は不わたくし服じやなどとおっしゃつては媒なごうど妁ちちぼの立端たちばがござらんからねえ、斯うやつて皆朋友の方も目出度いといつて祝いわいに來て下すつて、事がきまろうと申す所で、今になつて厭いやと仰しやつては誠に困りますねえ」

山「困つても何でも上げられんから上げられんと申すので」

周「それじゃア何処迄も是れを破縁やぶ縁なさる思おぼしめ召よしかえ」

山「いや破縁やぶ縁と申すが結んだ縁なら知らん事まだ結ばんに破縁やぶ縁という事はありません」

周「貴方がお出いでというので斯う遣つて詰らん魚でも多分に取寄せて、先まずお膳まで据えてお待受け申すのでござるからねえ、何うか媒なごうど妁ちちぼの届かん所は幾重にもお指図を受けまして致しますから是は何うか先まず御承引を願ねがひたい」

山「いゝや御馳走にはなりません、知らん方に仮令酒一杯でも戴たいては濟みませんから、

当家へは三人分だけの料理代を別に払つて参りますから左様思おぼしめ召よして下さい」

周「これは怪けしからん事を仰しやる、貴方は此の浦賀中で男おとこ達たちとか侠客とか人がお前ま

えさん
様を尊敬する所の現在名主役をも勤めて立派なお方、物の束たばねをもなさる方で礼儀作法もお心得であろうのに、何とも何うも怪けしからん事で、此の方ほうの馳走の代を払うなどは以ての外な事、よし其れは兎も角も今になり妹御を遣るの遣らんのとの事を仰しやっては僕は退ひかれん、君も名高いお方に似にあわ合ん事で」

圖「これく控えておれ」

と粥河圖書は横着者でございませうから末席ぼつせきに下つて手をつかえ、

圖「初めてお目に懸ります、自分は粥河圖書でございませう、此の度は又不思議な御縁で、以来は幾久しく何分にも御別懇に願ひます、此の者は眞葛周玄と申すが、只今喰たべ酔つておりまして失礼の事のみ申上げ甚だ相済まんが、何卒なにしろぞお氣に障さえられぬよう、当人に成り代り圖書がお詫を申上げます、殊に自分も尊兄のお出いでをお待受け申すうち大きに酩酊致して失敬の事ばかり、其の辺は幾重にもお詫を申上げますが、何うか只今申し上あぐる通りゆえ、届かぬ所は何どのようにもお指図に従ひ、斯うしろと仰せがあれば其の仰せに従ひまするので、手前も親も兄弟もなし、殊には貴方のお妹御を申し受ければ、貴方のような兄にいさま様を設けるので、此の上の事はありませんし、誠に当地へ参つても心丈夫なり且かつ何事もお兄あにい様さまのお言葉は背かかん心底でござるから、何うか御不ごふく服でもございませうが、何が斯う

すれば御意に入るとか、あゝすれば宜いとか御腹藏なく仰せ聞けられて、何うか結納とりか交わせの所を何分にも御承引下されたい訳で」

山「何うも御丁寧なる御挨拶で痛み入ります、何卒どうぞお手を上げられて、折角の御所望ではございませうが、仔細いもうとあつて妹を差上げる訳にはゆきません、と申すは妹には別に婿を取つて私わたくしが後見になつて石井の家を相続いえさせまするので、是には種々しゆ／＼深い訳のある事で、何うも此の妹いもとは上げる訳には参りません、直ぐこれで引取りますから左様思召おぼしめして下さい」

圖「それでは何うも当惑致します、是までに相成つて今不承知じやと仰しやつては圖書は立端たちばがございませぬ、此処これに参つておる朋友の者は皆前々ぜん／＼同屋敷におりました同役の者ばかりで、これにお聞き遊ばせば知れますが、浪人しても聊いさ／＼か田地や山を購求かひもとめて、お妹御に不自由をさせるような事は致さん積りで、事によれば母公ぼこうまで共々お引取り申し度たい心得でおる程でござるから、左様仰せられずに何卒どうか此の事はお聞濟相成る様に願います」

山「いや上げられません、妹いもとが参りたいと申しても母が遣りたいと申しても、此の山三郎だけは差上げることは出来ません」

圖「何うあつても御承引はございませんか」

山「はい、何うあつても差上げる事は出来ません」

圖「何が御意に入りませんか、是までになつて遣られないと仰しやる其の思おぼしめ召しを承わりたい」

山「山三郎は男でございませぬから情なさけと云うことを存じておりまして、斯様な満座の中で申すことは出来ませんが、貴方がお宅へお歸りになつて篤とくとお考え下さい」

圖「どう考えますか、どのように考えまするのか」

山「貴方は御浪人なすつても以前は立派なお武士さむらいさま様で、私わたくしのような船頭を相手にする廻船問屋如き者の妹娘を貰いたいと仰しやれば、唯はいと二ツ返辞で差上げんければ成らん処だが、それが上げられんと云うのは何ういう訳だか貴方の心に篤とくとお聞きなすつたら解りましょう」

圖「心に問えと仰しやるのか」

山「はい貴方のお心に聞けば直じきに分るで有りましょう」

圖「心に問いまして分りませんが、何うか仰せ聞けを願います」

山「いゝえ此所こゝでは申されませぬ、今は分りませんが後あとで分ります…さア行きゆきましょう」

と山三郎は母の手を取って表へ引出すと、母も妹も何だか訳が分りませんから、うろ／＼して居るうちに、山三郎は帳場に参つて三人ぶりの酒料理代を払つて外へ出ました。妹なんぞはちと腹を立ちまして、粥河さまは男も好し人柄もよし、金はあるし、立派な人だから、此家に縁附けば仕合せと思つて腹の中に喜んで居たのに、兄さんはそれだのに遣つて呉れないのだよ、余りだ、と腹の中では思つて居るが、まさかに口には出し得ないで唯しお／＼として後に附いて家へ歸つて参りました。

二十九

家へ歸ると、供に立ちました馬作はそこへ飛出して「私もあの前お座敷へ出ようと思いましたが一向様子が分りませんで、旦那今日のはまア一体何うしたんです」

藤「本当に馬作さん私は冷汗が出たよ」

馬「旦那はついしか荒い事を仰しやつた事は無いが、それも宜いが三人前の料理代を払うなどとは本当に愛敬のない仕方だ、彼れはどうも苛い、何でも理由があるに違いない、理由がなくなつて彼様になさる氣遣はねえ、何うも理由がありそうだ」

山「あゝ家へ帰つてまア安心した、さア〜お母さん此方へ、妹も此方へ来な、お前が折角行きたいという処を兄さんが止めて定めておつに思つたらうが、そこには種々深い理由のある事で、又兄さんが粥河よりもそつと立派な優つた者を見立てゝ遣る、心配しなさんな大きに何うも癩癩に障つて手荒い事を云つて心配させたが、勘忍して呉んな」

馬「何ういう訳でございますか苛くお怒りで、今いう通り何か是にやア訳があるのでしようが、是は何うも藤ちゃん仕方がありません、御縁のないのです、その代り今度お兄さんのお見立になるお智さんはね、是は大した者がありますよ、彼よりは好いと云うんだから何んなに好いか知れませんが、粥河さんはね、あれで好い様に見えても一寸いけすかない処がありますからねえ、いやにこう色は白いようだが何だか煉瓦の裏通りと云うような処がありますからねえ」

山「まア宜い、何ぞで一盃遣りましょう」

と酒を取寄せ話をして居る中に灯火を点けます時分になると、大津の銚子屋から手紙で、小さな文箱の中に石井山三郎様粥河圖書という手紙が届きました。

馬「旦那お手紙で」

山「何処から」

馬「銚子屋からで、粥河様でしょう」

山「使の者は待つて居るのか」

馬「へい待つて居ります」

山「なんだ」

馬「何だつて粥河さんは余程藤ちゃんに惚れてるんで、先刻彼の位に云われて見れば、大概の者は腹ア立つて、なに彼ばかりが女じやアねえ、他から貰うと云うのだが、それ又謝り口状を云つて遣すなよこんざア惚れてるてえものは妙なもんでねえ」

此方の山三郎は封押切つて手紙を読みかけると、

馬「旦那、なんと書いてありますか心配で、どうか一寸」

山「なんでも宜いよ」

馬「何ういう訳か一寸お見せなさい」

山「さア」

馬「此奴ア些とも分りませんねえ、残らず字ばかりで書いてありますから」

山三郎は読みかけた後をだんく見ますと、其の文面に

以手紙申上候然れば先刻大津銚子屋に於て御面会の折柄何等の遺恨候てか満

座の中にて存外の御過言其の儘には捨置難く、依これによつて之明いぬ晚ちゆうこく戌ちゆうこくの中刻小原山に於て
 再さい応おう承たくわり度候間能く御覚悟候て右時刻無遅滞御出これありたく有之度此段申進もうしん
 じ候御返答可有之候也

四月十四日

粥河圖書

石井山三郎様

という書面ではそれが決闘状はたしじようで、山三郎はにっこりと笑つて直ぐに返事を認めました、その文面には

先刻大津の銚子屋にて御面談の儀に付御書状の趣き逐一承知仕候御申越の時刻無相つかまつり
 違く御出合申可く貴殿にも御覚悟にて御出張可有之此段及御答候也これあるべく
くおであいもうすべく

四月十四日

石井山三郎

粥河圖書様

という是れが決闘状はたしじようの取遣りとりやでございませうが、向は盗賊むこうの同類が多人たにんず数居りますから、
 其等それらが取巻いて飛道具でも向けられ、ば其れ切りぎ、左もない所が相手も粥河圖書だからお

めくとも討たれまい、必ず此の方も切死きりしにをしなければならんが、其の時は松屋に残したお蘭が斯うと聞かば必らず自害して相果あいはてるに相違ない、如何にもそれが不便ふびんなこと、何うかお蘭を助けたいものだがと、母や妹を寝かした後あとで、細々こま／＼と認めました遺書かきおき二通、一本はお蘭の許もとへ、一本は母へ宛て、封目ふうじめを固く致した山三郎、其の翌晩小原山と申す山の原中に出まして粥河圖書と決闘はたしあいを致しまするお話、一寸ちよつと一息吐つきまして申上げます。

三十

山三郎が認めました遺書かきおき二通、その一通は母に贈りますので、其の文には粥河圖書は大賊に致して、手下の二百人からある強盜、其の女房お蘭なる者が我身の大事を知ったと云い、同類どうるいが許さんからとて生埋いきうめにしたるを山三郎が掘出したるが、今は上総の天神山の松屋に隠匿かくまつである、此の事に就つて過日より自分も心配致して、粥河圖書が改心のちの後如何にも貞節なるお蘭の心を察し、故々もと／＼の通り添そわして遣りたいと思つて居る処、大胆にもお藤を嫁に呉れという故に銚子屋に於て彼の如く耻はじしめしました、それを遺恨に思つて

決鬪状はたしじようを附けたから、己むを得ず明晩小原山に於て同人と果し合を致す、また山三郎の申す事を聞入れて改心致せば宜しいが、左もなければ刺違えて死ぬ、吾が亡ない時はお蘭が自害致すに相違ないから、不便ふびんの者と思召おぼしめしてお蘭に意見を加えてお引取り遊ばして、お藤の姉とも思召しお手元にお置き下さらば、私わたくしより遙はるかに優る孝行を致すに相違なし、先立つ不孝は重々相済まんが此の場に及んでは致いたしかた方がない、圖書と刺違えて死果しにはつる覚悟、と細々と書きまして、又一通はお蘭の方へも右の如く細々と認しためて、封じ目を固くして店の硯箱の上の引出ひきだしに半切はんぎれや状袋を入れる間へ挿はさんで、母が時々半切や状袋を出すから、此処へ入れて置けば屹度目に入ろうと斯様に致し、其の夜よは休んで翌日朝船に乗りまして上総の天神山へ参りました。お蘭は山三郎の参るを待つて居る所へ、

山「存外早く帰りました」

蘭「おやお帰り遊ばしましたか」

山「はい、暫く自宅うちを明けましたので、母も心配致して手紙をよこし、それ故一寸立帰つて参りましたが、お前さんの事が気になつて、何うも私わたくしは宅にも居られないひよつとして私が遅く来まして、お前さんに万もしも一の事があつた日には、私わたくしが丹誠した事は水の泡になるから取急いで参りましたが、就ては又直ぐ私わたしは帰ります、帰るが明日あすの夕景までには又

私わたくしが来られ、ば好よし、来られん時は此の中に細かに書いた物がありますが、此れは私わたくしの親から譲られた大事の、今は金入れにしたが、先祖から伝わって居る守まもり袋ぶくろで、此の中に封じた物が入って居るから、明夕景みゆうまでに私わたくしが来なかつたら此の封を切つて読んで下さい、左様そうすれば細かに事柄が分ります、其の中うち又お前さんを迎いに参る者が有るまいものでもない、多分夕景迄には屹度来ますが、それ迄は此の書いた物の封を切つて読んで下さつては困ります、其処そこを何うか確しかとお蘭さん承知して下さつて、必みらず明日みょうにちの晩まで確たしかに待つて、何卒どうお前さんお自害の処は止とどまつて下さらんければならん、それだけは山三郎手を突いて頼む、何卒どうぞ聞濟きんげいんで下さい、お聞濟きんげいみかえ、え、お聞濟きんげいみかえ」

蘭「はい、有難う存じます、まア何ういう御縁ごゑんか存じませんが厚く思おぼ召しめして下さいますお志は決して反故ほんこには致しません、明日みょうにちお出いでまでは慥たしかに其の品はお預り申して居ります、何うか成るたけ明日みょうにちはお早くお出いでになりますよう」

山「はい、直ぐに来まする心得、此これに少々許ばかり金子がありますが是に添えて置きますから何うかお前さん是で万事宜まいいように為すつて」

と立ちますから、

蘭「はい、もうお帰りでございますか、左様なれば」

と階子はしごの段まで見送ります。下へ下りる事は出来ない隠れて居る身の上。此方こちうは船へ乗り移ります、虫が知らせるか互たがいに振り返る、其の内に船は岸を離れて帆を揚げる、風は悪いけれども忽ちに船は走りまして浦賀へ着致ちやくしまして、自宅うちへ帰って引出ひきだしを開けて見ると、まだ遺書かきわきは母の手に入はいらんようだから宜よいと心得、また元のように手紙を引出の間へ入れて、一寸其処ちよいしとこまで行く振りをして宅うちを出て、西浦賀の陣屋へと急ぎました。其の頃西浦賀の陣屋には山三郎の実の兄が居ります。お高たかは二千五百石で一色宮内様と仰しやる、血筋でございますけれども、此方こちうは町家ちやうかに育ちましたから 船問屋で名主役も勤めて居り、目通りは出来ませんが、お兄様あにいさまという事も出来ず、向むこうでも弟と声を掛ける事も出来ん、なれども血筋と云うものは仕方が無いもので、今晚もし死すれば兄の顔はこれが見納め、余所よそながら暇いとま乞こいと心得、西浦賀の蛇島町じやばたけまちの先浜はまぢう町の処ゆを行くと陣屋のある処、頓やがて案内を以て目通りを願ねがひたいと云うと、其の頃のお奉行は容易に目通りは出来んが、向むこうも血筋だからして、「苦しゅうないこれへと申せ」と云う。取次は心得まして山三郎をそれへ連れて参ると、今お役済で袴は着けて居りますが座蒲団の上に寛くわんいで居て、其の頃の遠国えんこくの奉行は、黒縮緬に葵の紋の羽織を上から二枚ずつ下すつたもので、今宮内様は御紋附の羽織に濃御納戸色の面取めんとりの袴をつけて、前には煙草盆や何かを置き、此方こちうには

煎茶の道具があり、側に家来が二人ばかり居ります。山三郎は遙か末席に控えて頭を下げまして、

山「今日はお目通りを仰せ付けられました有難い事でございます」

宮「はい、さア此方へ這入るが宜い、あゝ遠慮なしに此方へ許すから這入れ、何時もまア無事で、母も変りはないか、なにか妹も大分成人して美しくなつたという噂は聞くが妹はまだ見んが、好く今日は来たな、丁度用もなし徒然で居るから幸いで、酒は少しは飲むか、一盞取らせよう、これ由次、奥へ行つてあの菓子があったから、あれを多分に母と妹に土産になる様にして遣れ、それから酒の支度をしろ、さア最つと近く、葎も許す、さアく」

山「へい、有難うござります、今日日は山三郎折入つてお目通りを願いたいことがござりました罷り出でまして、お聞濟があれば千万有難く存じます」

三十一

宮「何か頼みたい事が、そうか、何うも其方は予々人の噂に聞くに、山三郎という男

はあれは妙な男で、幼年の頃から劍術を遣つて大分武芸を学んで、殊に力が十八人力あるなどという事が己の耳にもちら／＼入るが、何うだえ本当かえ、ふゝーそれで学問が出来るか不思議だな、併し予て心得ても居ろうが、力に任せて荒い事を為さないように、此の間組屋敷の若武士源七の腕を折つたというが、あんな事は為ないがよい」

山「相済みませんが、彼れは三浦三崎の百姓を斬ると申すので、私も仲へ這入つて事柄を聞きますると、斬る程のことでもないゆえ、猶お色々扱いますると、終には私をも斬ると申すので、致し方なく手を取つて捻りますると、ついがつくり抜けまして」

宮「そんな事を為てはいかんよ、身の為にならんから、妙に強いな、不思議だな、さア此の菓子を食べるが宜い」

山「有難うございます」

宮「何か頼みか」

山「少々他聞を憚りますから、御近習の衆をお遠ざけ下さいますれば有難う存じます」

宮「左様か、金吾、由次、少々山三郎が内々頼む事があつて他聞を憚ると云うから、其方へ出て往つて居れ、用があれば手を鳴すから、そして酒の支度をしろ」

金「へい」

と兩人は立ちます。

宮「さア何ういう密談か」

山「山三郎仔細あつて遠方へ参りますが、三日でも旅と申しますから、人間は老少不定の例、明日にも知れんが人の身の上、殿様のお顔もこれが見納になるかと、今日は御暇乞に罷り出ましてござります」

宮「大分何か弱い事を云うのう、常の氣性にも似合わんようだが、して其の遠くと云うのは何処へ行くのか、余程遠いかえ」

山「些と遠方へ参りますことぞ」

宮「は、ア先は何処だえ、上方かえ」

山「もそつと遠方へ」

宮「ハア何か、九州筋長崎へでも参るか」

山「もそつと遠方へ」

宮「はてね、それでは何処へ、じゃが余り遠方へ行かんが宜い、母も老体ではあるし、何処へ行くか」

山「併し是非参らなければならん用で、尤も直に帰ります心得で、事に依れば明日帰りま

す」

宮「なにを云うのだ、そんな事を云つては分らん、気になって成らんが、何ぞ餞別を遣ろうかの」

山「お餞別を実は頂戴に出ましたので、その餞別は申すも恐入りますが、誰も居りませんから申しますが、私は運が好ければ殿様のお側に居りまして、他へ養子に参りましても鞍置馬に跨り、槍を立てて歩ける身の上、不幸にして腹にあるうち、母が石井の家へ帰りまして、私は町家で生立ちまして、それゆえ貴方がお役で御出張になりました、つい向う前に居りながら、お兄様と日々御機嫌を伺うことも出来ず、弟とお言葉を戴くことも出来んくらいになつて居る、これも縁切になつて居りますから致し方もございませぬが、此の度遠方へ赴きますゆえ、お餞別に「弟、無事で行つてまいれ」という御一言を承われば、山三郎心遣さず勇ましく出立致します、どうか此の儀恐れ入りますがお聞濟み下されますよう」

宮「成る程、それはよいが、それは其の方が云わんからつても此方で存じて居る、彼の時はお母様が嫉妬深くつて、其の方の母が家へ帰らんでも宜かつたのを、縁切で帰るといふ訳に成つたのだが、此の方も外に兄弟というものも無いからう、誠に貴様の行いの正

しいのを聞くに附けても頼もしく、蔭ながら喜んで居るので、仮令身分は違おうとも血筋は知れて居るから宜い」

山「有難い事で、それで弟無事で行つて来いと云うお言葉を頂戴致しますれば私は勇んで往つて参ります」

宮「それを云うのかえ」

山「どうか大きな声で一言頂戴致しとうございます」

宮「そんな事を改まつて云わんでも宜いが」

山「でございませうが、どうか」

宮「困りますねえ何うも、じゃア判然と云うよ、えへん、弟無事で行つて参れ」

山「は、ア有難う存じます」

と席を下りまして、日頃は猛き山三郎暫くの間頭を上げません。

宮「落涙するか、何か気になる事だな、そう云う事を云われると何だか遣りとうもないが、止さんか、何う云う事柄を頼まれたか知らんが、予て其の方は頼まれては退かんとは聞いたが、大抵の事柄は：然うく人の為ばかりしても身でも痛めると宜くない、母の居る中は慎めよ」

山「左様な訳ではございません、就ましては何うか今一つお餞別を」

宮「あゝ何なりとも遣りましよう、まア品物で持つて参つてもいかんが、金子を遣ろう」

山「いえ金子は入りません、願くはお乗替の馬を一頭頂戴したい」

宮「妙なものをねだりませぬえ、馬をねえ、えゝ、なにを存じて居ろうが、お父様がお逝去前からある大白月毛の馬、彼れは歳を老つては居るが、癖のない好い馬で、あれを遣ろう、荒く騎らずに歳をとつて居るからいたわつて乗るよう」

宮「はい、道が遠うござりますから騎り潰すかも知れません」

宮「騎り潰してはいかんよ、別になにも云う事はないか…これく金吾」

金「へい」

宮「別当に申し付けて月毛に蒔絵の鞍を置いて、支度して陣小屋へ繋ぐよう、山三郎が乗つて参るからな、それから酒を早く出せ」

其のうちお膳がออกมาして種々の御馳走がある。山三郎は心が急いで居りますから、言葉寡なに暇を告げて立出でますと、其の頃の御奉行様が玄関まで出て町人を送ると云うことはないが、何か気になると見えまして、

宮「万端気を付けて参れ、早く帰れよ」

山「御機嫌宜しゆう」

と出ますると真まっしろ白な馬が繋いで有ります。

三十二

山三郎は此の馬を見ますると好い白馬だ、白馬と申しても濁にごりぎけ酒とは違います、実に十寸ときもある大馬で、これに金梨地きんなしじの蒔絵の鞍を置き、白と浅黄あさぎの段々の手綱たづなで、講釈こうしゃくなどでしますと大して誉ほめる白馬で、同じ白馬でも浅草の寺内じないにある白馬は、彼あれは鮫と申して不具かたわだから神仏へ納めものになつたので、本当の白馬は青爪でなければならんと申します、鬮し、むら肉厚うなじく、頸うなじは鶏とりに似て鬣たてがみ髪かみ膝かみを過ぎ、宛さながら竜に異ならず、四十二の旋毛つむじは巻いて脊に連なり、毛の色は白藤の白きが如しと講釈の修羅場では読むという結構な馬に、乗人のりてが乗人ですから、一角いっかく入れてスタ／＼スタ／＼タ／＼とよく云いますが嘘だそうですね、聞きまするに馬は乗りたてから駈かけを逐おうと、馬が苛じれていかんそうで、山三郎は馬も上手でございませうから鞍へひらりと跨またがりまして、最初は心静かにポカ／＼とだくを乗りまして、陣屋前から大ヶ谷町おおがやを過ぎて、鴨居の浦のつきを乗切りまして、此処なんじよらは難所なんじよです

が、馬は良し乗人は上手でほん／＼乗切つて頓て小原山の中央へ参りますと、湯殿山と深彫ふかほりのした供養塔が有ります、大先達喜樂院だいせんだつきらくいんの建てました物で、風が強く吹く折には倒れそうな見上げる様な石塔でございまして、此処は一里四方平原へいげんで人家もなければ樹木もない処でございします。見下すとずうつと上総房州も一ト眼に見える。尤も四月十五日で青空は一点の雲もなく、月は皎々と冴渡り、月の光が波に映る景色というものは実に凄いいもので、幽に猿島烏帽子島金沢なども見えます。此方は小松の並木で一本も外の樹はありません。真堀の岩上いわがみの方から粥河圖書は来るに相違ないと、山三郎は馬を乗り据え、向に眼を注いで居ると、遙かに蹄の音がいたします。来たなと思うと粥河は其方へ現われ出ました。元來圖書は山三郎を嚇す気だから、栗毛の馬に鞍を置き、脊割羽織せわりばおりに紺緞子こんじんすに天鷲絨びろうどの深縁ふかべりを取った野袴のばかまに、旧金森の殿様から拝領の備前盛景びぜんもりかげに国俊くにとしの短刀を指添さしぞえにしてとつくと駈けて来る。山三郎は石塔の際へ馬を止めて居る。圖書は山三郎はまだ来らんと心得てぱつ／＼と土煙を立てて参りますと、傍から声を掛けまして、

山「粥河氏かお早うござる」

と云うと、圖書ははつと驚きましたが、例の曲者くせもの落着き済して、

圖「大分お早いな」

山「先程よりお待ち申して、大分お遅うございますな」

圖「はい、宜く御出張あつた」

山「はい、あなたも宜くお出になりました、覚悟を致して来いとの仰せですが、私は別に覚悟の仕様はありません、唯御出張を待つて貴方のお話を承わろうと存じて居りました」

圖「うん、お前を呼んで問おうと思ふは別の事ではない、銚子屋に於て満座の中で存分の事を云われたが、私も粥河圖書で、金森家の大祿を取つた身の上、今は浪人しても町人のお前に板の間へ手を突いて、何うかお前の妹だから呉れると、私が彼れ程まで頼むに、心に問え、やることは出来んとお前が云つたが、心に問えとは一向分らん、何ういう訳で呉れられんか其の事を聞かん中は粥河圖書此の場は去らん、刀の手前捨置き難いから、さア訳を聞かして下さい、次第によれば其の儘には捨置かれん」

とぶつりツと母指で備前盛景の鯉口を切つて馬足を詰めました。山三郎は驚く気色もなく、

山「山三郎も男で情を知っているから銚子屋では云いませんが、強て聞かせると仰しやれば云います、お前さんに妹藤をやられんと云う訳は、只た一人の妹だからお前さんの女房

にあげて、又生理いきうめにされるが、憫かわいそう然だからだから」
圖「むう」

と驚きました。粥河圖書、思うに此奴こやつは我が悪事を知るばかりでなく、女房お蘭を生理にした事まで知つてゐる上は助けて置かれんと柄つかに手を掛け、すらりと抜きました。元より覚悟の山三郎は同じく關兼せきかねもと元無銘の一尺七寸の長脇差を引抜いて双方馬足を進めました。山三郎は前申ぜんす劍術の名人で、身構えに少しも隙がありませんから圖書はこれとても敵かなわんと心得て、卑怯にも鞍まえわの前輪まへわに付けて参つた種が島の短筒に火繩を附けたのを取出して、指向さしむけました。山三郎も斯かく有らんと存じて予かねて用意したる種が島の筒を同じく取出し、「どっこい此方こつちにも」と鉄砲を附けました、すると粥河は面めん色しよくを変えまして、これから果し合しいを為しますのお話、一寸ちよつと一息吐つきまして申し上げます。

三十三

引続きまして、山三郎が圖書と小原山に於て出會であいのお話で、彼方あなたには同類が沢山ありますから大勢に取とり囿まかれるかと思つて行くと、案外粥河圖書一人にんで参つて掛合になりました

が山三郎はお前が盗賊だから遣らんとは申しません、私が妹をお前の女房にやって又生埋にされると、憫然だからと申しました。その一言で、山三郎は何も彼も知り抜いて

居ると心得たから、圖書は備前盛景を引抜いて斬ろうと思つたが、相手の身構に驚きま
して、鉄砲を取つて直ぐに山三郎を打殺そうと致したが、山三郎も予て用意に鉄砲を鞍の
前輪に着けて来ましたから、互に鉄砲同士となつてびったり身構をしました。此の時に
粥河圖書はとても敵わんと心得たと見え、鉄砲をかりつと投げ出し、馬より飛下りて草
原の中へは、アと平伏してしまつた。山三郎は氣抜のしたようで、

山「さア馬にお乗んなさい、それでは果し合う事が出来ん、併し此の決鬪は私の方で
望んだわけではござらんから、其方で退くなら退きも為ようが、早く否応の返答を承わ
りたい」

圖「いや実に何とも申そう様も無い事で、私が身の上を残らず御存じでありながら、銚子
屋に於て男じやから情を知つて居るから云わん、心に問えと仰しやつたは誠に厚き思召
しとも一向存ぜず、此の小原山へお招き申して掛合、実に圖書の為には、貴公様は神と
も仏とも申そう様もない有難いお方であるを、全く私の心得違から、刃物を扱い、剩さえ
飛道具を向けましたる段は、重々恐入つた次第で何分にもお許を願います、主家改易の後、

心得違いを致して賊の頭となり、二百人からの同類を集めて豪家大寺へ押入り、数多の金を奪い、或は追剥を致し、又は人の娘を勾引かし、実に此の上もない悪事を致したが、最早圖書も天命遁れ難く、貴公様に於て残らず御存じの上からは、遠からずお繩にかゝつて家名を穢します所の大罪人願わくは貴公様のようなるお方の手に掛つて相果つれば、手前がこれまでの罪も消え、成仏得脱致すでござろう、お手に掛けて只今此の所に於て切つて下さるか、又は手前の様な者は切るはお腰の物の穢れと思召して、繩に掛けて御陣屋へお引き下さるか、それは貴公様御所存に任せる、唯々これまでの無礼の段は幾重にもお詫を致しまする、御高免下さるよう」

山「ふん、それじゃアお前さんが重々悪いと云う事をば、それは人間たる以上は御存じであらう、だが、粥河氏、何ともどうもお心得違いの事ではありませんか、元は金森家の重役として大禄をも取つた御身分でありながら、昨今此の辺に大分押込が這入つたり追剥が出たりして、土地の者が一方ならぬ迷惑致すを、貴殿等の御所業とは知らんで有つたが実に驚いた大悪無道、私は素町人の身の上、馬の上に乗つて斯う応対致すに、立派なお身柄でも草原へ下りて、大地へ頭を摺附けて其の如くお詫なざるが、そこが善と悪との隔で、貴方が今にも御改心なされば山三郎土下座を致して、重々無礼を致したとお詫を申

さなければならん身の上、是よりぷツつり悪事を廢めて、お前さん元の粥河様になつて下さい、左様なさる時は不束の妹どころでは無い立派な嫁を届かんながら山三郎が媒妁して差上げたく、末永う御懇意に致しますから、何うかすっぱり魂を洗い清めて其の証拠を私に見せて下さい、私は貴方を斬る役でもなければ縛つて連れて行く役でも無い、唯山三郎の云う事を聞いて改心して下されば私に於ても此の上なく忝けないことで、俱に喜ばしい訳で、何うか改心して下さい」

圖「は、ア、我ながら斯かる悪人を憎いとも思召さず、改心の上は媒人になつて、良い嫁を世話して遣らうとまで仰しやるは、何ともどうもお情の深いお方、東浦賀で侠客の聞えを取つた山三郎殿のお妹御を女房に申受けたいなどと大それたことを申される手前の上で無いを御存じは無かろうと、実は欺いて貴兄を兄弟に致せば竹ヶ崎に居つても力になると思い、悪事にお引入れ申そうと云う手前の存念でござつた、誠に恐入つた事でございます、然るに貴公の親切な仰せを聞いて、我ながら魂を洗い清めたように、只今は手前夢の覚めたようなる心持で、此の上は頭髮を剃毀ち、墨の法衣に身をやつし、他へ立退きます、手前はこれから立帰り、同類の者へも貴公の思召しを申し聞け、親ある者は親許へ、主ある者は主方へ立退かせて、盗み取つた金銀其の他の諸道具は、近村の貧

乏なる百姓へ遣わし、速かに竹ヶ崎を立去りまする、これが手前の改心の証拠、何うか恐入りまするが、明日夕景、手前隠家まで御尊来下さりますれば有難いことで、申すまでもなく頭髪を剃こぼち、墨の法衣を着て、みすぼらしい姿で隠家を出ます所をどうか御覽遊ばして下さい、また其の折貴公様にお盃を戴いて、心を洗いかえて立退きとうござりますから、くれ／＼も右の時刻に御尊来下されたし、此の儀を偏えに願ひ上げます」

三十四

山「成程、来いと仰しやれば行きもしましようが、頭髪を剃らんでも改心さえすれば宜しい頭ばかり円くつても心を改めんでは何にもなりません、お前さんがそうしなければ気が済まんとなれば出家にでも何にでもお成りなさい、折角のお頼みだから明日夕景までに、お前さんの隠家は知りませんが、尋ねて行きましよう、同類の者は速かに立去らして下さるよう」

圖「お出で下さるか、承知致しました、実に有難い事で、呉れ／＼もお間違いはありません、すまいな」

山「いや行くと云つたら屹度行きませ、さア馬にお乗りなさい」

圖「恐入ります御免を蒙り仰せに随い：然らば明日夕景にお目通りを致しましょう、必ずお待ち申す」

と馬の口を取りまして、悄々として粥河圖書は真堀口を降りまして立去りました。山三郎は何事か知らんが頼まれたからまアく行つてやろうと、直ぐ馬の首を立直して鴨居山を下りまして宅へ帰ろうと思つたが、ふと胸に何か浮んで急に西浦賀の方へ馬の首を向けました。頓て参りましたは前々から申し上げました西浦賀の女郎屋の弟息子、芸者小兼の情。夫江戸屋半治が兄の半五郎という、同所では親分筋、至つて侠気のある男です。山三郎も平生から何事も打明けて談合をする男、此の家の門口で馬よりひらりと下り、門の脇へ繋ぎました。女郎屋から馬を引張つて参る者はありませんが、馬を繋ぐのは珍しい事で、頓て案内を云い入れますと主人の半五郎は直ぐ様それへ出て参り、半「宜うこそ入らつしやいました、先ずこちらへ、此の程は誠に御無沙汰を致しました：よう今日は山野掛かね、遠乗で、大層白い馬に乗つてお出でなすつたな」

山「はい、少し内々の話があつて参つたが、此処で話しも出来んが、何処か離坐敷はないか」

半五「へい、これく婆やア、彼の六畳へ火鉢を持って、茶は好いのを点れて、菓子は羊羹があつた、あれを切つて持つて来い、さア此方へ、此処から行かれます」

と庭下駄を穿いて飛石伝いに庭の離座敷へ行つて差向になりました。

半五「何か御用でございますか」

山「外の用でもないが、少しお前に内々話したい事があるが、此処は誰も聞人は居めえのう」

半五「誰も聞人は居りません、さて段々貴方にも御心配を掛けました宅の半治も、一体女郎屋の弟で廻船問屋のお嬢様を女房にするなどは出来ない事で、あなたのお口入であつたればこそ見合までさして下すつたので、有難い事と実に私も喜んで居たのに、六年前の浦賀の祭に小兼と内約が出来たつてとうく彼方をお断り、それに小兼も半治もあゝいう負けない気の奴だから、何と勧めても一つになると騒ぐので、私も吉崎様へ済まねえから彼の野郎は懲りましたが、外に悪い事もなし、又小兼も足掛二年彼の野郎を立すごしにしたというは、芸者に似合わねえ感心な親切者と思つて居ると、とうく女は江戸の家を打棄つて、態々斯んな田舎まで尋ねて来て、是非半治の女房にさして呉れろとまでも云い、其の中吉崎様のお嬢さんは何所へ行つたか行方が知れず、多分死んだらうと云う事

になつて、本当の葬式をなさらぬばかり、出た日を命日としておいでなさるくらいだから、濟まん事とは知つてるが、奥に二人を隠して置くので、半治も小兼も嬉しがって仲好くして居りますが、貴方には濟まねえけれども、こりやア一寸御内談だけをして置きます、それに付けても吉崎様のお嬢さんは何うなすつたか分りませんかね」

山「いや、それに就いても種々話があるが、此の浦賀中で私の相談相手というはお前ばかりで、俠氣を見込んでお頼み申してえ事があるが、尤も決して他に漏れんように、口外してくれちゃア困るが、又それを聞いて旦那どうも其れは好くねえ、斯うしたら宜かろう、それは止すが宜いと云つて止めても困るが、何うだえ止めやアしめえのう」

半五「どんな事だか旦那ア仰しやつて、止めるも止めねえもない、何ですか」

山「その返辞を聞かねえ中は話されねえ、何うだ決して止めやアしめえな」

半五「止るつて止ねえとつて私も男だから云うなといえれば口が腐つても云やアしねえ」

山「それは有難い、実は半五郎、斯ういう訳さ」

とこれから山三郎が圖書が悪事的一条から、其の女房お蘭を助けて上総の天神山の松屋に匿まって置く事から、外見の場所でこれく耻しめた事から、掛合いに参つて果し状を付けて、今晚粥河と出合をして、それから圖書が降参して、遂に改心して、隠家を退散

するといふまでになり、また圖書が頼みに依つて明晩竹ヶ崎の南山へ乗込んで同類を追おつぱ払つて、この土地を洗い清めようといふ我が了簡から一部始終を詳しく話して、

山「という次第で右の通り約束したから明晩は是非とも参るが、何うも訝いぶかしいは粥河圖書、事に依つたら又己を欺いて多人数の同類で取巻いて、飛道具で撃取ろうと企たくむかもしれんが、さある時は止むを得ず圖書を一刀の下もとに斬つて捨て、同類の奴輩やつばらを追払う積りだが、そこは運命で又身に疵きずを受け切死きりじにをするやも分らんが、そこで貴様に頼みというは、若し己が切死をした事を聞いたら、早速上総の天神山へ駈付けてお蘭に遇あひ、篤とくと私の志を述べて、暫く命を存ながらえて、己になり代つて家のお母うちに孝行をして呉れるようにくれ／＼も後あとく々の事を頼む」と委細の訳を話しました。

三十五

半五郎は委細を聞いて驚きました。

半五「どうも飛んだ事で、旦那道理で近辺に盗賊が殖えたと思つたが、こりやア一通りの

騒ぎじやアない、そんな奴がこの近辺に居られては叶わん、だが旦那こりやアどうも私の考えでは何うも怪しいねえ、お前さん明日の晩竹ヶ崎へ行くのはそりやアお止しなさい、先方には何んな謀計があるかも知れねえ」

山「それく、それを云うのだ、止めるといかんよと云ったを、止めませんというから打明けて話したのだ、なぜ止める」

半五「へい成程、あゝ悪いことを云った、そんな事とは知らず迂濶といったが、旦那お前さん行けば見すく、窀穴へ陥ちるので」

山「陥ちても宜い、止めるなど云つたら止めませんと云うから話したのだ」

半五「左様、悪い事を云つたねえ：何うも是やア：あゝ悪い事を云つた、悪い事を云いましてねえ、何うも飛んだ事を云つた、これ程じやアねえと思つてうっかり云つたが、何卒旦那これだけは私の云う事を聞いて、今迄貴方のいう事は背かねえが、私も最う五十一になつて、貴方より外に力に思う者はないに、万一の事が貴方の身にあつた日にやア此の浦賀に相談する者は一人も無え、何事があつても旦那の処へ駆けつけて往くの、此の浦賀にお前さんが居ないと聞だよ、毎日役所のものが威張り廻つて、動もすると素破抜をしてそりやア騒ぎだよ、何うぞ此の事は思い止まつておくんなせえ、こりやア本当に人助け

だから」

山「それはいかんよ、向うから来てくれと云い、おう行こうと男が口外したものを反故には出来ん、一足も退く事は出来ん、仮令謀計があつても虎の穴へ這入らなければ虎の子は獲られぬから行くよ、貴様も男らしくも無え、決して止めませんと口外して今になって止めるとは何だ、貴様も西浦賀の半五郎だ、男らしくも無え、止めませんと云つたからにやア止めるな、最う一度止れば絶交する、貴様の顔は再び見ないから然う思え」

半五「こりやアどうも飛んだ事を云つたが、何うも旦那、じゃア止め無えから斯うして下さい、野郎共が今二百四五十人も遊んで居るから彼奴等連れて供をさして遣つて下さい」山「馬鹿ア云え、そんな尻腰の弱い事を云つて仕様があるもんか、己も石井山三郎だ、向に大勢居るを怖がつて、供を連れて来たなぞと云われちやア死んでも恥だ、殊にちゃんく切合でも始めれば近村を騒がして、それこそお上へ対して恐れ多い事で、左様じゃア無えか、是から行つて圖書と刺違えて多分死ぬが、然うすれば今云つたお蘭の身の上は何分頼むぜ、己はもう帰る」

半五「旦那々々まアお待ちなせえく、おやもうお帰りですか」

と云ううち山三郎は詞少なにずうと帰つて仕舞いました。半五郎は頻りに心配して、

半五「こりやア飛んだことが出来た、何うも弱つたな、何うしよう、縁切と云うと屹度縁切だからなア、子分に内証で行こうか知らん、何うしよう、困つた事だな、口外するなと云うから此んな事とは知らねえから」

と独語ひとりごとを云つてる処へ、ばたくと廊下を駈けて来てがたーり障子を開けて入る者が有るから、見ると小兼ゆえびっく恟りして、

半五「なんだ」

小「親分、半治さんの胸を聞いてお呉んなさいよ、何うぞ善いとか悪いとか聞いて下さい、唯手前は厭になつたら帰れつて、何でも宜いから出て行けつて、亀屋のお龜という芸者揚あ句の、妙齡とじころの、今は娼妓つこめをして居るのを二三度買つて、それを近いうち請出して女房うけだにするから帰れと云うから、何うしても帰る事は出来ません、何うも江戸の姉さん達やお内儀かさん達にも沢山意見されて、田舎へ行つては半治さんに見捨られる、男と云うものは心の変るものだから其の時は何うすると云われたから、私はそんな事は無いと云い切つて来たのだから、私は今更帰られませんかと云うと、煙管でもつて打つたり叩いたりして辛くつて堪らないから、何卒親方半治さんの胸を聞いて、強たつて半治さんが嫌いやと云うなら私は海へでも飛込んで死にますから」

半五「困るなアそんなことを云つて、己が今心配しんべえして居る処へ泣込んで来て、ほんとに困るなア、なに半治が手込てこめにすると、なに酔つて居るんだらう」

処へ半治が遣つて来ました。

半五「冗談にも止せよ、手前てめえそんな事をいうな 憫かわいそう然さうにの」

半治「云つたつて宜い、厭だから厭と云うのだ、初めは好いと思つたから女房にしようと思つたが六年から経つて見ると好く無くなつたねえ、どうも若わえ女を女房に持ちたい、亀屋のお龜は眞実者ほんものだからねえ」

半五「止せえ詰らん事を云うな、同じ土地の女郎屋じようろやへ遊びに往つて、女郎じようろうにはまつて

馬鹿くしい、詰らねえ、止せよ」

半治「止せツたつて気に入つたから女房にするのだ」

半五「気に入つたつて然そういくものか、見つともねえ、世間へ済まねえ、了簡しろ」

半治「だつて厭なものは仕方がねえ、厭なものを女房に持てとつて斯こんな無理な話はねえ、左様そじゃアねえか」

半五「此の野郎大てえげえ概がいにしろ、今更小兼を帰けえすなんぞという事が出来るものか、馬鹿ア云うな、間拔め」

半治「間拔たア何んだ、ふざけた事を云うな、今江戸屋の半五郎と云われるのア誰のお蔭だ、父親や母親がこしらえて是だけの屋台骨が出来たから、江戸屋の半五郎とも云われるのだ、同じ家へ生れたからは己が所帯の半分を貰つても宜いんだ、兄貴だと立てゝへえゝ云つてりやア増長しやアがつて、生意気な事ばかりいうな此の野郎」

半五「おや、此の野郎とはなんだ、呆れた奴だ」

小兼「どうも私は兄さんに濟まないから私が出て往きますよ、もう兄弟喧嘩は止めて下さいよ」

半五「なに帰らなくつても宜い、何んな事があつても己が帰さねえ、気でも違やアがったか、馬鹿野郎、女郎でも何でも勝手な者を女房にしろ、小兼には己がな立派な処へな、半治に勝つた亭主を持たせらア、呆れた奴だ、兼公心配するな」

半治「何をぐずぐずして居やアがる、さつきと出て行きアがれ、何だ兄貴が厭に小兼の肩を持ちやアがる、はゝア分つた、こりやアなんだな、兄貴お前は女房が死んで六年にもなるから、内々小兼とくつついて居るんだな」

半五「おや此の野郎、ふざけた事を、好い加減にしやアがれ」と打ちました。

半治「おや打つたな」

半五「打つたが何うした、此の野郎、呆れた事を云う、これ外の事とは違うぞ、己はな弟の女房に貰つた女に手を附けるような半五郎と思うか、これ大それたことを云やアがる、これ汝はな三歳の時死んだお母が己を枕許へ呼んで、兄いやお前はもう立派な人になつたが、半治はまだ歳がいかねえから、母が死んだ後に二度添でも這入つて憎まれ口をきいて虐められると憫然だから、大事にして母に成り代つて丹誠して呉れと云うから、なにお母心配しなさんな、己が受合つたから、父だつて歳はとつてるし又女房を持ちもしめえと云つたら安心してお母は死んだが、汝が独り歩きの出来るまでは己は女房も持たずに丹誠して、弟でも小さいうちから育つたから子を見たような心持がして、やれこれ云えば増長しやアがつて、世間へ顔向けの出来んような事を云やアがつて、腹一杯喰い酔やアがつて」

半治「なんだ、聞きたくも無え世迷言を、態ア見やアがれ」

半五「おや、態ア見ろとはなんだ」

半治「もう兄貴の顔を見るのも厭だ、兄弟の縁を切つて書附をよこせ」

半五「なに此の野郎、書附をよこせと、書附も何も入るものか」

半治「じゃア己が書いてやろう」

と硯箱を持つて来て仮名まじりで縁切状を書いた。

半五「此の野郎書きやアがったか、呆れた奴だ、其の気なら家^{うち}にやア置けねえ、出て行け^い」

半治「出て行かなくツてよ」

畳を蹴^{けた}立て、挨拶もせず出て往^ゆき掛ると、見兼て其所^{そこ}へ出ましたのはお八重という女郎、其の時分だから検査と云うことがないから梅毒^{かさ}で鼻の障子が失^{なく}なつて、店へも出られないので流し元を働いておりましたが子供の時分から此の楼^{うち}におりますので、馴染^{なじん}では居るし、人情ですから駈出して来て、

八重「半治はん誠^{まこと}にほ前^{めえ}は悪いよう、ほれじやア済^ふまねえよ、私^ふも此家^{こゝ}へ来^ひているに、ほ前^{めえ}がほんな事^{こと}をひてや親^{おや}分に済^ふまねえよ、小兼^{おと}はんは今^{いま}になつて帰^{かえ}れつてえ、ほれじやア可愛^{ははひ}ほうだアへえ」

半治「うるせえや、書附せえ遣りやア、兄^{きょうでえ}弟^{てい}じやア無^ねえ、さア行^ゆくのだ」

とずうと立つて行^ゆきますから、

小兼「半治さん、お前^{まへ}それじやア」

と小兼は跣^{はだし}足で駈出しながら、半治さあんくく待^{まち}つてお呉^{くれ}れよう。と山坂を駈^か下

りて追懸おっかけます。これから小兼が半治に追附おっついて一つのお話に相成りますが、一寸ちよつと一と息つきまして又申し上げます。

三十六

引続きまして追々お話も末に相成りました。申し掛けました江戸屋の半治は兄に愛想づかしをいい掛けまして、無理に兄弟の縁を切つて西浦賀の江戸屋を立出たちいでますと、小兼が跣足はだしで谷通坂やんつうざかまで追懸おっかけて参つた処までお聞に入れましたが、茲こゝに真堀の定蓮寺と申す前ぜん申し上げた、お蘭を生埋いきうめに致した寺がございまして、此処の留守居坊主は元もと雁田がんだの地藏堂に居りました破戒僧でございしますが、只今此の寺が焼けて留守居の無いので、頼まれて此の寺に居つて、尤もらしい顔がんしよく色いろをして居りますが、夜よに入りますと山寺で人が来ませんから、箱膳の引出から鱒の塩焼や鰹の刺身が皿に載つて其処そこへ出掛けて、その傍の所に軍鶏しやもの切身があつて、小鍋立こなべだてで手酌でくびりくゝと酒を呑んで居ります。処へ台所口から、

半治「御免なせえ、えゝ真平まっぴら御免なせえ、海禪さんお宅うちですかえ」

海「はい、何方どなたえ、何方でげす」

半「西浦賀の江戸屋の半治ですがちよつと明けておくんなさい」

海「困つたもんだな、何じやしらんが愚僧わしは今寝たがねえ、何うか用があるなら明日あす来て貰もらいたいものじやがねえ」

半「どうかそんな事を云わずに一寸ちよつと明けておくんなせえ、お願ねげえだが」

海「よう寝附いたがねえ」

半「寝附いた者が口をきく奴があるものか、起きて居るじやアねえか」

海「それは眠りに附いたじやないが床の中へ潜もぐり込んでるので、寒うて起きられんがねえ」

半「寒い時分でも無ねえじやアねえか、冗談じやアねえ胡坐あぐらア搔かいて居るじやアねえか」

海「覗のぞいて居やアがらア、困つたねえ、マア待ちなく今明けるから」

と傍そばにある鱒ますの塩焼や軍鶏などを経机の引出の中へお仕舞と致しまして、香物鉢かうくぼちと茶

碗わんを載せて前の膳ぜんを傍わきへ片寄せて、

海「さア其処そこが開あくから土間の方から上りなさい」

半「はい御免なせえ」

と戸を開けて這入ると、上り口は広い板の間で、炬が切つてあつて、自在じざい鉤いに燻すすつた薬

鐘が懸つてある。

海「さア此方へ這入んなさい」

半「誠にどうも御無沙汰をしました、何時もお達者で結構で」

海「あいお前も相変らずお達者じやが、尤も若いからねえ、時にお兄さんが大分お前の事では苦勞する様じやが辛抱さつしやるか」

半「へ、えどうも火の用心と違つてな、さつしやいますとは往かねえので、些とお前さんに折入つてお願えがあつて来たのだが、お前さんも知つて居るそれ六年前の祭の時、金棒引になつた芸者の小兼ね」

海「あゝ、うん、あの小兼ねかえ、知つて居るとも、彼れは慥かお前のなんで、あゝ彼れは好い女だ」

半「彼奴をお前さんが何うかして取持つて貰いてえと、いうような事を、西浦賀の若え者に頼んだ事が有るだろう」

海「怪しからん事を、出家の身の上で其の様な事を、誰がそんなことを云うたか愚僧は一
向覚えはないで」

半「そんな事を云つてもいきません、実は彼は不思議な訳で私の女房にするような訳にな

った処が、兄貴は彼の通り物堅いので、吉崎様へ義理が立たねえの、新井町の石井様に済
 まねえのといつて、私はとう／＼勘当となつて、仕方が無えから江戸へ往つて小兼の処に
 足掛二年も燻ぶつて居たが、彼奴も私にやア大分実をつくして呉れたので、兄貴も余り義
 理が悪いから女房にしろという事になつて、今小兼は出て来て家に居るのだがね、妙なも
 んで六年前は彼奴も好い女だつたが、此の頃はこう小皺が寄つてきて、年を老つた新造の
 顔は怖かねえもので、何だか見るのも厭になつたが、それとは違つて亀屋の暖簾附のお
 龜はね、此奴は一才婀娜ほい女で、此奴と私は約束して年の明けるも近えから此奴を女
 房にしようとした処が、それを嫉みやアがつて小兼めがぎやア／＼云つて面倒臭くつて成
 らねえのに、兄貴も彼奴を愛に鼻肩して、あゝのこうのと云つて実に七面倒臭えから兄
 貴と二ツ三ツ云合つた所が、兄貴め腹ア立ちやアがつて、見てお呉んなせえ私の月代の
 処を撲切りやアがつて此の通り疵がある、何ぼ兄弟でも余りな事を為やアがるから、
 最う兄貴でも何でもねえ、縁切だとして書附を放りつけて出て来たら、小兼め、後から追
 掛けて来やアがつて仕方がねえ、抛なく大津の銚子屋へ遁込んで見ると、まだ二三人も客
 が居るに彼奴がぎやア／＼狂人のようになつて、私の胸倉ア取つて騒ぐから、何でも騙
 すより外アねえと、此処じやア話が出来ねえ、真堀の定蓮寺に海禪さんが留守居をして独

りで居るから彼所へ行つて炉の傍に己が寝て居るから知れねえように中へ這入れ、左様すれば篤り寝物語にしてやろうと漸々欺して私は一足先へ来たが、もう今に彼奴め来るに違えねえ、処で頼みというのアお前さん何うぞ私の積りで手拭を被つて頼冠りをして坊主頭を隠して、床をとつて寝て居て、来たらお前さんが床の中から一寸手か何か握つて、首つ玉へ手を掛けておくんなせえ、処へがらりつと唐紙を明けて私が飛出す、さア太え奴だ、只置くものか、外に男もあろうに法衣を着た出家と斯んな事を為やアがつて太え娼魔だ、さア何うするか見ろ」

海「それは可愛そうだ」

半「可愛そうも糞もあるものか、さア友達に顔向けが出来ねえ、覚悟しろ、だが命は助ける、其の代り手前を横須賀へ女郎に陥めて、己もそれだけ友達に顔向けの出来るようにしなければならねえ、覚悟しろ此の坊主太え奴と、まア斯ういう訳になるのだ」

海「苛い事を云うなア、呆れて物が云われん、ようまア考えて見なされ愚僧を何じやと思つて、愚僧は袈裟法衣を着る出家ではないか、仮令留守居でも真堀の定蓮寺で、今は破れても旧は大寺じや、此の寺の留守居をする出家を捉まえてそれに邪淫の戒を犯せと云う、そないな事があるうかい、頼むに事を欠いてまア呆れた、そして罪な事じやないかい、其

様に迄惚れて女房になりたいという、お前も得心の上で田舎の此の浦賀くだりへ呼寄せな
 がら、今更厭きた、家へ帰すに手がなかつて、まア云わば相對間男して罪を被せて、
 女郎に横須賀へ売るなぞと、其の様な事を云われた義理かい、呆れ返つてもう物が云われ
 ん、さアくさつさと歸つて下さい、愚僧は其様な事は聞くのも厭じゃ」

三十七

半治「そんな事は云わずと遣つてくんねえな」

海「出来んと云つたら、往んで下さい、阿呆な事を、人情じゃから愚僧は許すが表一面
 になれば只は許さんぜ、何処までも届け出ますじや、出家という者はな、お前なぞは分ら
 んから云つて聞かすが、誰も知つて居る五戒を持つと云うじや、これは俗には出来悪いも
 のじや、其のうち偷盜戒といつて仮にも盗みをする事は許さん、塵一つでも盗めない
 じや、殊に又邪淫の一戒というて此れを破れば魔界へ落ると言うくらいの大なるものじや、
 それに酒を飲むことが出来ん、飲酒の戒は文珠経にも出であるじや、宜えか、それに妄
 語戒といつて嘘をつくことは出来ん、えゝか、それに虫けら一ツでも命を取ることが出来

ん、殺生戒といつてな、それはく出来でにくいには違ちがいない、喰たい度よいものも能よう喰くわず、飲のみ度どい酒さも能よう飲のまず、愛あすべき女子おんなも愛あさんで慎しんんでいるからこそ、方丈様とかお出家様とか云いわれる身の上となるじや、それに向むつてどうも馴な合あ間ま男おとこせいなど、なんぼう物の分わらんでも程ほどがありますわ、往いんで下ください」

半治「成程、こいつア何なにうも済すまなかつたね、したがね、お前めえさんなんぞはそんな事は無なえがね、中には道楽だうらくな坊主ぼくしがあるねえ、此こ間まも亀屋かめやへ往いつて浮うかれていると、彼あ楼すこのおすみという二十四五ちよつとの、一寸小意ちよつと気きな女めがあるが、大層だいじやう粋すいな声こゑがするから、其そのの座敷ざしきを窃そつと覗のぞいて見みると、客きやくの坊主ぼくしがおすみの部屋へや着きを着きて、坊主頭ぼくしづゝに鉢巻はちまきをして柱はしらに倚よつ掛かつて大胡坐おほあぐらをかいて、前まへにあるののア皆みなな腥なまぐさ物もの、鯛たうの浜焼はまやきなぞを取と寄よせて、それそれに軍鶏しよなんぞ杯はいを喰くつて、おすみのに自じ墮だ落らけやアがつて、爪つめ弾びきで端はうた唄うたか何なにかアお経おきやう声こゑで呻うなっていたが、海うみ禪ぜんさん其そのの坊主ぼくしはお前めえによく似にていたぜ」

海「あ、彼あれを見みたか」

半「見たかも無なえもんだ」

海「苛えらい事ことを知しっているな、困こつたな、好えいわ知しられた上うへは是非しぜいがないが、あれは一寸ちよつとその只ただほんの気晴おなごしに女子おんなを愛あすので、楽たのしんで淫よせずでな」

半「旨い事を云つてるぜ、飲酒戒なんぞといつても此所に酒があるじゃア無えか」

海「それは仕方がない、好きじやから」

半「おや／＼此処に魚の骨が、お前の前めえにある竹の皮かわづゝみ包みは軍鶏かい、それは旨いね、煮なせえな」

海「あゝ斯う目付めつかつてはもう仕方がねえ、他人ひとには云うなえ」

半「云やアしねえ、其の代り打明けていつた今の話は聞いて呉んなせえ」

海「実はなア六年あとの祭のとき、小兼が若衆頭わかしゅあたまで裁附たつけとやらいうものを穿はいて、金棒かなぼうひき曳ひになつて、肌を脱いで、襦袢じゆばんの袖が幾つも重なつて、其の美しいこと何とも彼かんと

もいえなかつた、愚僧ぐそうは其の時ぞつこん惚込んだが、何をいうにも坊主の身の上、又お前まへという色男があるから諦めて居たが、けれども実に彼あのような女めア無いなア、あんな好ええ女をお前まへ何んで厭いやになつたのじや」

半「何だつて外ぐわいに若わかえのが出来たからさ、お願ねがえだ己おれがいう事を聞いてくれ」

海「お前まへ本当に女め郎らうに売うる気かえ」

半「そうよ」

海「女め郎らうに売うる気なら愚僧ぐそうにくれんかい」

半「お前が貰つてくれ、ば実に有がたい、それに一と晩でも抱寝をした女だから実は女郎に売りたくも無えのよ、お前が彼奴を留守居にしてくれりやア重畳だ」

海「そりやア愚僧も願つたり叶つたりじや、これから衣の洗濯でもして貰つたり、綻びでも縫うてくれ、ば実に有難い、これまでは何をするにも皆な他へ出すものじやから銭が入つてどうも叶わんが、左様なれば万事につけ都合が好えじや、お前、ほんまに世話して呉れようか」

半「くれるよ、狂言の筋が私が殺して仕舞うというのを、お前が仲へ入つてそんな事を云わずと助けてくれ、愚僧が何の様にもしようから女を愚僧に出来ないかと、斯うお前がいうのよ、其の代り多分のこととは出来んが、金を出すからといって二十両金を出すのだ」

海「それは些と困るね、金はないが」

半「そりやア金は己が出すよ」

海「それじやア宜い、うん、それから」

半「それから其の代り初めは嚇して縛るよ」

海「縛るうー」

半「そうよ、縛らなけりやア成らねえ、お前を縛つて」

海「小兼は」

半「彼奴あいつも縛るのよそれから台所に出刃庖丁か何か有るだろう、其奴そいつを持ってきア八やつつにするぞと云つて」

海「寺の出刃は光らん、真赤まつかに錆びてるぜ」

半「只振　すばかり窺うかがいや、驚くだろう畳へ突つ挿さすから」

海「畳へは通らんぜ」

半「じゃア畳の縁へりの間へでも挿すから宜いい」

海「危ない狂言じゃな、うんそれから」

半「殺すといつたら小兼が助けてくれというに違ちがえねえ、するとお前めえが命ばかりは助けて、何どのようにも致して江戸へ帰す様にするからというのよ、そこで金を出す、私わっちが受取る、書附を書く、それに縁切にして私わっちは出て行つて仕舞うのよ、其あとの後で小兼がお前めえに抱かれて、お前めえの大黒様になるのだよ」

海「は、アそれは有難い、思い掛けない、何だかもうぞく／＼して来た」

半「じゃア筆だの墨だの宜いいか、じゃア坊主頭に手拭を被つて斯うして居るのよ、宜いいか」

海「宜ええわ」

半「竹ヶ崎南山の粥河さんがお蘭さんを生埋いきうめにしたろう」

海「うんにや知らん」

半「いかんよ恍惚とぼちやアいかんよ、知っているよ」

海「知って居るつたつて己おらア知らんよ」

半「知らねえで、じゃア、何ういう訳で石井の妹を粥河へ縁付ける橋渡しをしたか」

海「あれは西浦賀の浄善寺へ、粥河様が法談を聞きに行つて、お藤さんを、見て貰たい度い
というからで」

半「やつぱり世話アしたので、時々 偷盜ちゆうとう戒かいの提灯持をするね」

海「なんじゃ」

半「いけないよ、種が上つて居るからいけないよ、彼あれだけの山や田地を買い金を持つて
居るのも皆みんな盗んだのに氣の附かねえ奴がある者か、手下が二百人も有るからね」

海「何じゃか愚僧わしは知らんがなア」

半「そんな事を云つてもいかんよ、悪事を平氣な泥坊とはいいいながら、目を眩まわした儘なりお蘭
さんを此の本堂の下の石室いしむろの中へ生埋いきうめにしたね」

海「これく馬鹿な事をいうな」

半「いくなつたつて種が上つて居るからね」
海「どうしてそれを知つて居る」

三十八

半治「どうしたつて蛇じやが沼へびで蛇へびを捕とるまで知つて居るのだ、すつかり種が上つて居るのだ
私わつちも今ア兄貴かぶを被かぶつて、長い浮世みじけに短みじえ命めい、うめえものを沢山喰つて、為してい放題しを為し
えわさ、左様そうじゃアねえか、お前めえさん後生ごせいだ手紙てがみを一本書ひとほんいて粥河様あわがへ紹介ひきつけてお呉くれんな
せえ、西浦賀さいうらの江戸屋半治えどやはんぢという女郎屋ぢやうらふの弟ていだが、餓鬼がきの時分ときから身性みじやうが悪わるくつて随分
お役に立たつものだと云つて手紙てがみをお前めえさんが書いてくれ、ば宜いい、その手紙てがみを書いてお呉くれ
んなせえ」

海「止よしなよ、好んで悪事あくじの仲間なかまへ這入こる奴やつがあるものか」

半「そんな事をいわねえで、お前めえさんが行くいのじゃアなし宜いいじゃアねえか、いう事を肯き
かねえと種わを破やぶるよ」

海「全くか」

半「全くとつて悪事に共に荷担すれば素首そつくびの飛ぶ仕事じゃアねえか」

海「うん、左様そう了簡を極めたら後あとで書いて遣ろう」

半「先に書いてくんねえな」

海「後あとでも好よかろう」

半「そんな事をいわずに、気が変るといけねえから書いてくんねえ、その代り小兼を女房に持たせるのだ」

海「そんなら書いて」

と海禪は硯箱をとつて半治の身性みじょうを書いて、これくと紹介状ひきつけじょうを認め、表書うわがきをいたしまして、

海「さア」

半「有難ありがてえ、成程これを持って行けば大丈夫だ、時に彼処あそこへ夜這入へえるには何処から這入へえるか隠れて出這入でへえりする処は何処だえ」

海「彼処あそこの諏訪様の鎮守の社の裏に一段高い土手がある、其の下に石で拵こぎえた水門口のよ
うな処がある、彼処あそこの下へずうと手を入れてぐうーとこう当てると、人差指の当る程の石
の凹くぼみがある、其所そこへ中指と人差指で下へ押すとばちんと弾はじけて中へ這入る所があるわい」

半「違えねえ、そうく彼処は溝か何かで水でも流れる所と思つて居た、おや足音が聞えるぜ、さアく頬被をしねえ、頭が出るといけねえから」

と半治は懷中から手拭を出して被せる、其のうち床を出して其の上へごろりつと海禪坊主横になりました。半治は納戸へ這入つてぴったり襖を閉て切りますと真闇になりました。暫く経つとばた／＼と草履でも穿いて来ましたか足音が致します。土間口の戸に手を掛けて、

小兼「半治さん此所を開けても宜いのかえ」

と漸々上総戸を明けて忍び足で中へ這入りまして、板の間から小兼は上りまして、手探りで探り寄ると、敷布団に手が障りましたから、ぴったり枕元へ坐りまして、

小兼「一寸半治さん、お前は本当に愛想もこそも尽きた人だよ、お前のような不人情な人と知らず私は欺されて斯んな知らない土地へ来て耻ツかきな、今更江戸へも歸られず、お前に見捨られるよりは海へでも飛込んで死ぬ覚悟で居ますから、私が命を捨る代りにおめくくと彼のお龜という女と夫婦にして置かないよ」

海禪は小さい声で「宜いから此方へ這入れよ」

小兼「何をぐずぐずいうのだえ、すっぱりお前の性根の据つた挨拶しておくれな、挨拶次

第で私は只は置かないよ」

と懐中からすうと取出しまするは剃刀二挺で、これを合して手拭で巻いて手に持って、兼「さア挨拶をお聞かせよ」

海禪は又小さい声で「挨拶するから此方へ這入れよ」何んな声で云つても訛が違いますから露顕しそうなものだが、そこは夢中で小兼が問掛けると、半治は一間から飛出しまし

て、
半「さア此奴らア太え奴だ」

兼「お前は其処に居たんだね」

半「斯ういう事も有ろうかと思つて居た、さア坊主太え奴だ、手前は衣を着る身で斯んな事をしやアがつて太え奴だ」

海「愚僧は何も覚えはない」

半「無えも糞もあるものか、己の女房を引摺込んだは汝了簡があらう、さア小兼覚悟しろ」
兼「私はお前と思つて」

半「この畜生めら、太え奴だ」

と云いながら傍にあつた丸絛を取つて海禪坊主をぐるぐると巻に縛るから、

海「痛^{いて}えな、本当に縛^らるのか、苛^{えら}いな、どうも」

半「じたばたしやアがるな、覚悟しろ」

海「縛^らんでも宜^ええが」

半「なんでえ覚えて居やアがれ」

海「どうしても縛^らるか」

半「小兼、手前^{てめえ}も縛^らるが些^{ちつ}と了簡がある、さア蠟燭があるから手燭をとって本堂へ灯^{あかり}を持つて来い、やい坊主、さア来い」

海「これく何をする」

半「何も鮓^{たこ}もあるものか、さア一緒に往^いけ」

とずうと本堂の方へ引摺^ゆって行きまして、居間から直ぐ傍^{わき}の本堂の前の畳を二畳上げて、

揚^{あげ}板^{いた}を払^はって明けるから海禪驚きまして、

海「其処^{そこ}を明けてはならん」

半「此の中へお蘭さんを生埋^{いきうめ}にしやアがつて」

と固^もより一旦明けてありますから直^じき明きました。

海「其処^{そこ}を明けてはならんと云うに」

半「成らんも成るもあるものか、能くもお蘭さんを生理にしやアがったな、此の坊主、太え奴だ、お蘭さんの代りに此の中へ這入れ、間拔めが」

とずる／＼引摺るが、海禪は縛られて居るから動くことも何も出来ない。

海「これ／＼何を」

というばかり、小兼も手伝つて中へ入れる。

兼「此の海禪坊主め、太い奴だ、お嬢さんを生理にして」

海「そんな事をいっても此処にはお蘭さんは居ねえ」

半「居るもんかい、天神山に居るわい、さア小兼来い」

と海禪を穴の中へ押込んで、上から石蓋を整然として、ずうと出て行きました。海禪坊主は好い面の皮だ、天罰とは云いながらとう／＼穴の中へ封じ殺されるように相成りました。

三十九

此方はお話二派になりました、竹ヶ崎南山の粥河が賊寨では、かの夜（山三郎と果し

合の夜）同類の者一同は寄集り、ずうつと居並んで居ります。前の方にも側の方にも一杯でございます。床の間の処に縁取袴へりとりばかまを穿き、打割羽織ぶつさきばおりを着て腕を組んで頻りに考えて居るのが粥河圖書で、傍そばに居る千島禮三が、

禮「大夫如何成たいふいかされました、お歸りになった後、種々御様子いろいろを伺つても一言のお答えもなく、只考えてばかり入らつしやるが、今晚既に小原山へお出いでの折お供して参ろうと申したを、いや供は入らんと仰しやるから、心配しながら皆々ひか扣ひかえて居つたが、お歸り有つてもとんとお話がないが、何ういう訳ですか、甚だ心配で、山三郎は我々の悪事でも存じて居りますかな」

圖「何も彼も彼は残らず存じて居る、女房お蘭を真堀の定蓮寺へ生埋いきうめに致した事も彼は存じて居る」

禮「へゝえ一体彼はなんではございせんか、浦賀奉行に縁故ちなみがあるとちらりつと聞きましたが、探索方でも致して居りますかな」

圖「いやゝ彼はなかく上へ諂へつらつて名を売つて男になろうという卑劣な奴でない何うも彼奴の魂には驚いた」

禮「彼は小原山へ参りましたか」

圖「参つたとも、先へ参つて居つた」

禮「ふーん度胸の好い奴で、一人、ふーん併し貴方が乗馬で彼は驚きましたろう」

圖「ところが先方も乗馬で」

禮「へえー、馬の乗り様を心得て居りましたかな」

圖「馬は私よりは余程上手に乗る、蒔絵の鞍に月毛のたくましい馬に跨がって、馬足を止めて小原山の中央に立つて居た時は、実にどうも敵ながらも、天晴の武者振で中々面の向け様も無かつた」

禮「ふーん、はてな、そこで貴方が銚子屋に於ての無礼の次第をお問いなすつて」

圖「私も其の無礼を問掛けて、何故妹をくれられんかと云うと、そこは彼奴男で、盗賊だから遣らんとは云わず、可愛い、妹だから貴公の女房に遣つて又生理にされるが不憫じゃからといって、悪事を云わず、実にどうも感服致した」

禮「それを知つた上からは助けては置かれませんか」

圖「尤も助けて置かれんから太刀の柄に手を掛けて馬を進めると、山三郎も柄に手をかけじり／＼と寄つたが中々隙はない」

禮「成る程、彼奴は剣術も余程出来まするか」

圖「いや私わしよりは余程剣道は上だな」

禮「ふーん、残念ですな、なれども貴方は飛道具を持って入らっしゃったから」

圖「馬の鞍へ種が島を附けて行つたから、打落そうと思つたら、先方むこうもどっこい此方こちにもと小筒を出した時は実にどうも驚いたよ」

禮「成程々々、ふうーん」

圖「仕方がないから馬から飛下りて、これまでの悪事の段々何も彼かも知られた上からは貴公の手に掛つて死ぬか、左もなくば縄打つて八州に引渡せと云つたら、私わしは縄を取る役人でないから縛ることは出来ん、改心すれば私わしが妹よりは優まさつた女房を持たせよう、私わしが媒な人こうどになつて生涯親しく交際つきあおうじやないかと、実に情なさけの辞ことばで中々感心致したな、私わしもそこで真実改心する氣になつて、これより頭髮あたまを剃りこぼち、麻の衣を着て鼠色ねずみの頭陀ずだを掛け、行脚の僧になつて飛驒の高山へ立越えると誓つたが、此処なにとぞに居る銘々も何卒心なにとぞを改めて山三郎の其の厚い心を無にしない様に、主しゆうあるものは主しゆう方かたへ、親あるものは親ほうの方へ帰参して、これから正しい道を歩いて真人間になつてください、あゝどうも実に弱つた」

禮「ふむーん、それじゃア貴方いよく愈々出家をなさるのか」

圖「はい、明夕景みよゆうに何卒なにとぞ吾が隠れ家へ御出で下さればお別れの酒盃さかずきを頂いて、臟腑を洗

い清めて山を下りたい、坊主になつた姿を見て貴方喜んで下さい、我等もお顔を見て発ちたいと云つたら、侠客じゃなア、明日夕景から必ず参ると斯う云つた、明日夕景山三郎が参るから其れ迄に剃髪して法衣を着る心底じゃ」

禮 「ふむー」

圖 「さア皆は何うかな、改心して堅気な者になるか」

禮 「皆も聞いたか、大夫はお覚悟の御心底だが、どうだい」

手下 「大夫が御改心なら仕方がねえ、山を下りようか」 「いや己は今更盗人を廃るのは厭だ」

と大勢ごたく相談して居りますと、千島は、

禮 「大夫、私は此の山は動かねえ、私も千島禮三で、仮令相手が強いと云つても多寡の知れた素町人、此処へ来ると言うが幸い、どうせ細つた私が首だ、山三郎と刺違えて死ぬ分の事、又首尾好く山三郎を仕止めれば此の山は同類を集めて、毒を喰わば皿まで舐れで、飽くまでも遣り通します、貴方それでは余り尻腰の無えというもんだ、私は否だ、貴方その御了簡なら何処へ行くとも勝手になさい」

圖 「汝は何うあつても改心は致さんか」

禮「改心しても最^もう身動きも出来ん程悪事をして、何^どの道^{かみ}お上の手に掛^かつて素^そ首^{くび}を刎^はねられる身の上、よしんば大夫が今坊主になつても、粥河圖書が在俗の時分是々の悪事があるといえ、法衣^{ころも}の上から繩に掛^かるは極^こつて居る、今改心しても駄目^なですぜ、やい皆^{みんな}はどうだい、山三郎と刺違^さえて死ぬ心底^{こころ}か、皆^{みんな}は何^{なん}うだい」

同類「こりやア千島さんの云うのが尤^なもだ、私^{わし}らもお前^{まへ}さまと同意^{どうい}で、遣^やるなれば共々飽^あく迄^{まで}も遣^やりましょう」

圖「ふん左様^{さよう}か、そう度胸^{どきょう}が据^{すわ}つたら宜^いい、そうなら話^わすが実は己^{おの}も衣^いを着^きて飛驒^{ひで}の高山^{たか}へ行^ゆくと云^いつたは嘘^{うそ}だ、明日^{あす}山三郎^{さんざう}を欺^{おぼ}き遂^おせて此^この山^{やま}へ引摺^{ひきず}込んで、斃^{なぶ}り殺^{ころ}にして遣^やろうという謀計^{ぼうけい}が胸^{むね}に浮^うんだから、今夜^{そら}空^{なき}泣^なして改心^{かいしん}の体^{てい}を見^みせたの^のだ^だが流石^{さすが}は町人^{ちやうじん}、智^ち慧^ゑは足りねえ、そんなら行^いつて見届^{みと}けてやろうと高慢^{こうまん}振^ふつて吐^ぬしたが、弥^い々^{よく}明日^{あす}の夕^{ゆふ}來^きた時は寄^よつてた^たか^かつて腕足^{ぶんじほ}を踏^ふ縛^ばつて、素^すつ裸^{はだか}にして頭^{あたま}の毛^けを一本^{いっぴん}々々^{々々}引^ひ抜^ひいて、其^{その}上^{うへ}で五分^{ごぶん}だめしにしな^しなければ腹^{はら}が癒^いえねえ」

禮「そいつア面白^{おもしろ}れえ、大夫^{だふ}が其^{その}の了簡^{りょうかん}なら私等^{わしら}は十分^{じゅうぶん}に働^{はたら}きます」

と猶種々^{いろうく}明日^{あす}の手筈^{てしほ}を謀^{しめ}し合^あせて居^ゐりますと、忍^{しの}び足^{あし}で來^きた江戸屋^{えどや}半治^{はんぢ}が縁側^{えんがわ}から、半治^{はんぢ}「御免^{ごめん}なせえ」

禮「誰か」

半「へえ私わっちで西浦賀の半治という者で、粥河様のお宅は此方こちらで」

禮「肝きもを潰した、何処から這入った」

半「縁側の戸が開いて居たから其処そこから這入へえつて、大層大勢様で、お賑にぎやかで」

禮「怪けしからん奴だ、何処から這入りやアがった、締しまりある場所を這入りやアがって、門でも乗越えて這入ったか、他に這入れる訳はねえが、此奴こいつ、手前てめえ賊だな、いや賊だ、手前てめえ盗賊に違いあるめえ」

四十

半治「冗談いっちゃアいけねえ、賊はお前めえさんたちだ、私わっちは西浦賀の女郎屋の半治という者で、孩がき児の時分から身性が悪くつて、たびく諸方ほうほうに燻くすぶつて居て、野天博奕のてんぱくちを引ひっさ攪らい又ちよつくらもち見た様な事も度々たびく遣つて、随分悪い事の方にやアお役に立つ人間だから真堀の海禪さんに此方こなたへ紹介ひきつしてくれといつて手紙を書いて貰ったから、是を讀んで見ておくんなせえ」

禮「妙な奴だな、大夫たいふこれは海禪の書面で、むゝなに〜」

と千島は海禪の手紙を読下して居りますと、圖書はじろりつと半治を睨ねめ付けて、

圖「これ手前は江戸屋半治というか、手前は東浦賀の石井山三郎には恩分おんぶんを受けて居る身の上だな、手前これへ山三郎の犬になって来たな」

半「冗談いっちゃアいけねえ犬なんてえ」

圖「いや犬になつて来た此の書面は海禪坊主の書いた書面でも有ろうけれど、どうも手前は訝いぶかしい、これ〜此奴こいつを縛たづつてな糺たづして見ろ」

半「これ〜冗談いっちゃアいけねえ、糺しても何にもねえ、詰らねえ事をいっちゃアいけねえ、一体海禪さんが此の手紙を私わっちに書いてくれたにやア訳があるので、海禪さんが此の手紙を書いたの、なんです、私は一体小兼わっちという旦那も御存じの江戸の芸者あね、彼れと夫婦約束して女房にしようと思つたが、此の頃変に厭になつて何うかして江戸へ帰けえそうと思つて手段てだてをしたが、小兼めぎやア〜狂きちげえ人の様になつて私わっちを殺すつて追掛おっかけのさ、私も怖わっちかねえから真堀の定蓮寺へ逃込んで漸々の事で助かつたが家うちを出る時ア兄貴きょうでえと喧嘩アして兄きょうでえ弟の縁を切る、二年越も世話になつた女と一緒になるも厭になつて、まごつき出した日にやア、何うせ此の世にやア望ねみは無ねえ、旨うめえものでも沢山たんとくら喰つて、面白

い思いをして太く短かく生涯しやうげえを楽に暮して、縛られ、ば百年目、此の粗末な素首そつくびを飛ばして帳消ちやうけしをして貰うばかり、お役に立つか立たねえか知らねえが、まア遣つかつて見とおくんなせえ、お願ねげえだから」

圖「手前の申す事は採上げとりあげん、手前は山三郎の犬に相違ない」

半「縁側で聞けばお前さん方、山三郎を生擒いけとりにするなどというが、それは駄目ですぜ、何故なりやア彼奴あいつは滅法力がある、十八人力あると云いますア、浦賀中で聞いて御覧なさい、劍術も随分上手で三十人位は一緒に掛つてもポン／＼遣られて、逆とても寄附く事は出来んが、そこは私わっちが孩児がきの時分から気性を知抜いて居るから、彼奴あいつを欺だまかす事ア訳はねえ、今迄も其の術てで無闇に金銭ぜにを遣わせたが、彼奴あいつには一寸ちよつとした呼吸のおいやり方があるの、只でもいかん、妙においやり方がある、早く云やア多勢おおぜいで奉たてまつつて一杯飲ませる、酒の中へ麻酔薬しびれぐすりを入れて飲ませるので、これを飲ませれば身体が利かん、此処にはお医者もお出いででしようから毒酒を調合してお片附けなさえ、それも初めからでは何うして中々取附とつけねえ、ぽん／＼遣られる、彼奴あいつを瞞だます事は半治は上手で」

圖「左様なことを云つても己は用いん、成程小兼は存じて居いるが手前とは一方ならぬ馴染の中で、それで今更捨てるなどとは何うして／＼真に受けられん」

半「いゝえ本^{なん}当^だで、何^{なん}のつけに嘘^{うそ}などを吐^つきますものか、そりやア海禪^{かいぜん}さんも証^{しやう}拠^こ人で」

と云い争^{まじ}つて居る所へ、縁側^{えんがわ}から駈^か上^あつて来た小兼^{せうけん}は、帯もずるゝ髪^{かみ}振り乱^{みだ}して片手^{かみそり}には剃^{かみ}刀^{さき}を持^もつて、顔^{かほ}色^{いろ}を變^かえ、

兼「さア半治^{はんぢ}さん此^こ処^こへ出^でなさい、呆^あれ返^かつて物^{もの}が云^いえない、お前^{まへ}のお蔭^{かげ}で海禪^{かいぜん}さんにま^だで瞞^{だま}されて、さアもう許^{ゆる}さない、お前^{まへ}を殺^{ころ}して私^{わたし}も死^しぬから此^こ方^{かた}へお出^でで」

半「やアゝゝ来^きやアが^がつたな、何^{なん}処^こから這^へ入^いつた、此^こ奴^{やつ}めが」

兼「何^{なん}処^こから来^きても好^いい、さア女^めの一^い念^{ねん}だ、誰^{たれ}れでも止^とめりやア叩^{たた}ツ切^きつてしま^まう、さア悪^{あく}性^{しょう}男^{おとこ}此^こ方^{かた}へ来^きい」

半「これ^これ^れ好^いい加^か減^{げん}にふ^ふざけろえ、まア危^あねえ、そん^そな刃^{やいば}物^{もの}を持^もつて、これ^これ人^{ひと}様^{さま}の前^{まへ}だ、ま^まア此^こ方^{かた}へ来^きねえ」

と半治^{はんぢ}は立^た廻^{まわ}りながら小兼^{せうけん}の油^{あぶら}断^たを見^み済^すまして剃^か刀^{さき}を叩^{たた}き落^おし、手^て早^{はや}く搔^か取^とりて、半「さア、もう大^{だい}丈^{ぢやう}夫^ふだ、此^この阿^あ魔^ま女^めが」

といきなり髻^{たぶき}を手^てに引^ひ攪^かんで二^{ふた}つ三^{さん}つ撲^{なぐ}りつけ、それ^{それ}から其^そ処^こら^らを引^ひ摺^ずり廻^{まわ}して、ひいゝ泣^なく奴^{やつ}を打^ぶつたり蹴^けつたりして、帯^{おび}を取^とつてぐるゝ巻^まにし、繩^{なわ}を持^もつて来^きて、垣^{かき}根^ねの傍^{わき}の榎^{えの}の大^{だい}木^きに縛^ばり附^つけて、其^そ処^こにある棒^{ぼう}を拾^{ひろ}つてびしゝゝ打^うちますと、

兼「さア殺せ〜、殺せば汝幽霊になつて喰殺すぞ」

と金切声を挙げて泣き叫ぶのを、

半「なアんの汝、殺せも何もあるものか、幽霊にでも何んでも勝手になれ」

とびしやり〜と打ちますから、

圖「まア〜静かにいたせ、どうも酷い奴だ、手前ほんとうに殺す気か」

半「へい」

圖「成程手前は酷い奴だ、全く手前は同類になりたいか」

半「へい、なりてえから願うんです」

圖「本心か」

半「本心の何のどつてお前さんも疑ぐり深え、私が本心の証拠には、山三郎が来たら手初めの奉公に、一番山三郎を瞞かして見せましょう」

圖「むゝ本当なら耳をかせ」

半「へい、うむ成程承知しやした、一番すつかりと遣つて見せましょう」

圖「その通りにしろ、山三郎を瞞すことは其の方に申し付ける、奉公初めに欺き遂せて毒酒を飲ませろ」

と多勢おおぜい寄集り、明日あすの手配てくばりをして居るうちに夜が明けると、眞葛周玄の調合で毒酒を製こしらえ、これと良い酒とを用意して、粥河を始め千島禮三、眞葛周玄までも、実に青菜に塩というような、皆我みんながが折れて改心というような顔がんしょく色いろをして、山三郎の来るのを待つて居りますと、此方こなたの石井山三郎は実に強い男で、唯ただ一人で南山の粥河の賊寨ぞくさいへ其の日の夕景に乗込んで参るといのお話、一寸ちよつと一息つきまして、又申上げます。

四十一

引続きましてお聞きに入れまする、竹ヶ崎の南山へ山三郎一人で乗込んで参るといのお話、一体山三郎は釣つりの極好ごくきな人でございますから、此の日も宅たくを出まするとき、釣つりに行ゆくような風を致して、一寸ちよつとした結城あわせの袷あわせに献上博多の帯をしめて、弁当箱は籠かごに出来て居ります。竹の編物で極凝こった弁当でございます、これを携さげまして、關兼元の無銘摺すり上げ一尺七寸ばかりの脇差を挿さしまして、日和下駄やがを穿きいて竹ヶ崎へ掛かつて参ると、とつぷり日が暮くれまして、月の出でようという前で、頓やがて粥河が屋敷の大門を這入はって、二重門の所へ立ちまして、

山「お頼み申すく」

というと奥では待構えて居た一同が、此の声を聞附けまして、

圖「これく千島、表に声がするが山三郎が参つたようで」

禮「宜しゆうございます」

圖「半治支度は好いか」

半「へえ、すっかり出来て居ります鉄砲へも玉込をして置きました」

圖「それまでには及ばん、酒の中へ毒は這入つて居るか」

半「へえ、入れて置きました」

圖「これく千島、手前腰の物を差して往かん方が宜い、無刀の方が却つて気を許すからなそれに一人では宜くない、長治と二人で出ろ、重々しくな、粥河圖書がお出迎にまかり出ますのだが、只今剃髮致しまする支度をして居りますからお出迎には出ませんが、速かにお通り下さい、手前どもは粥河が同類でござる、貴方の思召を粥河から逐一承り、頓と改心致しましたと、好いか神妙らしくいえ」

禮「心得ました」

とつかくと二人で参つて門の開戸をギイと左右へ開けます。

禮「は、ア宜うこそ御来駕で、東浦賀の石井氏で入らせられますか」

山「はい、山三郎で、昨夜小原山に於てお約束致したから罷り出ました、何うか粥河様へお取次を願います」

禮「は、ア、昨夜粥河圖書御面会后立歸りまして承りました、実に貴公さまのような義

侠のお心掛のお方はない、実に何うも忝ない御教訓であつたと粥河圖書感涙を流してな、

今日は頭髮を剃こぼち、麻の法衣に鼠の頭陀で行脚の支度を取揃えまして、唯今山を

下りまする、その改心の様子を御覽に供えましたら石井氏は嘸かしお悦びであろうと其れ

のみ申して居りまする、手前は千島禮三と申し旧金森家に居りまして小納戸役をも勤めま

した者で、今日より貴公様の御教訓に依り、改心致して真人間に相成ろうと悦び居りま

する仕儀、これ皆尊君様の御説諭に基きますこと、実に何ともはや恐れ入りましたこ

とで、粥河が先刻よりお待兼申し居りまする、さア速かにお通りあらせらるゝ様に、おや

何だ、何処かへ行つて居ねえわ、山三郎殿は来たのかと思つたら何の事だ」

長「居ねえつてお前が頭を土間へくツつけて、ぐずぐず云つてる中、頭を跨いでつうく

先へ行つて仕舞つたのよ」

禮「なんだ、そんなら左様と早くいうが宜い、馬鹿くしい」

と千島はぶつ／＼云つて居ります。此方こなたの山三郎は中々待つてなどは居りません、ずん／＼玄関口から案内もなくずうつと奥へ通り、粥河圖書の居ります二間けんの大床おおどこの檳榔びんろう樹じゆの大きな柱の前の処へびつたり坐つて、体を据えました。これは若し乱暴でも仕掛けたときは柱を楯に取つて多勢おおぜいを相手に切捲きりまくろうという、そこで床柱の際きわへ坐りました。前へ釣の弁当箱を置きまして座を占めました坐相ざそうの見事なこと実に山をゆり出した様な塩あ梅んばいで、粥河は先まず驚おどきまして、

圖「これ／＼千島、これへお出いでになるに御案内もせんで何ういうものだ」

禮「御案内致そうと心得まして、彼れあへ参つて挨拶をして居るうち、頭の上を跨いで奥へお出いでで、驚おどきましたので」

圖「怪けしからん、届かん事ではないか、これは／＼宜ようこそその御尊来で、粥河圖書身に取りまして実には大悦至極にござります、昨夜の御意見に附きまして、同類の者へもそれ／＼尊公様の思召おぼしめしの通りを申し聞けました処が、皆々感涙を流して有難がりまして、実に賊を働きますは耻入つたる事である、必らず改心の上親ある者は親方へ、主しゆうある者は主しゆう方たへ帰つて元の職業を致すと、二百人も居ります中なかに一人も不服の者なく改心致しましたは、偏ひとえにあなた様の義侠の御親切なるお心が銘々に感通かんつう致しました訳でござりま

しよう、実に此の上もない有難い事で、現に御覽の通り同類の者は昼程一時に出ますと目立ちますから、皆それ〱夜よの五つ時までには下山させまして、只今残り居ります者は千島禮三、眞葛周玄に、長治と申す旧来居ります者と、其の外十四五人居りますばかり、斯かくの通り畳建具なども皆積上げまして、皆近辺の貧なる百姓に分け与える心得で、金銀なども悉く遣わしましたが、まだ〱残り居ります訳で、御安心下すつて何卒どうかあなた様の御お盃さかずきを頂戴致して、穢けがれたる臟腑を洗い清めまして速すみかに立退たちのきまする心底で」

山「いやそれは何うも辱かたじけのうございます、お前さんが改心して下されば、私も誠に申した甲斐あると申すもの、さア速かにお立退きなさい、下山げざんの処を山三郎これに於て篤とくと見ましよう、さAお立退きなさい」

圖「は、ア畏かしこまりました、就きましては甚だ差上げる物もござらんが、聊いさか酒肴を取寄せお待まち受うけを致して居りましたから、何うぞ一盞さんお傾け下され、さ周玄これへ」

というと、眞葛周玄は恭しく足附の高膳たかぜんを山三郎の前へ据えまして銚子を持って参りました。其のうち一つは毒藥の仕込である酒、一かた方は他ほかの者が飲むように銚子を替えて持出しました。実に山三郎の命あやうの危あやういこと、風前の灯火ともしびのようござります。

四十二

粥河圖書は丁寧に手を突きまして、

圖「そのお盃を何卒石井氏一つ召上つて私へ頂戴いたしとう存じます、何うか御盃を頂きたいもので」

山「御盃などと大形なことを云つては困ります、私は一体酒は飲まん性で」

圖「でもございませうが、切めて一杯召上つて私へ頂戴致し度う」

山「いや、私もまるつきり飲まんのではないが、お前さん処の酒は飲みません、お前さんが他から盗んだ穢れた金銭で買った物を、正道潔白な山三郎の口へ入れては私の臍腑を穢す様な訳で、私は厭だ、盗賊の物を飲んだり食つたりするのは厭だ、濁しても盗泉の水を飲まず、其のくらしいの事は山三郎存じて居ります、其方で勝手に飲みなさい、私は釣に行きますとき、何時でも母親が旨いものを拵えてくれて、肴は沢山はないが、此方はこちらで勝手に遣ります、其方はこちらで勝手に喫りなさい」

と山三郎は持参の酒を盃に出してぐびりぐびり飲んで居る。

圖「いやこれはくどうも、それではどうも折角の心入も無になります、御意には入

りますまいが、元より尊君の様なる正道潔白なるお方に差上げますには、盗取りました穢れた金銀をもつて求めました酒肴ではございません、是は主家金森家改易の折、皆々一家中の者が引取ります節に分配しました金子で、それを持ちまして手前共が求めました酒肴でございます」

山「矢張それが穢れて居ります、主家改易で皆々主家を引取るとき金子を分けるなどというは、最うそれが穢れて居るので、主家改易に際し金などを持って出る心が一体穢れて居るのだ、其の分けた金をもつて買った物は私はどうも食いにくいから、私は矢張持参の物を此方で勝手に用います」

圖「ではござましようが、せめて麴酒を一盞だけでも召上つて」

山「いや、私は勝手に、どれ私がお前さんに酌をしましょう」

と毒酒の方の銚子をさしますから、

圖「それでは恐れ入ります、いえこれは」

山「でも折角だから私がお酌を」

というから粥河はこれを飲んでは大変と顔色が変わります。其の間海の方に月は追々昇つて来ますと、庭の榎に縛られて居る小兼が、

兼「旦那アーその酒を飲むと毒が這入つて居ますよー、お前さんを殺そうといつて皆が企んで居ますよー、旦那アー油断してはいけませんよー」

という声が泣き噎れまして、実に声は立ちませんが、ひツ／＼と喚きまする声が山三郎の耳に這入るから、と向うを見ると垣根の傍にある榎の大木に縛り附けられている女が有るから、

山「あの女は何です」

圖「へえあれは何でござるか頓と心得ません」

山「お黙んなさい、お前は何だ、此の家の主人で此の庭はお前の庭じやアないか、自分の庭内に、婦人が彼の通り縛付けられて、ひい／＼泣いて居るのに、主人が知らんで済みますか」

圖「いや彼れは江戸屋半治と申す者と約束のあるとか申す芸者で、何か半治が不実を致したと申し、刃物を持って追かけて参つたを、半治が立腹して刃物をもぎ取り、彼が縛りまして彼の様に致して置くので、手前に於ては聊か心得ません」

山「黙れ、貴公は何と申した」

圖「へえ」

山「いやさ改心して頭髮あたまを剃こぼち、麻こもの法衣ころもに身を脩やっし、仏心ぶつしんになると云つたではござらぬか、その仏に仕える者が纖弱かよわい婦人を彼あの如く縛あつて置くをなぜ止めん、なぜ助けん、其の許もとの心底いぶかの訝いぶかしき事は疾とくより存とじて居る」

と云いながら、側に置いた関の兼元を取つてひらりと抜いて、

山「さア一緒に往つて見なさい」

とぐつと抱上げましたから、圖書は手込になるまいと手足を働かして見たが迎とても敵かなわん。

例の拾八人力あると云う山三郎の腕に力を籠めて締附けられたのだから耐たまりません、うんと云つたばかりの有様を見て、傍そばの者も驚きまして呆氣おぼろに取られて見て居りますと、山三

郎は圖書を小脇に搔い込んだまゝ、大勝おおまたに歩いて庭に下りようと致します。千島禮三は此

の体ていに驚いて立上るのを山三郎は振返りながら関の兼元を突附けて、

山「さア、じたばたすると片端かたっぱしから踏殺すから左様心得ろ、手前らは己を此処へ誘おびい

て、俘虜とりこにして命を取ろうとした企たくみの罖わなへ、故意わざと知つて来たを気が附かんか、大篋おおべらぼう棒

め、ぐずぐずすれば素首そつくびを打落すぞ」

という其のけんまくの怖ろしいのに盗賊共は只最もう胆きもを挫ひしがれましてきよとくして居

りましたが、其の中に千島禮三流石さしがに度胸すわも据つて居りますから、

禮「それ鉄砲を」

と云つたけれども二拾一挺ある鉄砲へ玉込をして置いたを、江戸屋半治が残らず繩に掛けて谷へ投げ込んで仕舞つて、鉄砲は一挺も無いからどたばたして居りましたが、粥河の手箱の蓋を開けると火繩の附いた予て用意の鉄砲があるから、これを取つて千島禮三が山三郎に狙を附けると、山三郎は振向いて身構えをする、所へ江戸屋半治は飛来つて、櫛の三尺ばかりの棒をもつて、ずんと力に任して千島の腕を打ちましたから耐らない、千島はからりつと鉄砲を落す、其の途端に引鉄は下りましたから弾はどんと発して庭石へ当りました。千島は同類と思つた江戸屋半治はひっくり覆つたので猶更驚きまして、周玄長治とも／＼狙えまわる、同類の奴らは取る物をも取らずばた／＼逃げ出して南山を下りると、予て江戸屋半五郎が八州へ御届に及び陣屋へ知れましたから、それと云つて浜町に居ります組屋敷の与力同心衆が出張致して、山の下に整然と詰めて居るから、どか／＼下りる奴らは忽ちに御用／＼と造作もなく縛られました、多勢ですから一人宛は縛られない、五六人ぐらいずつ首つ玉を括して、宛で酒屋の御用が空徳利を縛るようで、ばた／＼同類の者は揃められました。

四十三

所へ半治は山三郎の側へ駈け出して来て、

半「旦那お怪我がなくなつてお目出とう、実に先刻からお怪我をなされはしまいかと心配しました」

山「半治か、手前は何故此所へ来た」

半「へい、誠に何うも、貴方のお言葉を背きますようですが、実にお案じ申して参りました」

山「これ半治、聞けば手前は粥河の同類になつて小兼を縛付けたというが、何うしたのだ」
 半「へい、実は旦那をお助け申そうとして小兼と相談づくでした事で、昨夜兄貴の処へあなたがお出で、明日竹ヶ崎の南山へ行くが、一人でも子分や縁者の者をよこすな、よこすと向後足踏はしない絶交だ、と斯う旦那が仰しやつて、兄貴も心配して、旦那にお怪我があつてはならんと一通りならねえ苦勞して居る様子を見ましたから、私は猶驚いて、旦那に御恩になつた恩返しは此の時だ、命を捨てても旦那にお怪我のねえようにと考えましたが、お前さんは云つた事を反故にしない性だから、一人でも往けば以来江戸屋の土台

は跨がねえと仰しやるに違えねえ、兄貴も五十一にもなつて旦那より他に力に思う者はねえ、私はやくぎな人間だから、兄貴と縁切になつて出て仕舞つた所が兄貴も困りやアしめえ、こりやア一番縁を切つてお味方をしようという考えでしたが、そこが一人の兄貴弟でございませうから、私の様な斯んな人間でも、容易に勘当するの縁切にするなどという事もあるめえと、小兼と言ひ合せて、済まねえ事だが私が縁切と云つたら、泣いた事のねえ兄貴も涙ぐんで兄貴弟の縁を切り兼ねて居るのを、私が縁切状を書いて飛出した訳ですから、私とは生涯付合つて下さらねえでも仕方がねえ、唯兄貴の処へは何卒相変らず来て下すつて力になつて遣つて下さい、然うすれば誠に有難い事でございます、この山へ入込むのも容易にやア出来ませんが、定蓮寺の海禪坊主が疾うから小兼に惚れて居ることを知つてるから、小兼と馴合い、二人ですつかり欺かして彼奴に紹介の手紙を書かせ、それから躑躅縛つて、お蘭様を埋めた棺桶の中へ投げ込んで、石蓋をして畳を敷いて来ましたが、此所へ来て見ると、粥河の畜生中々本當にする奴じゃアねえ、何でも山三郎の間諜だくと云つてたが、その中小兼が剃刀を持つて暴れ込んで、切るの突くのと騒いだので真に受けて、何うしてく其れまでにするにやア容易じゃア有りません、憫然だが小兼を縛り附けて、加減して居ちやア露われるから本當にびしゃく思ひ切つて殴つたが、小兼は

定めし苦しかつたらう、まア夫婦のものが斯う遣つて心配して、旦那にお怪我をさせぬえとおもつてねえ、お腹立かは知らねえが、二人のものが言葉に背いて此処へ来たから、これからはもう構わねえと仰しやつても仕方はねえが、あなた何卒兄貴の処は何にも知らねえのだから何分にもお頼み申します」

山「左様かい、まア二人の者が己を助けようとそれ程に思つて此の山へ乗込んで、まア小兼、手前は昨夜から縛られたか」

兼「はい、旦那此の粥河は私の母親の勤めた岩瀬様のお嬢様の仇敵だから、私は死んでも宜いから、半治さんどうか旦那にお怪我のないようにお役に立つて働いておくれと話し合いで来ましたから、縛られるもとく覚悟だし、引撲かれて骨が挫けても宜いと思つて、蚊に螫れるも毒虫に喰われるも我慢しましたが、蛇が出やアしないかと本当にそればかり心配しましたが、まア旦那にお怪我がなくなつて半治さんお前も嬉しかろう」

山「早く繩を解いて遣れ、まア手前等は己がどれ程のこともしねえに、恩人とか旦那とか云つて命に掛けて能くまア斯うして庇つてくれて、それに附けても、これ粥河、此女ア芸者だ、一人はな侠客肌の女郎屋の弟で、斯ういう身分の者でさえも恩義を知つて命を捨てても己を救うというに、手前は何うだ、人を殺し金をぶつたくり、或は追剥ぎ或は他人の

娘を誘拐かどわかして又は辱しめると云う、その悪行というものは、帯刀をする身の上で有りながら、この半治や小兼に比ぶれば汝われは虫よりも悪い奴だ、殊には己が助けて上総の天神山の松屋に匿かくまつて置く手前の女房お蘭は、棺の中で蘇生して手前の手紙を見て自害をさしてくれというを、私が種々いろいろに止めて彼女あれは生いきて居るが、夫の悪事が他たより露顕わかししても、私の口から漏れたとしか粥河は思いますまいから、何うも生きて居ては操が立たんから自害をさしてくれと云った、な、これ仮令たしい悪事を知ったとて人を生埋いきうめにするような人非人にんびにんの其の方でも、夫と思えばこそ命を捨て、も夫の悪事を隠そうとするお蘭の貞節に引替え、よくも己を欺おぼいて多勢おおぜい寄つてたかつて己を殺そうと企たくんで、空々しくも小原山において恥を捨て、草原の中へ土下座をしたが、あの態ざまは何うか、実に憎むべき所業である、さア手前のような奴を助け置かば衆人の害になる、なれども、己は盜賊を斬る役でもなし、又穢そつくれたる者の素首すくびを刎はねるような腰の物は持たん、繩にかけて役所へ引くから左様心得ろ、嗚呼立派な武士でありながら、如何に慾に迷えばとて斯かかる行いをいたして不届至極な奴である、お蘭に愧はじろよ、これで恥を知らんといえば実に犬畜生である、虫よりも劣る奴で憎むべき奴である」

と山三郎力にまかして、前足にかけて二つ三つみ顔を蹴けつけました。

四十四

粥河圖書は山三郎に耻しめられて、顔を土足で蹴附けられた時、あゝ悪い事をしたと始めて夢の覚めたる如く心付きまして、段々前々の悪事を思えば思う程、吾身ながら如何なればこそ斯かる非道の行いを致したか、かゝる非道の夫を仇とも心得ず、お蘭が自害致そうとまでに思いしか、あゝお蘭は蘇生して松屋に居るか、お蘭に何とも面目次第もない事である。と鬼の眼に涙で潜然と草原へ涙を落しますので、

山「何うだ、汝が改心致せば好い女房を世話して遣らうと云つたは松屋に匿つてあるお蘭の事だ、手前全く改心致せば、彼れ程までに思ってお蘭の心を憫然に思い、山三郎媒介いたして連添わせようと申したのだ、なんと山三郎の申した事を忘れやアしまい」

圖「はゝゝはア山三郎殿、拙者がこれまでの悪業、貴公が義侠の言葉に責められると何とも面目次第もござらん、唯今ふツつと改心いたした、その証拠をお目に掛けん」

と圖書は切腹しようと思つたが、無刀で居りますから、突然山三郎の提げておりました所の關の兼元の刃の方へ両手を掛けて自らぐつと首筋をさし附けて、咽喉元をがっくり、

あつと云つて前へのめるから、

山「あゝ粥河汝は自害致すか」

圖「あゝ何も申さん、とても死は遁れん所の粥河で、お蘭を助けて松屋にお匿まい下された事は只今始めて知りました、お蘭の心に耻入りまして、自害致して相果てます、これ皆天命で、素より死刑は逃れぬ粥河、どうぞ繩に掛つて死にたいから、お蘭には能く貴公様より詫をいつて下され」

と血に染つた手を合して山三郎に向つて合掌して、真実の仏心になりましたから、山三郎も江戸屋半治も我を折つて、粥河圖書の様子をみている所へ、ばたくと高張提灯を先に立てまして駈けて参つたのが江戸屋半五郎、お蘭の手を引いてつかくと来まして、

半五「旦那にお怪我はございませんか」

山「半五郎、手前も来たのか」

半五「へい、お前さんに愛想をつかされてもと存じ、私は参りました、今蔭で様子を聞くと半治が昨夜の愛想づかしもお前さんの身の上にお怪我のないようにと思ひ詰めて、縁切に参つたのだと申すので、私は此の垣根の蔭で聞いて泣いておりました、これ半治、手前はまあ能く己に愛想づかしをいつて、来てくれたなア、小兼のも本当と思つた、能くまあ

悪党の粥河を欺かして手前も旦那にお怪我の無えようにして呉れた、有難てえ、今日上総の天神山の松屋へ行つて此のお嬢さんにお目に懸りお連れ申しました」

山「お蘭さんかえ」

蘭「はい」

と云いながら粥河の自害の体を見て自分も直ぐ自害しようと、半五郎が差して居る刀に手をかけますから、

山「お蘭さん、早まっではいかん、今自害する場合でない、まアお待ちなさい」

と止めて居る。粥河圖書はお蘭を見ると両手を合して、

圖「お蘭か、許して呉れ」

と云つたのが此の世の別れ、前へかっぱとのめる。所へ八州の衆が来て死骸に繩をかけて引いて行きました。お蘭が此の体を見まして、猶自害しようと致すを多勢に押し止められ、詮方なくて頭髪をふつり切り棄てまして、其の身は宮谷山信行寺海念和尚の弟子となり、名を妙貞と改めて、今に其の墓は西浦賀に遺つてあります。是にて悪人平ぎまして、浦賀の町々が白浪の騒ぎも無く栄えましたも、皆山三郎が稀なる義侠の致す処で、又半治小兼は目出度く夫婦に相成りまして、二代目江戸屋を相続致して、只今も

つて江戸屋半五郎の家はいえございます。又石井家は妹お藤に養子をして石井三郎兵衛と云い、
今に旧家として富栄えて居ります。

(塙小相英太郎速記)

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 巻の五」近代文芸資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年8月10日発行

1975（昭和50）年1月15日再版

底本の親本：「圓朝全集 巻の五」春陽堂

1926（大正15）年発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号は原則としてそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼の」と「彼」の「と」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わ

りを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：小林繁雄

校正：仙酔ゑびす

2011年3月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

松の操美人の生理

侠骨今に馨く賊胆猶お腥し

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 三遊亭圓朝

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>